は、併合によつて強大になつたフランスの怖るべき競爭者なることを認めて、熱心に戰爭を要求し出した。この輿論の力は、英國の議會及び政府をして、鬪爭の再開を決行せしめた。

條約の實行は、條約そのものと同樣に大切なものである。茲で斷交の責任を究めて見ると、責任は同等ではなく、間もなく難題を持掛けた英國側に遙に重く、これに反して第一統領の方は、單に不信の念を持たれただけのことであつた。

爭ひはマルタ島を中心として生れ、擴大した。英國はアミアン條約の條項實施を拒み、この島を騎士團の大頭目たるナポレオンに返還することを拒んだ。この戰術上の鍵を放棄することを英國は承知しないこと明白であつた。現に今日でも英國はこれを占有してゐる。他方、英國はナポレオンが埃及を放棄したと信ずることを拒んだ。

疑ひは双方にあつて、英國がマルタ島の掌握を固守すれば、ナポレオンは一層地中海に堅固な立脚地を有つことが、フランスにとつて必要なものと考へるやうになつた。

けれども、この時ほどボナパルトは、動搖を見せたことはなかつた。彼の理性は、戰爭の不可避であることを告げるやうであつた。これに反して、その行動は、恰も平和が常に繼續すべきこ

とを豫想してゐるやうであつた。

一九〇三年三月、彼は尙それを信じてゐるやうであつた。彼は印度の商館回復を命じて、ドカーン將軍と共に全艦隊を海上に暴露してゐた。また、同じ月の十三日、テユイルリー宮に於て外交團を前にして、彼はホワイトウオース大使に猛烈な嘲罵を浴せかけ、英國が條約尊重、條約神聖に缺くるところあるを難詰し、言葉によつて英國を脅し、呶鳴りつけ、やがて平和に戀々たるかの如く言葉を和げ、かと思ふとまた、遠慮をしたとて無益だと激昂したりした。

事實、マルタ島は一象徵に過ぎなかつた。地中海が目標であつたとしても、二義的のものに過ぎない。本質的に相容れない論爭は、相變らず同じ點のアントワープにあつた。その論點は最後まで一七九五年の併合に向けられた。ボナパルトは、數箇月間それを忘れることもあり、茫然としてゐることがあつた。しかし、フランスに於ては、誰よりも之を知つて居り、よく了解してゐた。

一八〇五年、モーレーの前で、

『われらが白耳義を保有してゐる限り、英國はわれらに戰爭をするだらう』

と言つた。

既に一八〇〇年の暮頃、レードレル、ドヴエーヌ等と語つて、

『英國は平和を欲する譯には往かないのだ。何故かといへば、フランスがあまり多くを所有してゐるからだ。白耳義、並びにラインの左岸を有つてゐるからだ。それをわれらは保有してゐなければならず、取消しのできない決定であり、その爲め、プロシヤ、ロシヤ、墺帝に對して、必要とあれば、單獨で全部を敵として戰爭をすると宣言してあるのだ』

と述べたことがある。

まことに達見であつて、殆んど豫言の類である。連鎖があり、一筋毎に意味のある過去から演繹される將來は、正にそこにあるのであつた。

統領政治を畫にすれば、眠れる獅子であつた。それも眞に短い期間の休息の睡眠であつた。一八〇三年七月に英國との斷交が完全になり、その六週間後には、第一統領は白耳義に示威的巡回をした。將に戰はむとしてゐるのは、この土地のためであり、遺贈として共和政府から受けた併合地のためであり、永久にそれを放棄しないと決心してゐることを、フランス人に對して喚起

させるための如くでもあつた。

既に一八〇一年のリュネーヴイル條約後のレセプションの際は白耳義代表に向つて、

『カンポ・フオルミオの條約以後、ノルマンデイ人、アルザス人、ラングドク人、ブルゴーニユ人等と同樣に、白耳義人はフランス人である。この條約後の戰爭に、軍は多少悲運の日もあるだらう。しかし、敵が本陣を巴里のサンタントワン街に置くやうになつても、フランス國民は決して自己の權利を讓ることはなく、白耳義併合を斷念することはない』

と說いた。

これは一個の宣誓であつた。戴冠式のそれもこれであらう。敵が巴里の入口に迫つても、ナポレオンはその誓ひを守るのである。帝政史は白耳義保有爭鬪史であり、フランスは英國を降伏させるために、歐洲を征服しないでは白耳義を保有することもできないのであつた。玆にもすべてが相關聯してゐる。

しかしながら、アミアン條約の破裂と共に、平和の大錯覺は消散した。眠れる獅子は、その夢から引出され、不可能の追究が再び始まるのであつた。

(13) 自ら戴く帝冠

戰時狀態は再現した。

しかし、ボナパルトは戰爭をせず、新しい名譽をも得なかつた。英國は、まだ大陸に於て同盟を誘拐するに至らず、聯盟を締結するに、まだ成功しなかつた。英國海峽を距てて、どうして兩敵國が組打をすることができやうか。英國は島内にかくれて居り、その艦隊はフランス船を搜索するが、フランス船は逃げかくれてゐる。

時にフランス海岸で、港が砲擊される。第一統領は、普通の報復手段として、商業禁止、フランス内の英人逮捕などを以てした。幾分理論的な、また困憊と倦怠とを來すこれらの敵對行動は結果を擧げずして、たゞ永續することになるかも知れぬ。そこで、ボナパルトは侵入、海峽渡航、上陸、ロンドンに於てする平和强制の案に立歸り、これに反して、英國では再び内閣を組織したピットが、歐洲聯盟の工作に努力した。

この十二箇月間に、將來が準備され、素描され、之に反して、他方では、過去が再び始まり、一七九八年の時局に復歸し、既に一八一四年の時局が隱見してゐるやうであつた。

フランスは宿命に向つたかのやうに、熱のない、厭々の鬪爭を始めてゐた。人々は結局の時が來て、遂に有利な休息ができるものと信じてゐた。ボナパルト自身も、多大の人氣と感謝とを得させてくれた恩澤のある、この平和を引留めてゐたかつた。

しかし一面に於て、理性が戰爭の不可避を彼に告げてゐた。彼は思想の動搖を見せ、昂奮したり、焦ら立つたり、英人には不屈の意志しかないとおもふと、脅迫的になり、また直ちに破裂回避の希望を有つといふ風であつた。この戰爭が血戰になることを了解せずにゐるにしては、彼はあまりに聰明であつた。彼は運命の法則としてそれを引受け、これに策略を用ひたところで無用であるとした。

では、これを完成するために、誰に賴つていいのであるか。第一統領を差措いて誰があるか。彼が必須の人物でなくなつてゐたにしても、彼はアミアン條約の破れたことで、再び必須の人物となつたのである。

その間に、敵も彼を目標にしてゐた。

彼を脅かすことは、彼の首を一層貴重なものにすることであつた。彼はフランスに政府を與へ、秩序を恢復し、唯一人から出る指揮によつて、國家の元氣を取戻した。否、更に一層强力なものにしたのである。彼がその地位に在る限り、白耳義を彼から奪ひ、昔の國境に復せしめることは困難であらう。

佛人が彼を保存して置きたいと思つてなしたことは、また悉く敵をして彼を倒したいと想はせる事柄であつた。ボナパルトを打破るか、さもなければ、彼を殺す必要があつた。ロンドンの內閣は、冷靜にこの邊の打算をした。贖ひのつかぬ戰爭を短縮するために、この人物を滅亡させるか。それができれば、幾百萬の人命を救ふことにもならう。

英國は金錢を費して暗殺者を募る必要も、刺客に賴る必要もなかつた。執行掛には、全部用意して出て來る者があつた。利害を超越した王黨の第一義的打倒を欲する者から、狂熱の徒に至るまであつて、統領政治の謳歌されることによつて、勇氣を喪つてゐた者も、戰爭の再開と共に、權力簒奪者だとして、打倒の希望を再び持つやうになつた者もあつた。

ヴアンデの亂に洗禮を受けた元氣と、稀有の大膽さをもつて、彼等はブーローニュの本營乃至マルメーゾンの道、乃至テユイルリー宮の門に至るまで、陰謀をもつて迫つてゐた。さうして、それが失敗すれば、却てナポレオンのために第一義的貢獻をなすものとは氣づかないのであつた。

眞の戰時狀態は、だから內部にあつた。

一八〇三年八月二十三日、ジョルジュ・カドウーダルは一艘の英船に導かれて、ビヴイルの絕壁を攀登つた。彼は巴里に入つて隙を窺つてゐた。彼は暗殺を行ふか、第一統領の誘拐を決行しようとした。

政府はまた風前の燈火のやうな危機に面したのである。當時フーシエーは、終身統領に反對して以來不興を受け、もはや警察大臣ではなかつた。しかし、彼は尙糸を引いてゐた。隱栖から、彼は『空中に短刀が充滿してゐる』ことを警告した。それは、もはや單なる陰謀ではなく、廣い意味の陰謀である。ボナパルトに對する憎惡である。それが各種各樣の人を網羅し、無論王黨もあれば、頑强なジヤコバン黨もあり、また英國の友と稱する者もある。平和の破れたことが、この友を焦ら立たせ、英國もこれら反ナポレオン黨を自分の都合の良いやうに操縱した。

その上、際限のない戰時狀態に憤りを發する人の數は、帝政沒落の時まで增加を續けるのであつた。中にも軍部に反對者があつた。軍隊中には、トリビュナなどよりも强硬な共和主義者が多かつた。いはゆるナポレオンの反逆者、裏切者があつた。

ナポレオンは、よくこれを知つてゐた。ランヌやブリューヌを遠ざけ、一方をリスボンの大使に、他をコンスタンチノープルの大使に任命したり、マクドナルドを丁抹に派遣した。マツセナ、サンシール、ラキュエその他についても明瞭であり、ベルナドツトは、いふまでもなく、ナポレオンの近親者と雖も、萬一の場合には彼を裏切るであらう。

革命の古い軍隊、實月事件の將校、ボナパルトよりも前に下の階級から出て、同等と想つてゐる將軍、長官政府時代に、彼同樣に政治に參加した者、以上は第一統領にとつて最も惡い敵である。デュムーリエ同樣離反して、ルイ十八世の許に奔つて、依然として參謀本部側に友人や關係を有つてゐるピシュグリュもゐる。

一八〇四年一月十六日に、ピシュグリュもカドウーダルと同じ道を通つて歸國し、ポリニヤック、リヴイエール等三十歲前後の屈强な人物を伴つてゐた。この人物がモローと會談し、王黨の

カドウーダルと、このホーヘンリンデンの凱旋將軍との間に介在した。モローは名譽の拮抗者たるナポレオンに對して嫉妬を有つてゐたといふよりも、これらの人物の阿諛と煽動に禍されたことが多かつたらしい。

これらの雜多な陰謀者は、ただ彼を打倒さむと欲する念に於て一致してゐるだけであつたが、それでも集るには十分であつた。

ボナパルトは不安の日を送ることが多く、衰弱するやうになつた。彼はそこで目に見えぬ敵に復讐することを考へついた。さうして、この犧牲になつたのがブルボン家王族中のアンギヤン公であつた。

アンギヤン公は、バーデンのエッテンハイムに住んでゐたが、夜中フランス憲兵に踏み込まれて捕へられた。そして巴里に護送され、ただ形式一片の裁判の下に、ヴアンセンヌで銃殺されたのである。公は男性的貴公子の典型であつただけに、感傷的に世間の同情を惹いたこと一通りでなかつた。ジョセフインもジョゼフも、この公のために命請ひをした程であつた。

けれども、悲劇的宿命の星の下に生れた貴公子は、敢なき最期を遂げねばならなかつた。

これはナポレオンを、眞に革命主義の人であると見せしめることになり、ブルボン家の復辟を恐れてゐた國民多數の味方と信ぜしめることになつた。換言すれば、ナポレオンは決して、反革命の反動主義者にはならぬといふ保證を示したことになつた。彼に、絶大の權力を委ねたにしても、われらの身は安全であるといふ考へは、タレーランやフーシエーのやうな凶惡の教唆者のみの信念ではなかつた。

他方に於て、右翼の王黨派は、ナポレオンの殘酷の政策に恐怖した。が、アンギヤン公處刑後一向檢擧の手を王黨に染めることをしないので、從順にしてゐれば安心であるといふ念を鼓吹する結果になつた。事實、王黨の陰謀に關係のあつたアルマン・ド・ポリニヤック等の生命を助けた彼の寛大は却て王黨に信頼の念を新たにさせるのであつた。

この事件は一八〇四年三月二十一日であつたが、同じく二十七日に彼の獨裁政治復興の初めての公式發表があつた。上院は第一統領に十年間の任期延長以上に、彼に帝冠を捧げる動議を提出したのである。

上院は第一統領の生命擁護の必要を說き、陰謀を非難し、ただ一人の生命に懸つてゐるフランスの政治を安固ならしめるために、個人の生命以上の帝制の制度を定めることが緊急のことであることを說明した。上院は第一統領に、帝冠を戴いて貰ひたいことを、請願し、祈願したのである。

かくして、一七八九年に始まつた政治的の迂回の道が終點に達し、君主制が矢張り革命の逃避すべき安全の港であることを發見したのである。

帝政の決定された週は、王黨大陰謀の公判の開かれた週間であつた。カドーダル、ピシュグリユ、モロー等が被告であつて、極端な王黨員、革命から王黨に奔つた將軍、崇拜された革命將軍、かういふ取合せであつたことが、ナポレオンを對立させずに超然たらしめることになり、それがまた役に立つた。就中、彼の生命の狙はれた明白な證據の上つたことが、帝政のために好都合であつた。

ルイ十六世を處刑しても、ブルボン家の存續する事實から、個人を殺し得ても王朝を亡ぼすことはできない。獨裁者だけでは、死ねばそれ切りであるが、王は亡びても王室は存することから彼の世襲制度は目的に叶ふものであることが首肯されたのである。

しかし、王の名は聯想が惡く、皇帝と定められた。これは共和政治の次に帝政になる順序が、ローマ史にも認められる普通のものである。それとは異つて、シャールマーニュ帝以後、フランスに皇帝のなかつた上に、ドイツの皇帝は痛擊を加へられて無資格の狀であつた。從つてシャールマーニュの帝冠を頂くにしても、何等彼に不思議なことではなかつた。

ところで、この帝冠を戴く彼自身の內生活はどうであつたか。反省的のところも多いが、人の意表に出る傾向も著しかつた。冷靜と昂奮とが刹那的に更代し、時には尊嚴其物のやうである。時には媚びるやうに人の心持を察し、或は我慾に驅られた妹達を嘲して皮肉を浴びせ、澁面の哲學者らしいところもあつた。

王冠が道に遺棄されてゐたから、それを拾つたまでだといふかと思へば、クロヴィス以來の王冠の傳統的相互關係を堂々と論ずることもあり、虛榮的錯覺を持つことの極めて乏しい人であつた。

かやうな彼に對する社會一般の期待は、安定と平和と將來の保證とであつた。革命の成果、殊に平等を保存して貰ひたいこともその一つであつた。

帝政の決定した週には、英國との戰時狀態が重大化し、他方に於て、皇帝及び共和政府に對する陰謀の白日に曝された革命成果の危機に瀕した時であつた。

四月十八日、上院令が彼に皇帝の印綬を捧呈し、五月五日にはロリアン港外に英佛の海戰があつた。

人民主權の革命精神は、ナポレオンをして帝位承認の人民投票を行はしめることとなつた。茲に帝室は國民によつて創始されたことの形式が整ひ、次いで帝政的威嚴が種々のものによつて示され、宮廷が出來、貴族元帥が出來ることになつた。

これに反して、王黨陰謀の首魁であつたカドウーダルは、六月二十五日、市役所前の廣場で死刑に處せられた。それは斷頭の刄の下にあつても、聲の限りをつくして國王萬歲を叫んだ不敵の人物であつた。ナポレオンは心の中で、かやうな男をこそ、味方にしたいものだと、遺憾に思つた。

完全に人の意志を征服し得ないこと、これが、彼の全盛時代にも寂しいと思ふことであつた。立身出世といふ點から見れば、彼は既に絕頂に達したのである。年月からいへば、十年を費し

たのみである。三十五歳の皇帝である。さうして、後、十年を經ると、帝位から顚落するのである。內容から見ると、百年を費しても、他の政治家乃至將軍にできない幾多偉大な事變を載せたスピーディな生涯である。

彼は運命と同行して時に應じて變化した。それかと言つて、現在にゐて過去を忘れなかつた。偉くなつたからと言つて、俄かに言葉を改めたり、氣分を變へたことはない。外觀を要する際には威容堂々たるものがあつても、內輪の者に對しては、人間味の豐かな人柄であつた。ただ周圍の者に向つて、作法に喧しく、昔の宮廷や外國の例に倣つて仰々しかつたが、自分では何の拘泥するところもなかつた。

彼は皇帝として、決して武斷的でなかつた。宮廷にあつては武骨な元帥將軍をも宮廷化し、戰陣の時と趣を異にし、ある種の危險をなくすることを力めた。これはルイ十四世の故智に倣つたもので革命時代に生れた軍閥打破の一方法であつた。

レジオン・ドノール勳章を制定して、武將のみでなく、文官にも授與したことは、武將を文官の間に伍せしめることになつた。貴族制度を定めて、元帥や大將を、王公の位に置いたことも、

彼の最も怖れた武人を、外交官その他政治家達と混同視させ、特殊階級を解放する意味をも含めたのである。

『予の一身に、予の經歷に缺陷があるとすれば、それは大業の中から、突然飛び上つたことである。予は孤立を感じた。それで救濟の錨を、海の四方に投げ込んだのである』

と彼自身が、晩年告白した言葉の意味をも併せ考へて、彼の完成した制度及び行爲を解釋すべきである。

彼が兄弟姉妹に惜氣もなく王位を分配したのも、新しい彼の帝室に安定の錨を投じたからである。

ジョセフインの寶石棚は、ルイ十六世の王妃であつたマリー・アントワツトのそれで足りなかつたといふ話は有名である。が、皇帝の家族は質實によつて、疑惑を超越しなければならぬといふのが、彼の主張であつて、一層行動を監視した所以であつた。

『久しい間、フランス貴族には萬事默認されてゐたが、予は嚴正である』

と言つて、リュシアンの結婚を容認しなかつた。

リュシアンは妻を離縁するよりも亡命を擇ぶこととなり、ジェロームのアメリカ婦人パターソン嬢との結婚を斷念させたこともその實例である。

ドイツの神聖帝國は、フランスの歴史的遺恨と交錯してゐたが、今やそれは現實的存在ではなくなつたのみならず、ナポレオンがその代りに法王の手によつて、世界環視の中に皇帝となつたのであるから、その儀式の延長として墺太利に最後の打撃を加へる必要を、國民に切實に感ぜしめようとの希望もあつたのである。

九月に法王廳との交渉が終結し、ピオ七世の巴里來訪が決定された。彼は新しいシャルルマーニュ皇帝の威儀を示して、エイクス・ラ・シャペルを通過し、ドイツの君主公侯をして、西に向つて彼の爲めに頌辭を呈せしめた。

新皇帝が昔の大帝よりも偉大であつたのは、羅馬に赴いて聖油を受けたのとは異つて、法王を巴里に呼び寄せ、ミサの爲めに主人が役僧を呼び寄せる如く、『羅馬法王を巴里に驅けつけさせた』ところにもある。舊教信者のフランス國民は皇帝が法王によつて祓ひ淨められ、神に代つて罪を赦すために法王が來訪されるものと信じた。

しかし、法王こそ殺人犯を赦し、ブルボン王朝を否定し、人民の選んだ皇帝の前に、叩頭の恥辱を受けに往つたものと解釋した者もあつた。

ナポレオンは法王の出迎にフォンテンブローの森まで、獵衣のままの服裝、長靴で、しかも獵犬までも伴れて出た。

法王の見た最初の顏はサヴアリーであつた。ヴアンセンヌ事件の當事者であつたサヴアリーは、泥の中を歩かせて老人を馬車に乘せ、皇帝は右に法王は左であつた。法王に與へた第一警護隊の中には、纏頭のマムルク兵が輪乘りをしてゐた。それが如何なる意向によつたものか、頭腦のいい者には理解できることであつた。

それはまだ何程のことでもなかつた。柔和と慈悲と、父の如き祝福とによつて、法王は巴里市中の嘲笑者に沈默を强制した。

然るに、これとは別種のことがあつた。羅馬に於ては、人々は宗教的儀式をもつて、彼が結婚したものと信じてゐた。彼は妹達の結婚も、將軍達のそれも、義弟ミュラーをも强ひて聖堂に入らせ、子供達にも洗禮をさすことを要求した。だから彼自身のみが、結婚の宗教上の儀式を濟

まさずにゐるとは誰も想像しなかつた。離婚の自由を留保するために、宗教上の儀式を行はなかつたのだとすることは臆測に過ぎた判斷で、今更十年も經過した者が、新婚の祝福をすることはあまりに滑稽であるとしたからであらう。

ジョセフインを離婚しようかといふ念は、早くから彼にあつた。兄弟達の勸告に動かされる彼ではなかつたが、ジョゼフや妹達は殊にジョセフインに好意を有たず、頻りに惡しざまに言つてゐた。子のないジョセフインをそのままにすれば、帝位繼承の順位も廻つて來る希望のあるにも拘らず、離緣を彼等は勸告してゐた。

彼はそれに耳を藉すことはしなかつたが、彼女の素性、彼女の生活が、皇帝と並び座せしめるに値するか否かは考へたやうであつた。彼は既に寢床を一にすることをやめてゐた。彼は母に對するやうな愛情を感じ、彼のかくれ場であつた。外國の使臣が彼女の許に慕ひ寄り、或は地方官等が彼女の足許にひれ伏すのを見て、彼女を皇后にしない理由はないとも考へた。

彼女は子供を生みさうになかつた。しかし、その責任は彼自身にあるのかも知れぬ。新しい地位に相應はしい婦人を娶つて、同樣に子供がなかつたら、徒らに物笑ひの種である。

これらの考へを彼女に打明けはしなかつた。しかし、彼女は想像してゐた。彼女自身、帝政を恐ろしいと思つてゐた。娼婦に過ぎない者が戴冠式に列することは、戴冠式そのものを無効にする虞はないか。彼女はこの宗教的信仰上の懸念に氣がついた。

彼女は決心して法王にそのことを告白した。法王は無論それでは戴冠式の不可能なことを返答した。立腹したが、ナポレオンも絶體絶命である。戴冠式の前夜にテユイルリー宮の御堂の中で大秘密の裡に、タレーランとベルチエー立會の下に、叔父のフエッシュ師の手で、二人の正式結婚式が擧げられた。

ジョセフインは輝かしい晴々した氣持になつて、ノートル・ダムの儀式へと赴いた。正式の結婚式を了つた上に戴冠式である。彼女は自分の將來も安心だと信じた。

戴冠式前の數日は、ナポレオンもジョセフインも、各自の仕事に忙しかつた。儀式のこと、化粧のこと、行列の豫行演習、入場、行進、動作、ノートル・ダムで行はれる芝居めいた動きを一切プランを立て、イザベーが實物の儘の衣裳をつけた人形を用ひて研究し、他方最後の瞬間——秘密裡の結婚式に充てられた十五分間を除いて——までの當日の詳細のことを法王と交渉した。

法王の方では大切な條件が一つあつた。それは法王の手によつて、帝冠を彼の頭上に置くことであつた。傳統的儀式に新味を附加しないといふ條件でなければ、巴里行を承諾しなかつた法王に對して、彼は式場の問題以外全部を約束受諾した。

が、例によつて、當意即妙のナポレオンの藝術官能がその場に臨んで働き出し、彼は驚くべき俳優の腕前を示した。彼は如何にも自發的と見えるやうに研究した態度で、法王の先手を打つて、帝冠をわが手に取つて、わが頭上に戴いた。その擧動は如何にも高貴偉大の感を與へ、列席者一同、彼の史上人物なることを今更の如く首肯したのであつた。

事實、實證的に、彼はナポレオン政策の人であつた。そこにも統領政治及新君主制の基調となつて一種の和解主義が現はれてゐた。人民の意志によつて選ばれた者が、神によつて選ばれた者となつたのである。彼は革命の精神力を否定せずして、カトリックの精神力を自己に呼び寄せたのである。

ナポレオンは聖油を浴び、神聖な儀式を受けた。その意義は十年足らずの後に、舊教、使徒の權威者、教會其物の採る態度から見て、誇張の嫌ひあるものとなるが、當時にあつては、天の祝

福が位階强奪者に缺けてゐると難じてゐた者に、沈默を强ひたのであつた。

しかしながら、この祝福された帝冠を、ナポレオンは人民から受け、共和主義者のために他の纂奪することを禁じたのである。彼が臨機應變に二重の計略をすることは、彼の慣用手段であつた。ピオ七世招請の際にも『皇帝は、願くは陛下最高度の宗教性を、塗油及び戴冠の式に垂れ給はむことを』と謹嚴に書き送つた。欺かれた法王は侮辱を喫せしめられただけであつた。ノートル・ダム退出の際、法王は抗議の餘儀なきこと、帝冠奪取のことは儀式の公式叙述にも注意してあつたことを指摘すると通知した。

ナポレオンにとつて、そんなことは問題でなかつた。戴冠式に期待したあらゆる結果を收めて、彼は主權の別個の性質を、爲めに危險ならしめることはなかつた。

何となれば、戴冠式の宣誓は、またフランス革命に誠實であることの宣誓に他ならぬものであつたからである。福音書にかけて、皇帝は平等乃至自由の維持、同時に國有財産獲得者の所有權就中、第一に共和國領土の完全なる維持を宣誓したのである。その爲めにこそ、その一切の征服占領を保護するためにこそ、共和國が一人の男に國を身賣りしたのであり、共和國がその最高權

力を彼に委ねたのである。

さうして、この宣誓をナポレオンは守るのである。何となれば、彼はこの君主制の存在理由であるからである。

一八〇四年十二月二日の當日、ノートル・ダムに於て、立派な禮服を着け、手に皇帝の笏を携さへ、既に不朽に列した彼は、人間らしい言葉で、

『ジョゼフ、父上が御覽になつたらね！』

と言つた。

かやうな人間から、これを期待するとは、誠に感激の瞬間である。父が死んでから二十年、子等のここに達せんことを庶幾つて、年金や教育資金を請願することに奔走したその父の死んでから、如何に多くの出來事のあつたことか。原因結果の錯綜、十分熟した打算、適宜に捉へた幾多の機會が、それには必要であつた。

しかしながら、作用を中止しない原因は、やがてナポレオン、帝冠、その家族をも驅つて、嚴肅にして迅速な運動の下に、再び虚無の世界に運び去つて了ふのであつた。

(14) 雌雄を決す

——無敵のナポレオン・ネルソン・ピット——

戴冠式の一箇月後、英國王を始め、各國元首に向つてナポレオンは、世界平和の提唱をした。この呼びかけは、レオベン條約本文の調印前、カール大公に通告したものと同じであつた。ジョージ三世に對しては、『無益の流血により良心に咎められ』と言つた。要するに、一七九七年と同樣に、平和こそ彼の當時の最大關心事であつたのである。

戰爭が彼を必要人物にするが、戰爭には危險が伴ふ。平和は戴冠式以上に帝位を確固のものたらしめるから、彼はその爲めにあらゆる手段を講ずるのである。さうして、聽容れられなければ已むなく最後の手段に出るといふことになり、人々に諒とせられる譯である。

彼は皇帝となつたが、同時に伊太利の王冠を受けても不自然なことはない。しかし、二個の王冠は二人の頭上にあるべきであるといふ建前から、彼はそれを兄のジョゼフに提供した。不平を常例とするジョゼフは、帝位繼承權より除外されるものとして受諾しなかつた。ルイも同じく拒

絶した。何れもフランス帝冠にのみ目をつけてゐた。そこで、ジョセフインの連子ユージエーヌ・ド・ボーアルネーを伊太利の副王とした。

英國は皇帝の平和提唱に回答も發せず、ピットをして、第三回對佛聯盟の結成に奔走させてゐた。

ピットは一切をナポレオンの沒落を前提として計畫した。さうして、第一にロシヤとの條約を締結した。それが結局の實を結ぶまでには幾春秋かを要するのであるが、ナポレオンが皇帝なとつたことは、英國の暗殺計畫に一頓挫を來した。フランスの王黨を使嗾しての計畫は、却てナポレオンに帝位を與へるだけであつた。

そこで、個人襲擊を斷念して、戰爭により、フランス自身をして彼を取除かしめようと決心させた。

英國が何故ナポレオン除去の政策を取つたか。コルシカ人だから皇帝としたくないとか、アンギヤン公を殺害した復讐としてといふやうなことでない。フランス共和政府の征服した土地の保有が彼の存在理由であるからその征服地の放棄を強ひることは、敢て不可能を期待することであ

ることに氣づいたからである。

それと同時に、英國はフランス國民の心理を理解した。

そこで、狡猾な策略を考へ出したのである。一八〇五年四月二十一日の英露の密約は明かに舊國境を定義し、たゞそれを公然と發表することを避け、情勢の改善されるのを俟つ。そしてそれまで種々の駈引をし、彼を人類の敵と見せかけ、彼とフランスとを離間し、フランスとならば條約締結の意あることを仄めかした。

ピットはよく全局の將來を洞察し、如何に多くの輝かしいナポレオンの戰勝にも目を閉ぢた。そして自國の頑强な抵抗に信賴し、英國を差措いて眞の平和條約はないことを各國と約した。

ナポレオンとしては無理にも英國の首を絞めるか、さもなければ自分が最期を遂げるより途はなかつた。故にナポレオンは英國攻擊の擬勢を示して、逆に墺露を攻擊したとすることは誤つた觀察である。事實、眞劍に彼は、十三萬二千の精兵をもつて英國の侵入を祈願したのである。

彼は未曾有の壯擧を斷行して、決定的平和を、ロンドンに於て獲たく念つたのであつた。

最初、彼はフランスの海軍提督に、四日間の海上確保を求め、その困難を察して二十四時間の

確保に訂正した。さうして、ブーローニュの砂濱で、英國海峽を眺めながら、彼の考案した牽制運動を、フランス艦隊が實行するのを待つてゐた。

しかし、彼の期待は空しかつた。人に能力なく、事情も豫想通りでなかつた。ヴイルヌーヴ提督が地中海監視のネルソンの目を掠めて、ツーロンを脱出し、西班牙艦隊と合したまではよかつた。が、米國海岸の方に英艦隊を誘導し、隙を窺つて急速に英國海峽に引返し、運送船を英國に護送しようと企てたが駄目であつた。

今一人の提督ガントームは、ブレストに英艦隊の封鎖を受けたまゝ動くことができず、ヴイルヌーヴは稀有な無風に妨げられ——當時はまだ帆船時代であつた——計畫は全く失敗であつた。

第二の策としては、全艦隊北上して一戰を賭する方法もあつたが、フランス海軍の臆病のために實行ができなかつた。

ナポレオンは不足でも有合せの物によつて必要の努力を試みた。それで相當に成功するものだといふのが、彼の有名な、フランス語には『不可能の語がない』といふ金言の意味であつた。然るに、海相及び提督ヴイルヌーヴは、あまりに專門家であつて、フランス海軍の弱點を知り過ぎ

てゐた。フランス海軍は革命以後弛廢して、事實實力に乏しかつた。加ふるに、アブーキールで全滅の憂目を見てゐた。それがナポレオンの激勵を以てしても効のなかつた所以である。

ナポレオンがブーローニュの陣を引揚げることにしたのは、海軍の無力のみでなく、重大な報道が到着して、ウインナ、伯林、露都の方をも顧慮せねばならぬことになつたからであつた。

墺露は英國に味方して牽制軍動を起したのであつた。それは危險な牽制であつた。その牽制運動を懲らすには、十一月以前にドイツに達してゐる必要がある。彼は英國侵入の期日の次第に延引することを遺憾に思つた。彼は焦慮しつつ、ヴイルヌーヴの來着を待望した。

提督がフエロール港まで來て、北上しないことを知つた彼は、非常に憤慨し、怒號した。さうして、彼は斷然兵を率ゐてドイツに向つた。英國侵入を斷念したのではなく、一時それを見合せて、まづ大陸の平定を急いだのである。

九月三十日には、ネルソンはカヂスの前面に游弋して居り、偉大軍隊の名を貰つた佛軍はラインの渡河を完了してゐた。皇帝はストラスブールから宣言を發し、『英國の金と增惡とによつて編まれた新聯盟』を解消させることを誓ひ、『保證のない平和』を棄てることを斷言した。一七

九二年から算へて、第三回の對聯盟の戰爭である。

ブーローニュを無結果のまゝ引揚げたことは、巴里の經濟恐慌と共に、國民の賞讃することでなく、皇帝の心痛の種であつた。彼は再び革命時代の言辭を用ひ、民衆皇帝の面目を發揮し、煽動的に鼓舞激勵した。

時、利あらずして、陰謀や反對の氣勢が再び起るのは當然であつた。フーシエーが若干の嫌疑者を銃殺し、後顧の憂なからしめたが、光榮と全盛の絶頂にありながら、フーシエーの如き人物を重用しなければならぬことが、帝國の基礎の脆弱を物語るものであつた。

けれども、あらゆる時代を通じて、今度の戰爭ほど光輝のあるものはなかつた。エルヒンゲンで、ネー元帥が公爵の榮譽を與へられたことが、既にその大成功であつたことを物語るものである。更に行軍、戰術、配置、動作、悉く天才の驚異を示したものである。オーストリーのマック將軍はウルムに於て武器を投げ出して降伏し、捕虜となつた墺軍は十萬人と算せられた。しかも、佛軍の損害はまことに輕微なものであつた。

けれども、恰もこれと同時に、ネルソンがカヂスに西佛の艦隊を封鎖してゐたのに對して、遲

蒔の決斷をしたヴイルヌーヴは、無益な戰ひを挑んで港外に出動したのであつた。

激勵によつて奮起せず、非難されて始めて勇氣を振つたヴイルヌーヴは、眞に愚劣な振舞をしたものである。彼はせめて地中海に於て牽制運動を行ひ、ナポリの敵の同盟國を威嚇するか、少くとも海軍力を無事に保存して置くだけでも効果あることであつた。然るに、彼は最惡の條件の下に、全海軍の運命を賭して、徒らにネルソンをして名を成さしめたものであつた。

ナポレオンはウルムで、無敵の名を自國の偉大軍隊に與へ、トラフアルガル岬の前面では、ネルソンが無敵の英名を博したのであつた。

ネルソンは完全なる勝利を得る前に戰死し、ヴイルヌーヴは生存して捕虜となり、後に自責して自殺した。長期の努力によらなければ出來上らぬ海軍を、フランスから全然失はせたことは、今後の英佛抗爭の前途を卜せしめるものであつた。

トラフアルガルの海戰の意義は、ワーテルローの弔鐘を聞くまで、フランス人は理解しなかつた。英國も亦その意義を十分解しなかつた。英國はたゞ侵入される危險のなくなつたことを喜び大陸の同盟軍が慘敗した報道に顏色を變じた。ピットすら、ウルムとアウステルリツツの敗報に

傷心のあまり、病氣になつて再び起つことができなかつた。

ナポレオンは敗報の達した時、ウインナへの進軍の途中であつた。それでも、彼は困惑の色を見せなかつた。憂鬱より、やや不快の多い程度で、事件に關して無言を要求したのみであつた。彼は海戰に勇敢な振舞をした者を賞しようとも、義務を果さなかつた者を罰しようとも欲しなかつた。ヴイルヌーヴすら忘れられたやうであつた。

この無言の非難によつて、ヴイルヌーヴは、世を去るより他に殘されてゐるもののないことを一層強く感じたのである。

けれども、この事變によつて、ナポレオンの計算に改訂の加へられたことは、恐らく疑ひないことである。ブーローニュ、トラフアルガルの失敗は、一層彼に大陸上の同盟を欲求させ、彼をしてそれを護ることにひたすら肝膽を碎かせたのである。

ウルムの塡軍の降伏によつて終結した急行戰が、彼のためにウインナへの道を開き、フリドリツヒ大王も味ひ得なかつた程の滿足をもつて、墺太利の都に凱旋將軍として入城し、シエーブルン宮に宿泊した。

しかし、これによつて戰爭は終らなかつた。オーストリーには抵抗の餘力があり、露軍は全然無疵であつた。また露帝と懇親なプロシヤ王はいつ聯盟に加はるか知れなかつた。

元來十八世紀人であつたナポレオンはフリードリヒ大王の崇拜者であり、プロシヤを念頭にかけること相當以上であつて、常に好意を示した。いつかはこれを籠絡して、重要な支柱の一つとし、ロシヤと共に協力して堅固な大陸同盟を形成し、英國の海上の勝利を無効に終らしめたら幸福だと思つた。この考の下に、彼は戰鬪開始前アレクサンドルと談判を試みた。

兩帝抱擁して提携する時機はまだ到來してゐなかつた。露帝の條件は、ナポレオンの屈服した時に出すべき英露協定のそれを、何の修飾もなく持出したのである。

ナポレオンは使節のドルゴルキーに答へて、

『おや、ブルツセルもかね？　こゝはモラヴイヤだよ、モンマルトルの上まで來ての話ではないよ』

と言つた。

彼は常に平和を待望してゐた。彼は平和のために戰つてゐるのだ。その平和を不條理に拒み、

平和を破つて來れば、その懲らしめのために痛擊を加へるのが例であつた。アウステルリツツの場合は全くそれであつた。

彼は成すべき手續を了つて、輕快な氣持になり、傳說にある通りの小柄の愛すべき伍長の昔に歸つた。十二月二日の戴冠式を記念するやうに、祝火のつもりで野營の篝火の前を巡視し、愛嬌よく兵士と談笑した。さて朝になれば輝かしい冬の朝日を、大勝利の榮光として浴びてゐるのであつた。

最初ナポレオンは、墺軍が敗北したので、ロシヤは戰爭を中止すればいいにとさへ思つた。ウインナから四十里も深入りして、負けたら大變であつた。時を空費すれば、ハンガリから墺軍の增援兵も到着し、プロシヤの參戰準備も完了するであらう。幸に露軍は急に攻擊して來た。

ナポレオンは十分研究して置いた地理であつた。ナポレオンは敵の先陣の動作を眺め、

『この戰爭は我等の勝利だ！』

と安心して叫んだ。

果して彼の豫想通りであつた。彼は墺露兩皇帝の目前で、スワロフ及びクツソフの軍と雌雄を

決した。三皇帝の會戰といふことだけで、既に壯觀であつた。ロシヤの近衛兵は全滅し、四時間に十萬の兵士が殺傷された。武器の追擊を免れた者は、湖水に陷つて死んだ。

『予は諸子の勇武を嘉みす。アウステルリツツに於て戰つたとさへ言へば、人は直ちに諸君の武勇を解するであらう』

とナポレオンは言つた。

第三回の聯合軍はかやうに打破られたのである。オーストリーは永久の平和に入る必要があつた。最後の希望をかけてゐたロシヤの軍は一溜りもなく潰滅した。プロシヤは同じ悲運に際會しなかつたことを悅んだ。

ナポレオンは露國の友情を得たいと希望してゐた。ポール一世帝の舊交を再びアレクサンドル帝に發見したく念つた彼は、任俠的態度をもつて露帝を誘惑しようとした。捕虜を送還して好意を示したのもその爲めであつた。彼は露帝の感受性に訴へようとした。英國侵入は今日容易にできることでないから、彼は大陸の結束に專心することを當面の急務とした。

それには先づオーストリーから着手するのを可とする旨をタレーランは進言した。しかし、オ

ーストリーとフランスとは舊怨の間柄で俄にさうする譯には往かなかつた。まだ彼は墺帝の女を婚姻の候補者としてゐなかつた。それでも態々彼を陣中に訪問して來ることに同情して、喜んで篝火の前に招じた。

彼は帝を廢帝にはしなかつた。打擊を受けたとは言へ、相當の兵力が殘つてゐる。彼はこれを計算に入れて、溫和な條件を課し、伊太利を斷念させ、アドリヤチックの沿岸を放棄させることにした。英國の貿易をこの方面に禁止しようとしたのである。大陸封鎖の片鱗がこゝに現れたのである。また獨逸改造の條件をも承認させた。

彼は七週間で、歐洲の姿を變化させた。その處置した內容の豐富なこと、訓令、契約、書類の夥しいこと、要約するにも幾頁かを要し、その詳細を述べるには一卷の書を要する。

殆んど休息の日であつた麗かな統領政治時代の日は、全く過ぎ去つた。今後の治世は、不斷の渦流と成つて經過するのである。

しかし、悉くこれらは理論づけられ、一個の中心思想と關聯を保つてゐるのである。サヴアリーを介してアレクサンドルとの簡單な接觸から、ロシヤとの同盟は、熟してゐないまでも、考

へられないことではないといふ斷定を固く首肯した。

彼はそれを二三年の裡にと打算して、露帝の誇りを傷つけることを避け、その敗軍を墺國から靜かに引揚げさせた。將士は不平の表情をして、何故勝利をもつと良く利用しないかを了解しかねてゐた。

ヴアンダンムは、

『これでは六年後には巴里に彼等を來させようといふものだ』

と不平であつた。

恰もこの時、ナポレオンは巴里に思ひを運んでゐた。巴里では人々平和に憧憬し、人氣が惡いので、彼は歸還を急いだのである。その次には緊急用務のプロシヤ確保といふことがあつた。アウステルリツツの戰爭が惡い方向に轉じたら、プロシヤ軍は戰線に參加して、佛軍の退路を扼したであらう。

この危險は一八一三年に實現するが、既に推測されてゐたので、プロシヤを聯盟から引離すよりも、その同盟を獲て置くことが遙に優つてゐるとした。ナポレオンは脅迫と約束とをもつて、

味方とすることに努め、英王の所領ハノーヴアーをプロシヤに與へることとした。その責任としては、たゞ英人に對して港灣閉鎖をする條件であつた。

これは必要な條件であつた。名こそまだ無いが、大陸封鎖は確定し、海峽横斷の大計畫に代へられてゐたのである。プロシヤは讓歩したが、恐怖からであつた。ホーヘンツオレルン家も、ハプスブルグ家と同樣、油斷はならなかつた。プロシヤ王はアレクサンドルへ打消の通牒を送つて、ナポレオンとの同盟を愴惶として取消した。

ナポレオンはそれに氣づき、信用はしてゐなかつた。現在それは問題でない。早くフランスを威嚇することのない新獨逸を作り上げ、フランス帝國を維持し、延長しなければならぬのであつた。

リシユリウ、マザラン、コンヴアンション議會、長官政府の思想を合成して、ドイツの鑄直しと分割とを速成し、彼は新たにライン聯邦を仕上げた。ババリヤ選擧侯を王にし、その女をユージエーヌ・即ちジョセフインの連子の妻として、强ひて貰ひ受け、その王妃の許嫁であつたバーデン公には、ユージエーヌの從妹ステフアーヌを娶らせた。これは王朝の結婚政策である。ナ

ポレオンの義弟、ミユラーをベルグ大公とした。アメリカ婦人と離別したジエロームには、ウルテンベルグのカテリナと準備してあつた結婚をさせ、その父も王と成された。

これらは、總て共和國時代のものと大同小異であつて、ナポレオン帝國の藩屏であり、家族である。家族は彼に抗爭することを許されず、皇帝は彼等の趣味を顧慮しなかつた。

ナポリ王國のブルボン家は改悛するところなく、相變らず敵と共に陰謀を企ててゐた。故にその港灣は英人に對して閉鎖する必要があつた。そこでナポリ王の王位は奪はれ、ジョゼフを權威の代表として、その欲すると否とに關せず、君臨させることにした。ルイはバタヴイヤ共和國の跡を襲ひ、オランダ王として統治の任に當らせられた。

一八〇六年一月二十六日、出發してから四箇月の後に、彼はテユイルリー宮に歸つた。この百二十日の間に、決定的平和の時刻を一分も早めることはなく、彼は歐羅巴を揑ねまはしたのみであつた。

(15) 大陸封鎖

墺露の牽制に對抗するため、ナポレオンはブーローニュから引揚げ、アウステルリツツに敵を擊滅した以上、その任務は終了した筈であつた。トラフアルガルの海戰が致命的のものでなかつたら、無論、彼はブーローニュに引返したに相違なかつた。けれども、海戰の慘敗によつて、海峽横斷は不可能になつた。

それでは將來どうするかといふことは、一八〇六年二月六日の『英國が平和を欲しなければ、皇帝は再び海軍にその注意を向けるであらう』といふ聲明だけに止めた。事實、トラフアルガルの海戰後、海軍を復興する暇はなかつた。

しかしながら、平和は常に彼の最大關心事であつた。平和は帝國を守護するものであつた。アウステルリツツの勝利でフランスは、平和を確實に握つたつもりであつたが、さてこの平和を如何にして英國に課するかは重大問題であつた。

茲に一つ嬉しい報道は、英宰相ピットの訃報であつた。ピットはコブールと共に、フランス愛國者の憎惡の對象であつた。コブールは墺太利の屈服と同時に屏息し、ピットも今や故人となつた。そして英國は、自由黨のフオツクスに支配されることとなつた。しかし、一個人の支配下に甘んじてゐる佛人には、英國の政策が一個人に容易に左右されるものでないことに氣づかなかつた。

不思議にも、ナポレオンも單純な見解をもち、通俗的幻想的觀察をしてゐた。彼はアミアン條約のことを忘れ得ず、再びフオツクスと平和の交渉に入る信念であつた。加ふるにタレーランの外交手腕に多大の期待をかけてゐた。然るに、フオツクスの句調語勢のピットと異なるに似ず、傳統的英國貴族の信念の點に一向變りないことを、次第に彼も認識するに至つた。

時局に對する新しい彼の理解は、同じ年の三月五日の立法院に於ての演說中に既に窺はれ、更に、タレーラレ、ヤーマウス卿の折衝によつて明かにされた。ナポレオンがひたすらアミアン條約の復活に專心であるのと異り、英國はエスコー河口と、ムーズの要塞を問題とするばかりでなく、眞の平和は、英帝國の絕滅か、佛國の英國征服斷念かでなければ期することのできないこと

を、反對に英國側から說得せられた有樣であつた。

『おゝわが祖國よ、何たる姿に予は汝を遺し置くことか！』

と叫んだピットも、これと反對な柔和なフオツクスも、要するにジョンブルのジョンブルたるところに差はなかつた。

けれども、ナポレオンは多少の讓步を最初からする積りであつて、先づマルタ島を英國に讓與した。かの一小島が、かやうに重要視されたことは、寧ろこの島の名譽であつたらう。次にシシリヤ島についても、兩國の妥協はつきさうであつた。タレーランは、ヤーマウスとこれらの談判を行つてゐる間に、露帝の代表ウーブリルとも交渉を行つた。英國との和協が成立すれば、露國も餘儀なく平和を承諾するであらうし、露國との協定が出來れば、英國も平和に强制されるであらうと、彼は推測してゐた。

更に、別個の方面に於て、佛國はプロシヤに對して、英領のハノ！ヴアーを讓る約束をしてゐた。英國と平和を結べば、當然英王に返還さるべき地である。

しかし、ハノーヴアーはプロシヤ年來垂涎の地である。幸に英露との交渉が纏れば、他の地

と交換すべく、若し、英露の妥協つかぬ際は、ハノーヴアに引かれて、プロシヤはフランスとの同盟に誠意を見せるであらう。況んや、プロシヤとは古くから親善であり、タレーランはブランデンブルグ家に好意を示し、墺國に代つて、北獨逸の覇者となり、皇帝の冠をホーヘンツオルレン家に移しても然るべきであると匂はしてゐた。

この三重の賢明な打算的交渉は、一八〇六年當初の二三箇月間のものであつたが、重大意義のものであつた。これが徒勞に終るなどとは彼も豫想してゐなかつた。

アウステルリツツとウルムの壓倒的大勝利後の平和交渉として、ナポレオンの態度は穩和すぎる程のものであつた。北はアムステルダムから、南はナポリに至るまでは、立派にフランスの勢力內である。ダルマチヤとかシシリー島などの取引を、英露兩國に對して行つてゐるナポレオンとタレーランは、自己が主動者の地位にあることを得意のやうに思つてゐたが、實際は意外にも二人とも聯合諸國の狡獪な網にかかつてゐたのであつた。

殊に英國は、惡事を悉くフランスに嫁し、要求を過大に吹聽し、ナポレオンの野心を世界の危險として宣傳した。裏面にあつては、兵員の徵集を行ひ、第四回聯合軍の準備に狂奔しつつ、

表面では、豫備案件の討議研究に餘念なきが如くに裝うてゐた。露國との平和條約は締結されてゐたが、批准に達してゐなかつた。その條件内容が發表されると、英國の輿論は激昂し、ロンドン駐劄露國大使は、示威運動に怖れ、露帝に批准拒否を請ふに至つた。

他方、交渉の後繼者となつた英代表ローダデール卿は、ナポレオンの要求に責任轉嫁の技巧を用ひて、交渉破裂を策しつつあつた。

更にまた前代表のヤーマウスは、英國との平和條件中に、ハノヴアー家の英國王位に復活することが加へられてゐるやうに、巴里駐在のプロシヤ代表に洩して置いたことが、プロシヤの態度を強硬にさす原因となつた。そしてプロシヤの主戰論者、國民主義者、反佛論者等の一齊蜂起となり、遲疑逡巡の態度であつたフリードリヒ・ヰルヘルムを硬化せしめ、宰相ハウダヰツチに、露佛平衡政策を拋棄させる口實となしたのである。

プロシヤの愛國者達の本能的な運動、青年將校、王妃ルイーズ、ルイ親王、これらの人々の無謀極まる猪突的の行動は、痛くナポレオンの目には、忘恩反噬の振舞と感じられた。しかも、新たにナポレオンをして痛擊を加へしめる機會となり、これが一新時期を劃するばかりでなく、甚

しい葛藤を開始する端緒となつて、やがて紛糾を一層擴大することになるのである。

一八〇六年の秋、英露との平和交渉は失敗に終つた。それから暫時の後、第四回の聯合軍が競ひ立つことになつた。リューネヴイル條約で酷い目に遭つたと同樣に、或はそれ以上にプレスブール條約で、目も當てられぬ條件を强制せられたにも拘らず、内心あきらめ切れなかつた墺太利は、今回の聯盟に參加することを躊躇するものでなかつた。若し大陸の三强國が同一歩調に出で共同作戰を完全に行ふとしたら、フランスは窮地に陷るか、さもないにしても、尠くとも當分の間、抑制せられ、防禦の立場に餘儀なくせられたことであらう。

勿論、ナポレオンは偉大な稀有の名將であつた。無政府的痙攣の時代にあつても、歐羅巴全體と抗爭して、敢て負けを取らなかつた國民の、豐富なあらゆる資源を獨裁者として左右することができ、瀕死の狀態の時、國家を受けたにしても、今はそれを最高の勢力に引上げた當の主人であつた。

それにしても、此時ほど一時に多くの敵を擊滅しなければならぬ時は、嘗てなかつた。幸にプロシヤの尙早の攻擊から、ナポレオンは非常に有利な戰爭をすることができた。

けれども、この頃から、彼は負擔の重荷を感じ始めたのであつた。弦の張り切つたことが感じられだした。帝國はプレスブールの平和條約によつて安固になつてゐたが、北はオランダ王國から、南メツシナ海峽まで、西は本國から獨逸聯邦を經由し、カツタロ港口に至るまでの線上に、勢力を維持し行くには、或は無に歸するかも知れぬ大努力を要求するものであつた。

その海岸線は素晴しいものであつて、それが存在の理由であり、英國にとつては迷惑の種でもあつた。けれども、英國としては、商品を大陸に持込むに、自由に選擇できる程、多くの海岸港灣を發見することができた。大きいことは大きいが、保護國や藩屏諸國を加へたからと言つて、英國が降伏する程、フランス帝國は廣大でなく、歐洲全部の封鎖は行屆いてゐなかつた。

如ふるに、帝國内に續々新しい問題が起つてゐた。

この際に、プロシヤの對ナポレオンの宣戰は、晴天の霹靂であつた。彼は最後の瞬間まで和協の努力をした。彼は普王に書を送つて、この戰爭は冒瀆行爲であるといひ、

『予は陛下との同盟關係に未だ微動だもしてゐない』

とさへ附言した。

同日、伯林のフランス代表ラフオレーに訓令を與へ、『皇帝は眞にプロシヤに向つて發砲したくないのであつて、唯不幸事と看てゐる』と述べた。

プロシヤはこれに對して、最後通牒をもつて、八日間内に獨逸から佛軍の撤退を求めた。これはプレスブール條約の結果を放棄せよといふ意味であつた。

ナポレオンがその回答に、疾風迅雷の戰爭をもつてしたことは、固よりのことであつた。プロシヤの背後にはロシヤがあつたからである。ポツダムのフリドリツヒ大王の墓前で、プロシヤ王は露帝と同盟を約し、露帝は美人ルイズ王妃に騎士として忠誠を誓つてゐたくらゐであるから、露軍がプロシヤ軍と合體しない前に、これを擊破する必要があつた。ナポレオンは偉大軍隊の報告文學を創作するためのやうに、劇的効果を十分擧げる戰勝を博した。

『ベルチエー君、八日に光榮の會見ださうだ。フランス人は、誰もそんな場合を外すことはないよ。美しい王妃が戰爭を見たいんださうだから、慇懃にやらうよ。ザクゼン迄は寢ずに進軍するとしよう』

ベルチエーは無論彼の參謀總長である。プロシヤ王妃を罵倒して、『自分の宮殿に火をかけて

狂氣になつてゐるアルミード見たいだね』

と言ふのであつた。

この間にも、ナポレオンは夢を見てゐるやうなことがあつた。彼は不安であつた。歐洲全部が結束して來はしないかと考へたのでさる。前月憂鬱の中に、

『予は何れの大國とも眞の同盟を獲ることはできないのだ』

と言つた。

プロシヤとの同盟も、ロシヤとの同盟も遁げ去つたのである。何をもつてこれに代るか。ウインナ駐劄の大使ラロシユフーコーに宛てた言葉の中に、今も戰爭回避だと言つてゐる。しかし、プロシヤはもはや信用のならぬ、忌々しい、輕蔑すべき國であるとは思ふが、『海軍の方に努力を轉ずる必要があるので、大陸に一つ同盟國を欲しいものだ』といふ氣持であつた。

彼はそれをウインナに於て探したかつたのである。『墺太利同盟によつて、昔フランス海軍も榮えたことがあつた』ことを回顧して、フランス大使に相談を持ちかけた譯であつた。これは彼の浮動した想から割出したものであつて、墺國同盟はフランス國民の欲しないものであることを

閑却したものであつた。況んやプロシヤが勝利を占めるやうであつたら、プレスブール條約の屈辱を雪ぎたい墺國は、直ちに佛軍に双向はうといふ形勢であつた。

更に西方の西班牙は、宰相ゴドイが平和主義を持してゐるものの、トラフアルガル後のフランスに背を向けてゐた。海軍のないフランスがどうして廣大なスペイン植民地の援助をしてくれるかといふ腹であつた。ゴドイは既に英國と欵を通じてゐた。

プロシヤを擊破したナポレオンの勝利は、まことに眩惑的のものであつただけに、墺太利も西班牙も共に動かなかつた。プロシヤはフリードリツヒの英名のお蔭で、尙武の國となつてゐたから、ナポレオンにとつては目の上の瘤のやうな感じがあつた。これは十八世紀的の迷信に過ぎないものであつて、プロシヤはナポレオンの打擊を受けて、二週間をも經ずして潰滅したのであつた。

ザールフエルトに於ける第一回の會戰には、開戰の發頭人であつたルイフエルヂナンド親王は白兵戰中に殺され、十月十四日にイエナでプロシヤ軍は全滅であつた。同時に、ダヴーはプロシヤの別軍をアウエルシユタツトで粉碎し、アルミードをもつて自認してゐたプロシヤ王妃自身

も、潰走中殆ど捕はれかけたくらゐであり、ブランスウイツク公は重傷を負うた。

このブランスウイツク公は、一七九二年に巴里の城壁から一石も遺さず取崩すぞと威嚇した聲明を發したことで有名であつた。前の世紀にフランスのスービーズを敗つた地に、プロシヤ人の建てた記念碑を打倒してナポレオンは通過し、戰報にも、『イエナ戰爭はロスバックの恥辱を洗ひ淨めた』と記した。

これは巴里に豫想通りの効果を齎した。巴里は戰爭毎に不平、警報、打算を繰返す地であつて常に國民的感情を引立て、信頼の念を鼓吹せねばならぬ地であつた。ナポレオンは幸に毫も鼎の輕重を問はれることなく、正眞正銘の英雄として昂然たる姿を巴里に現すことができるのであつた。プロシヤ軍を擊破する迄は、ナポレオン何者ぞといふ念も、武人ばかりでなく一般に少くなかつた。

イエナの戰勝は彼の英名を確立したものであつたが、戰勝の奇蹟が幾度も繰返されるので、幾分その効果を減殺してゐた。それに彼の不在に乘じて反對派の擡頭があるのを例とする程であり今度もノルマンデー地方にまで及んだ王黨の一揆も起つた。フーシエーは、國内に平和欲求の叫

びのあることをナポレオンに報告し、

『輿論の趨勢を察する者にとつては、皇帝の劍が鞘に納つてゐること長期に亙れば、あらゆる階級の皇帝を祝福すること益々大なるものがある』

と言つた。

けれども、これは餘計な忠言であつて、ナポレオンこそ最も平和に戀々たる者であつた。彼は平和を追及して深入りしたのであつた。

勝利が層一層輝いて、しかも、勝者が一層その爲めに不安に戰いた例は、珍らしいことであつた。イエナ戰後五日を經て、佛軍はエルベ河畔に達した。敵は潰走してマグデンブルクの入口まで急追された。

ナポレオンが戰鬪中止を尙早として拒んだのは、プロシヤとロシヤとの同盟を流産に終らせたかつたからであつた。

イエナ戰後にナポレオンはポツダムのフリドリヒ大王のサンスーシ宮に入つた。大王崇拜であつた彼は、自己が大王以上であることを悟らず、大王の劍を、最も名譽を表する分捕品だと思つ

た。また目覺時計を鹵獲してセント・ヘレナの島にまで携へて行くことになる。劍の方は巴里のアンヴアリッドに送り屆けた。

彼は伯林で入城式を行つた。それは勝者の威容を示すべきウインナに次いでの首府であると考へたからである。プロシヤを過去の存在に過ぎなくすることは、もはや彼の一擧手一投足の勞であつた。王と王妃は東プロシヤのケーニヒスベルグに遁竄した。

タレーランの外交上の失敗を取返すために、十箇月をこのプロシヤ方面で過した。この間に英國ではフオツクスが死し、キヤツスルレー、カンニング等が指導政治家となり、依然として對佛强硬態度であつた。

ナポレオンは竟に伯林から大陸封鎖令（一八〇六年十一月）を發した。兩國は互に封鎖を武器としてゐたことは以前からであつたが、今度それを公式化したのである。英國は海上防備のない港灣を封鎖すると宣言し、中立國に對しては、自國の敵を通商することを許さぬなどと言ひ出したのであつた。

海の封鎖に對して、陸の封鎖を行ふことは必然のことであつた。海峽横斷の計を放棄してから

は、ナポレオンにはこれ以外に方法がなかつた。大陸諸國を結合し、同盟の力によつて此方法を實行しようとしたことに、何等違算はなかつた。たゞ法外の努力を要することの認識に多少不十分のところはあつたらう。

大陸封鎖の伯林令を發した翌日、一八〇七年の壯丁徵集令を發したのも、その徹底を期するためであつた。しかし、プロシヤ王はまだ屈服してゐなかつた。ケーニヒスベルグを危險と知つて更にメメル迄逃走した。さうして、一層露帝に接近した。露帝はアウステルリツツの敗戰に對して報復の念に燃えてゐた。この時のナポレオンの考へは、再度露帝と雖も敗戰すれば、戰爭の効のないことを悟り、却て提携を承知するであらう。露國が同盟すれば、プロシヤもこれに倣ひ、大陸封鎖は、大フランスにこの二國を加へただけで、結合さへ十分であれば英國を屈服させ、海軍復興の業にも着手できるといふのであつた。

これは弟のルイに語つた言葉によつて明白である。ナポレオンは武器をもつて歐洲聯盟を作るために、ロシヤに赴く決心をしたのである。彼は今度こそ豫期通りの『最後の戰爭』をして、平和を實現するつもりであつた。それ故その準備は入念の上にも入念であつた。

プロシヤに對する政策もこの下心があつたので、國民の激怒を買はないやうに、王室とも好意の接觸を心掛けた。『イエナの寛大』と評せられる態度はそのためであつた。普王に送つた親書を見ても解るが、ハツツフエルド親王を三時間後に銃殺する間際に、命請ひに來た親王妃に同情して、銃殺命令文を火中に投じさせた挿話も、單なる其場の氣まぐれからではなかつた。その直後に、まだ伯林にゐたプロシヤ公妃の一人に書を送つて、

『これで私が鬼でないことをお解りでせう、御兩親に私と妥協の道のあることを知らせてお上げなさい』

と述べてゐる。

無論寛容ばかりではない。ヘツセ・カツセセル侯は所領を沒收された。ザクゼン侯も酷い目に會はされるところを、容赦されてナポレオン帝國の藩屏として、ババリヤ、ウユルテンベルグと同列に王の稱號を與へられた。ザクゼン軍は忠誠を示し、一層幸運に惠まれることとなつた。

ナポレオンが足許を注意することはこの通りである。敵に和解のできる餘地を留保することを心掛け、相互に有害な方法を用ひないやうにした。彼の政治家素質はこゝによく現れてゐた。か

やうな用意の下に、彼は前進して、エルベ河からヴイステユール河に、更に、ニエメン河に達した。

彼はポーゼンからワルソーに着いた。既にポーランドに入つたのである。彼は侵入や征服をせず、自由解放の態度であつた。ポーランド復興は、彼の一擧手一投足の勞に過ぎなかつたが、敢てそれを行はなかつた。ポーランド人は慈父の到着と信じ、解放は獨立を見るに至ることと想像してゐた。彼もポーランド人の愛國心と尙武の精神と熱誠とに動かされないのではなかつた。

ポーランドの婦人の美しさにも亦彼は心を動かされた。ワレウスカ夫人との愛戀挿話は、ジョセフインとの物語以後、彼の生活に優雅な柔味を與へる唯一のものであつた。子のない彼は、罪がわが身にあるるのではないかと心配してゐたが、この頃は既にその懸念が解消してゐた。ワレウスカ夫人も彼のために男の子を一人生むことになる。彼の父性は目覺めつつあつた。わが子によつて跡を續けさせたいといふ自然の感情が目ざめてきた。それに弟のルイとオルタンスの間に生れた子供を養子としてゐたのに、その子がクルツプ病に罹つて死んだ後である。ジョセフイン離婚の感情は、この方面から次第に崩しつつあつた。

光輝ある平和は、どこかの皇女、王女と新たに結婚することによつて一層好都合に實現されるかも知れぬ。露帝擊破の日を前にして、彼はこの想ひでロシヤ帝室のことをも色々と想像してゐた。殊にアレクサンドル帝の同盟を欲してゐた際のことで、尙更さういふ念が胸に描かれつつあつた。

かくして、彼の世襲觀念は一段の發展をした。幸運の結婚と世襲とによつて、眞に帝王の仲間入りをし、歐洲聯盟を永續堅固のものにしたい念は僞らざる彼の感情であつた。

ポーランド、殊にポーランド軍は、援軍乃至補助兵として誠に願はしいものであつた。彼はポーランドの奉仕を受けたが、報いようとはしなかつた。それは彼の立場の困難からであつた。故國の政治問題、占領地統御方法、軍の給養、行政と外交と軍事とを細大となく一人で切盛してゐるだけに、ロシヤとの同盟が失敗したら、大陸封鎖は無論のこと、萬事休することの見透しをしてゐた彼として、うつかりポーランドのためにロシヤを籠絡しそこなつては大變であつた。

彼はお伽噺ののんきな想ひで征戰に從事してゐたのではない。何時敗北の憂目を見るかも知れ

なかつた。プロシヤはイエナの敗北で忍從してゐても、元氣を失つてゐない。マグデンブルグ、ステツチン、ダンチヒと、東プロシヤ方面が續々階落しても、フヒテの『國民に與るの書』は公けにされ、シル少佐一黨の叛亂があつた。遠くはポルトガルから、スペイン、オランダに至るまで監視を怠ることはできなかつた。

それも要するにすべて露軍に對して速かに成功することの急務に還元されるのであつた。けれども拙劣な猪突を避け、殆んど空想的な方法をも用ひた。コンスタンチノープルの土耳古皇帝をもつて、ロシヤ牽制に用ひ、プレスブールの條約でダルマチヤを要求したのが、既にトルコとの接近態度であつた。ペルシヤとの交渉も既に始めてゐた。さうして、トルコ大使や、ペルシヤの大使を東プロシヤの泥濘中に來らせて、交渉と同時に、士氣を鼓舞する方法に用ひた。

兩軍の衝突は、一八〇七年二月八日アイローに於て行はれた。まことに壯烈慘憺たる戰爭であつた。墓地の中で砲彈雨下の中を、烈しい吹雪を出沒する勇士の奮戰は、ナポレオンの目にも全然新しい光景であつた。

偉大軍隊は結局勝利を博したが、甚しい混戰であつた。佛軍の死傷夥しく、ロシヤとプ

ロシヤの軍は更にその數倍であつた。佛軍だけでも三千の死者があり、コルビノー、ドープールの名將軍も戰死した。更に傷病兵を加へると、犧牲の多いこと嘗てなかつた程である。ナポレオンは損害を輕微に報告するやう、新聞に命令したくらゐであつた。公報は死者千九百と報告した。

陰慘な戰場の死傷者呻吟の間を、皇帝の巡視したことは有名な話で、萬事旨く運ばなかつた時の例の如く、彼は誰にも優しかつた。

彼の心は痛んだ。結果が豫期の如くでなかつたことに、彼は懊惱した。敵は全滅ではなく、從つて平和は獲られなかつた。夕暮の篝火に當りながら何か呟き、墺太利軍の動きを心配した。メルに逃亡したプロシヤ王に驚くべき寛大な條件をもつて平和を提議した。それは彼の不安を告白するやうなものであつた。

露帝と普王とは依然として固く提携してゐた。捕虜の交換を口實にして、ナポレオンの樣子を探りに來たプロシヤの一中佐は、ナポレオンの不安焦躁と士氣の阻喪とを歸つて報告した。ナポレオンの寛大な條件は却て敵を樂觀に導き、意外にも提議拒絶の回答を受けた。

拒絶の回答をするには、プロシヤ王妃ルイズの尻押が與かつて力あるものであつた。使者の中佐が拒絶の回答を齎した時、ナポレオンは、

『やむを得ない！　露軍を破つて、皇帝に當方の條件を課するばかりだ。プロシヤ王などは問題でない』

と放言した。

使者はそれを大言壯語だと解した。けれども、それは大言壯語ではなかつた。尙四ヶ月間彼は東プロシヤに滯在し、熱心に再戰の準備を講じた。彼の平和政策と親露政策とには變りはなかつた。彼は露軍を擊破して皇帝を誘惑する決心を益々固めた。

彼の苦心が空しからず、立派にその言葉を實現した日は、彼の歷史中の最も輝かしい日の一つであつた。たゞこの光榮の日を迎へるために、フランスの壯丁が續々召集せられ、精力の根源が次第に涸渴する一途であつたことは蔽ひがたい事實であつた。

(16) 梟敵イギリス

雄大な政治計畫と軍事計畫とを組合せて、一擧に華々しい成功を博したのは、ナポレオンの一八〇七年六月に於けるが如きものは先づないであらう。それは理論外交に武力を使用し、規模の大なること無比のものであつた。

彼の目的はロシヤの征服ではなく、ロシヤとの和解であつた。ポール一世の死後、アウステルリツツ、伯林、ポーランドと足跡は移つても、彼のこの目標には變りがなかつた。彼はよく忍耐した。墺太利はロシヤとの間に平和的調停の勞を執らうと提議した。彼はその好意を斥けて、口實を與へることの不利を悟つて、

『予は墺太利の案と、わが案とを結合することを希望する者である』

と言つて誠意を示した。

ロシヤとの同盟に失敗したら、墺太利との同盟を豫備として留保して置くことは、結婚に墺國

皇女を豫備としたのと同じ行方であつた。

露帝との同盟を志した彼は、ポーランド獨立論をして、反感を挑發しないやうに慫慂し、彼をポーランド解放者と目せしめないやうに、巴里の新聞紙に内命を下した。すべて、遠謀深慮から準備をした。

戰爭についてもさうであつた。彼は露軍の進擊を待つてゐた。幸にモスコー攻入の時のやうに退却を先にすることをしないで、攻勢を採り、戰鬪を開始した。これは宣傳戰にも彼のために有利であつた。

マレンゴーの役の記念日、六月十四日に露軍はフリードランドで完膚なく擊破された。それは露軍ばかりでなく、露帝の信念の敗北であつた。アレクサンドル帝は眞に勝利者を讃嘆し、ナポレオンに敬服したやうであつた。要するに、讓歩してナポレオンと、妥協する氣になつたのである。

フリードランドの勝利後、ナポレオンは退却する露軍を追跡してニエメン河に達した。若しフランスと彼とが、どれほど平和を渇望してゐるかを知つてゐたら、露帝は寧ろ平和をこの時にも

廻避したかも知れぬ。平和はナポレオンの計畫に必須のものであつた。平和があつてこそ彼の壽命は保つのであつた。フランスは正に戰爭を打切るべき時機にあつた。

その故であらうか、ナポレオンは露帝媾和の誠意を買ひかぶつた嫌ひがあつた。露帝は意外に理想主義者ではなく、目前の事情に迫られて平和を講じたのであつた。敗北による士氣の弛廢と混亂とは、彼の安危すら危ぶまれる程であつて、彼は左右から平和を强要されたのである。固より露帝にも打算はあつた。平和を締結して露都に歸れば、ポール一世と同樣の運命に陷る危險のあることを仄めかした者があつた。けれども、現下の事情が抵抗を不可能ならしめたので、面目の立つ條件ならば、媾和の意あることを洩した。

ナポレオンの努力の結果は漸く現れたのであるが、あまりに寛大な條件は前例に懲りて見合せた。

兩皇帝は六月二十五日に第一回の會見をした。この會見は劇的性質によつて、ナポレオンに都合よく精神的成功であつた。北歐の河の中流に筏を浮べ、堵列してゐる兩岸の軍隊が注視してゐる前で、昨日までは互に戰つてゐた强大な君主、それが今日は光明を浴びつゝ、友好の君主と

なつて、互に抱擁する光景は、まことにナポレオンの手腕の程を認めさせるものであつた。これは啻に實見した者のみでなく、一般國民の想像力に働きかけるもので、その點がまた狙ひどころであつた。

人々はこの河上の筏を想像して、一篇の詩を讀むが如き氣持になつた。

ナポレオンはアレクサンドルを魅了し盡さうとした。最初の會見に『立派な好個の青年皇帝』を見て歡び、次に東羅馬帝國のギリシヤ人姿を彼に發見した。彼は征服を享樂する自然の感情に浸つた。彼は歡心を買ふ才能と趣味とを有つてゐた。彼に接近した者は、その目附、殊に微笑に魂を盛る魅力について語るのが例であつた。露帝もナポレオンを見て、『現代の偉人は强く愛嬌があり、愛撫と度量とを併せ、人を首肯させ、更に誠實のところがあつて、勝利の人だといふ感じを與へない』といふ印象を得た。

いかにも彼は誠實であつた。彼は竟に自己の政策目的に到達したからであつた。

『予はこの人物以上に愛した者はない』

と感傷的な言葉を洩した程であつた。

兩帝は互に離れず、食事を共にし、散歩を共にし、想ひを同じくした。露帝には唯一つ暗い悔恨の情があつた。プロシヤ王とプロシヤ王妃は彼を信頼してゐただけに、遺棄されたことの苦がい愕きはいか程であつたらう。ナポレオンはその心を察して執りなしに力めた。さうして、王及び王妃をも食卓に招待した。露帝の顏を立てるためにプロシヤの一部を返還する覺悟を定め、同情の言葉をかけた。と言つて、王妃の誘惑にも氣の毒さにも釣込まれない心の用意をしてゐた。

さうして、戰場の荒くれた彼とは別個の姿を彼等に認めさせた。

彼の志すところは外交的成功と社交的の成功とであつた。大カテリナの繼承者やフリードリヒ大王の相續者を屈服させた彼は得意滿面であつたらう。チルシットの天幕の下で、全露の皇帝と談笑の中に歐羅巴の改造を謀つてゐた時の彼に、文字通りに不可能の何物があつたらうか。尠くとも心の中でさう思はずにはゐられなかつたらう。

彼は露帝のために『英國を平和に强制するための行動』に關する要領を纒めた。

ナポレオンはこれで戰爭の終結を信じ、最後に海戰を終了させたいと希望した。世界平和のために、露帝は居中調停の衝に當ることになつた。英國が拒絕すれば、大陸諸國は擧つて英國に抗

して自己を封鎖する筈である。伯林勅令を空文に終らせたくなかつた。英國が反省しなければ、露帝の海軍は味方を糾合して、海上に於て覇を爭ふことにならう。

露帝にこの決心をさせる爲に、ポーランド再興の中止だけでは不十分である。そこで露帝の眩惑せる眼前に地圖を擴げ、分割のための近東問題を展開した。それにはポーランドと同時にトルコを犧牲にする必要があつた。友好國のトルコを裏切ることは面白くなかつた。ロシヤは慘憺たる敗北を喫しながら、トルコから奪つたダニューブ河畔の地と、瑞典から奪つたフインランドとを受取ることになつた。

敗戰したロシヤは、戰勝以上の利益を得ることとなつた。

平和條約は、七月八日、即ちフリードランドの戰後三週間を經て、チルシットに於て調印された。迅速に領域の大改造が案出された條約であつて、華々しいが矛盾の多い、處分も弱點も多かつた。たゞ對英抗爭の大陸聯盟を結成するといふ中心思想がなかつたら、缺點の多い條約であつた。

この際プロシヤを全滅させないで、强國狀態に放置したことは惜しいことのやうであつたが、

さうすれば露帝の面目を潰すことになるのであつた。ワルソオ公國は過大であると同時に、不十分なものであつた。ナポレオンはこの公國の建設をもつて、すべてを顧慮した十分注意深い、且穩健な解決法として滿足のやうであつた。

けれども、ナポレオンのさう考へたのは誤りであつた。露帝としては仕方なくポーランドの一部復活に忍從したのである。ペテルブルグでは、それが常にフランス同盟に對する不平となり、殊に一種の中立と見られるザクゼン王を、ワルソー公國の統治者として選任したことは、露人の恐怖を緩和するに十分でなかつた。

と言つて、ナポレオンは弟ジエロームをワルソーに君臨させることを欲しなかつた。まだ無職であり、他と同樣に奉公をするか、さもなければ消え失せるべき筈のこの末弟のためにも、彼は新しい封建國を創立しつつあつたからである。さうして、そのウエストフアリー王國は、氣まぐれのものではなかつた。彼は大抱負の計畫に立戻つて、オランダ王國の引續きを作つて、ライン聯邦を完成し、船舶の出入口、港灣、河口の沿岸地帶を、英國貿易から奪ふために、プロシヤの殘地を使用しようとしてゐたのである。それと、その新しい國王としてのジエロームに、ウユル

テンベルグのカテリナを娶らせ、露帝の緣者とする考へであつた。

露帝はそれを首肯しかねる風を裝ひ、他にも結婚談のあることを告げ、また名聲の高い、敬慕する英雄、偉人ナポレオンの義兄弟となることは、急を要することではないとした。

これは、ナポレオンにとつて、チルシツトの思惑外れのことであつた。フインランドと、トルコから奪つたダニユーブ諸洲とをもつて、ロシヤをして同盟に忠實ならしめる報酬とするに、果して十分であつたらうか。さうかと言つて、直ちに君府を提供することは、ナポレオンだからと言つても歷史の容認し得ない程、ロシヤを强大ならしめ、勢力の均衡を破ることになる。そこでナポレオンはトルコの首府までも約束はしなかつた。

チルシツト條約の、この性急な大建設、大改造は、革命の成つた征服を擴大したに過ぎず、依然として空中樓閣であつた。英國は從來よりも平和に反對であり、佛國の白耳義併合に飽くまで反對であつた、英國は帝政宣言の一年前に再開した戰時狀態を放棄しようとしなかつた。白耳義をナポレオンが放棄すれば根本原因が消失するが、彼をして皇帝たらしめた原因の白耳義を斷念することは、彼にとつて不可能のことであつた。

チルシット條約はアミアン條約の決裂の直接原因たるマルタ島を英國に歸屬させることにしたけれども、それ位で英國が滿足する筈はなかつた。要するに、英國の全敗を見ない限り、和協の方法はなく、ナポレオンとしては大陸封鎖を嚴密にするより他に名案はなかつた。

ロシヤとの同盟は諸國の港灣封鎖を必然强制すべきものであつた。彼はフランスへの歸途、ドレスデンから七月十九日にタレーランに訓令を與へ、早速新同盟利用の封鎖勵行を慫慂した。八月二十三日には、オーストリの諸港の封鎖を强制するための協調を露帝に慫慂した。

アレクサンドルは自國の封鎖を勵行せず、それがこの條約を決裂させることになるが、殘餘の諸國、法王領を始め、北歐のスエーデン、デンマルク等も英國との通商を拒絶させられた。

チルシット條約はいかにも大事業を規定したが、ナポレオンはその價値、効力、堅固性を過大視した。數年の權威は少くともこの條約によつて保證されるものと、彼は信じた。それが重大錯誤であつた。これによつて、周到なるべき用意を忘れ、ローマ事件、スペイン事件を激化させ、不利の條狀を招くことになつた。

これと同時に、英國も海上强國の横暴を一段と增進させ、たゞ一回の警告のみをもつて、コペ

ンハーゲンの砲擊を行ひ、殆んど全滅させた。これは中立國を畏怖させると同時に、ロシヤに對する示威運動であつた。

十一月十一日の發令によつて、非交戰國の船舶を悉く英國に寄港させ、稅金を支拂はせ、或は商品を積取らせた。これに對して、報復的に、十二月十七日ミラノから封鎖强化の勅令をナポレオンは公布した。さうして、英國に寄港した船舶は、國籍を論ぜず拿捕することにした。

この酷烈な對抗の激化に際して、陸上の對策は海上の對策よりも困難であつた。英國は海上を無人の天地のやうに自由に監視巡航し得るに反して、ナポレオンは東奔西走、各國を督勵する必要があつた。各地の稅關の背後にはフランス兵を監視に立たせる必要があつた。竟にその重壓は各國をして英軍を解放者として招致させることになるのであつた。

露帝も詰責せられて、英船の自國に出入することを禁じた。その代りに、君府を露國に約束した。トルコはそこでフランスを棄てて、英國の味方になつた。オランダでは彼の實弟たるルイが封鎖を十分勵行しなかつた。エトルリアの王妃はリブールン經由で多くの綿製品を英國から輸入した。ポルトガルは英國の出張所のやうであつたからこれも分割處置する必要があつた。フオン

テンブロー條約はその爲めスペインと締結されたのである。ジュノーの一軍はピレネを越えてリスボンに向つた。

彼は一方に於て再び海軍に努力を集注した。オランダ、ナポリ、乃至新しく占領したアンコナに於ても、盛に船舶の建造に着手した。トラファルガルの結果を取消すためには、活潑なスペインの協力を俟つ必要があつた。然るにスペインは信賴のできぬ同盟國であり、不信の實證が擧つてゐた。

結局はその國家を根本的に改造する必要を、彼は痛感した。

タレーランは彼に阿諛して、ルイ十四世の故智に倣ひ、ナポレオン家の者をスペインの王位に即けることの得策を說いた。當時スペインには王室のお家騷動があつた。カルロス四世王の死期が近づいたので、王妃は寵臣のゴドイと通謀して、太子アストリア公を王位繼承の資格から除去しようとした。後にフエルナンド七世となるべき太子は、老師エスコインキスの忠告に基づき、フランス皇帝に保護を依賴した。且ゴドイの妹を娶ることを拒絕し、ナポレオン家の一女と婚姻を結びたい旨をも併せ通じた。王子は型の如く讒言に會ひ、父王から太子の資格を剝奪されやう

とした。

ナポレオンは仲裁者となることを依賴され、種々考慮し、まづナポレオンの一族中に適當な女性を物色した。リユシアンの女に一人候補者があつたが、不和の間柄であつて、王妃として推薦することができなかつた。

この頃のナポレオンは全く滿足の絕頂であり、フオンテンブローには各國の王侯が順次に訪問し、彼はルイ十四世のヴエルサイユの豪華を再現したやうであつた。彼が兄弟に自重を忠告し、忍耐と反省とを勸告したのもこの頃である。彼の肥滿した體格と、ジユピテルの神のやうな額は眞に皇帝の名に相應しく見えた。彼の母がその幸運に驚き、『これが長く續くならばね』と言つたのも此頃であつた。

それにも拘らず、彼は甚しく輿論を怖れてゐた。彼は殆んど反響のないトリビユナ議院を廢止した。タレーランの外相を罷めてシヤンパニーに代へたのもこの頃であつた。タレーランは强慾であることで諸國の王侯から注意が頻々とあつた。

この頃からメツテルニヒの顏が現れて來た。彼は同じく巴里に派遣されてゐたロシヤ大使館の

ネツセルロード書記官に向つて、

『ナポレオンは強力であるが一時的である。われらは互に彼に欺かれることなく、衝突を避けつつ、この驚くべき冒險者の來るべき審判の日のために準備しよう』

と囁いてゐた。

(17) 後門の狼

西班牙に關する史實は、ナポレオン史中の最も面白くないものである。ナポレオンの悲劇的運命は、全く西班牙事件が作り上げたのであつたかも知れず、或は、尠くとも彼の運命に多大の悲觀的要素を加味したものであつた。

西班牙王はカルロス四世であつた。この王家はルイ十四世の後裔で、ブルボン家であつた。王は優柔不斷であり、ゴドイが宰相の實權者であり、太子フエルナンドーは父王の弱點を受繼いだ弱い性格であつた。しかし、王はフランスの同盟者であり、別に大した缺點はなかつた。西班牙をもつと強力な同盟國にし、對英抗爭に重要な要素としようと念ふと、眞に物足らぬ國であつた。

事實、王と太子の間に、王妃とゴドイとが介在して、いはゆるお家騷動が始つてゐた。それにゴドイに對する反感が國民間に漲つてゐた。ナポレオンがそれを利用したくなるのは無理もないことであつた。太子にはまだ妃がなかつた。ナポレオン家に適當な公女があつたら、先方の太子

の希望もあつたことであるから、容易に兩主權者の間に連鎖ができ、ナポレオンの希望に容易に副ひ得るわけであつた。ナポレオンは是非にもその公妃を一族の中から物色しようとしたが、何としても適當のものがなかつた。

そこで已むなく、國王を取替へる策を取ることになつた。お家騷動を利用して、ボナパルト家の一人を國王に据ゑれば、それで問題が解決しさうであつた。

この頃ポルトガル征服のため、ジユノーの軍隊が西班牙を通過した。スペイン人の歡待は熱狂的であつた。ジユノーの軍は次第にポルトガルに近づき、これに怖れを成したブラガンス王家は攝政王と共にブラジルに逃亡した。カルロス四世もこの例に倣つて、メキシコに行つてくれればそれに優したことはなかつた。

ナポレオンは西班牙とポルトガルを分割する筈であつたが、實戰的援助が殆んどなかつたのと信賴に値しない王家と利益を頒つことの不條理を考へ始めた。これと、お家騷動の處理遷延と、口實さへあれば次第に西班牙駐兵を增加したこととが、國人に危惧の念を抱かせ始めた。彼はカルロス四世とゴドイの監視をするため、ミユラーをマドリツドに派遣したが、ミユラーの西班牙

王位に野心のあつたことが、觀察の目を誤らせた。ミユラーはナポレオンの近親者をこの國の王位に就けることの容易さを通信した。

ナポレオンの幻想はミユラーの幻想を加へて擴大された。ナポレオンは西班牙を理解せず、ミユラーは尙更のことであつた。狂信の名殘と封建の名殘との强い國を他の國と同視し、宗教制度や封建制の廢止を宣言すれば、國人が直ちに彼を謳歌するものと信じた。彼の讀書中に西班牙に關するものの絕無であつたことは不思議であつた。國情を知らず、判斷の不十分な情報を基礎にし、不運と錯誤とが合流したので、さすがの彼も蹉跌することになつた。

しかし、彼は堅實な注意をミユラーに與へてゐた。

『予の行くのは調停者としてであり、興味はジブラルタル及び北部アフリカにあるのだと言つて貰ひたい。相變らず親切な態度であつて、あの人々をあまり怖れさせては危險だから』

と言つた。

彼は自己の西班牙入によつて問題は早速片附くと過信した。唯相手があまりに從順であつて、恭順と誠意とを裝つてゐたからである。正當な非難のない者を王位から去らせ、權勢から斥け

ることは、彼にもできなかつた。それでも、大軍を率ゐて默々として南佛を行軍して進めば、ゴドイも宮廷全部もアメリカに逃亡するだらうと想像した。

然るに彼の西班牙に接近するに從つて、考へが更に變つた。ブルボン家が渡米しても、依然として存續してゐるのでは不安である。況んや植民地を失つた西班牙は、對英抗爭に價値の半分以上を失ふことになる。

そこで、彼は國王逃亡の模樣があつたら、阻止するやう、カヂスに殘留してゐたフランス艦隊司令官に訓令した。

ゴドイは果して逃亡を企てた。しかるに、こゝに民衆の意志が動いて來た。ゴドイを唾棄してゐても、王室に對して人民は敬愛の念を有つてゐた。殊に太子フエルナンドーに對してさうであつた。彼等は王子の出發を阻止するために暴動を起した。それに愕いたカルロス四世は讓位を發表した。ミュラーは王位を空位の儘にして、太子の即位を見合せさせて傍觀した。

然るに、人民は國王の退位によつて、フエルナンドーを新たに王になつたものと了解した。ところが驚愕から覺めたカルロス四世は自發的讓位ではなく、暴徒を使嗾して强制的に王位を放棄

させたのだからと言つて、讓位の取消を發表し、お家騷動は深刻になつた。ミュラーはナポレオンに調停を依頼するやう双方に入智慧した。

これがバイヨンヌ事件の發端である。王も太子も競うてナポレオンの許に趨つた。國境を越える時になつて、太子は多少躊躇した。人民が頻りに太子を引留めたからである。それに國境を越えることは誰しも胸騷ぎの多少あるものである。太子は竟に國境を越え、直ちに自分がもはや國王でなく、ナポレオンの捕虜となつたことに氣がついた。

カルロス四世もナポレオンの許に到着したが、運命はもはやこれ迄だと觀念し、最後の惡度胸を示して、王位を太子に讓らず、ナポレオンに委ねた。太子も亦王位に對する權利を放棄した。この二重の讓位の行はれたのは、いふまでもなく南フランスのバイヨンヌに於てであつた。

ジョゼフが西班牙王位に就いたのはかういふ過程の下に於てであつた。公然の記錄によると、『政策がこれを勸告し、正義がこれを許し、西班牙の內亂がこれを强制させ、陛下は帝國の安全を顧慮し、西班牙を英國の勢力から救ひ出さねばならぬ』からであつた。

バイヨンヌ事件後、彼は努力を海軍方面に注いだ。西班牙の資源を利用し、全帝國の技術を動

員して、造船計畫が着々と進められた。海相ドクレスの受けた夥しい訓令によつて、それが窺はれる。フランス、スペイン、イタリー、オランダの造船工場では、幾多の船艦が建造されやうとしてゐた。

すべて、これに對して、第一に西班牙を確固にして置く必要があつた。ナポレオンは、貴族を廢止し、迷信打破と自由の宣言で、人民が歡迎歸依してくれるものと信じた。また舊教をもつて國教とすることの宣言によつて信頼を得ようとした。

しかし、これは西班牙に於て何の効果もないものであつた。それでもバイヨンヌ事件の直後、直ちに國王を決定すれば解決がついたのであらうが、ミュラーを斥け、ジョゼフかルイを空位に補充しようとし、この二人が拒絶したり異議を唱へたりして、徒らに遷延したことが事態を甚しく惡化したのである。遷延は疑心を生んで、人氏の間に私語を始めさせた。

更に暴動が起つた。バイヨンヌの王室に合するために、殘留の王子達が出發しようとした時、マドリッドの市民が暴動を起し、フランス兵二三が殺された。ミュラーは砲擊を加へて秩序を確立した。暴動の起ることは迷惑であるとしたマドリッドの上流社會は、評議會に提議して、ジ

ョゼフを國王に推戴したい意志をナポレオンに進言した。ミュラーの强壓政策が好果を奏したかの樣子であつた。

しかし、實際はこの殘酷な流血を見せた强壓が西班牙内に宣傳され、叛亂と復讐の精神に點火することとなつた。さうして、見るからに朗かでない太子のために、意外にも人民の同情と敬愛の念のあることが、次第に暴動の勃發によつて現れ、ナポレオン及びフランス人を驚かすことになつた。

新王ジョゼフは愛着の多いナポリ王國を、ミュラーに引渡して、憂鬱の氣分で西班牙に乗込んだ。さうして、スペインに入國するや否や、『バイヨンヌ事件に對して、國民一致して反感を有つてゐる』ことを、ナポレオンに報じた。暴動は寧ろ徹底的和平の原因であるとさへ感じてゐたナポレオンも、西班牙の暴動には困り拔いた。首尾も連絡もない自發的の暴動であるから、鎭壓する者は徒らに奔命に疲れるのであつた。加ふるに、法王廳との葛藤が惡化し、佛軍が法王に侮辱を加へたことなどの報告から、西班牙の聖職者は暴動の尻押をした。

やがて、バイレンの慘敗といふナポレオンの軍に未最有の汚名が生じた。ナポレオンの下にそ

の名を知られたデュポン將軍が叛亂軍に降伏させられたことである。

この敗戰は幾多の戰勝を帳消しする程のもので、陸上のトラファルガルと評せられるものであつた。佛軍の精兵二萬が無統制のスペインの農民部隊に敗れたことは、人民を鼓舞する上に大に與づて力があつた。これによつてカヂス殘留のフランス艦隊は、救援を得ないことになり、全員悉くカヂスの評議會に降伏した。

數日の間に形勢は宛も瓦解の狀となつた。漸くマドリツドに入つたジョゼフは落付く間もなくフランス國境の近くに歸つて遁仕度をする決心をした。メヂナ・ド・リオセコの戰ひに勝つたベツシエール將軍もピレネ山脈に近く引揚げ、佛國の占領地は僅かにエブロ河までであつた。

これに反して、ウエリントン公となるアーサー・ウエズレー將軍は西班牙に上陸し、ポルトガルにも叛亂が起つた。ジュノーは孤立し、ロシヤ艦隊はリスボンで英國のために捕獲された。

ナポレオンは西班牙に入る決心であつたが、今やこの形勢に面して、目を各國の首都に向けねばならなくなつた。バイレンの敗報を耳にした彼は、早速、巴里歸還の決心をした。

彼は輿論が心配になつたのである。しかし、周章しく歸還することは拙策であることを悟つて

約束があるからといふ口實で、フランスの西部諸州を巡視しつつ巴里に歸つた。彼は巡視中口癖のやうに、『予は甚しく滿足である』を繰返した。叛亂の本場であつたヴアンデ地方が、何等西班牙の惡結果の影響をまだ受けてゐなかつたことが嬉しかつたのであらう。

西班牙事件の餘響としてか、墺國は各國君主ともその位に安心してゐられないと主張し、戰備を修めてゐるとの報道があつた。

ナポレオンはその眞相を慥めようとした。巴里に歸還した翌日八月十五日に外交團を引見し、メツテルニヒに向つて、談笑の裡に墺國の決意を訊ねた。いざ事となれば、ロシヤ皇帝も味方に起つてくれるだらうねと言つて、ロシヤ大使を顧みた時、ロシヤ大使トルストイの顏は蒼白であつた。

『言葉通りに、君も行爲によつて平和主義を明かにしたまへ。予は君達の希望する安全を與へよう』

と言つた。

西班牙入りをしないで、巴里に歸つて來たことは、西班牙を放棄した意味ではなかつた。彼は

大軍を西班牙に入れるゝには、歐洲全體を平和狀態に置く必要があつた。せめて數箇月の平靜を見究めてかかる必要があつた。有名なエルフルトの會議はこの意向の中に開催された。歐洲大陸の君王が悉く集會し、たゞ墺帝のみが缺席した。豪華な饗宴の催されたこと、チルシット以上であつたが、熱意のこれに伴はぬものがあつた。名優タルマも興を添へた。

しかし、メッテルニヒは之を冷罵して、『悲劇集團の徵集』だとした。當代の天才と名人とが悉く集り、ゲーテ、ウイーランドもその中にあつた。十八日間の大饗宴は、ナポレオンの興行的才能を傾倒して、スペインの不名譽を吹飛ばす魂膽であつた。

エルフルトの精神は既にチルシットのそれではなかつた。アレクサンドルは覺醒してゐた。舊時の魅力を既に彼に對して持つてゐなかつた。

ナポレオンも感激はなかつた。芝居を演じてゐたのである。タルマが『偉人の友情は神の恩惠である』といふ白を言つた時、アレクサンドル帝はナポレオンと握手し、『予は日々それに氣づいてゐる』と言つた。これは何等約束を意味する言葉でなく、寧ろナポレオンの別の友人たるカルロス四世に對する皮肉なあてこすりであつた。

ナポレオンはエルフルトを一場の夢と見ねばならなくなるのであつた。抑も一度タレーランを樞要の地位から去らせて、何故再び召還して活躍させることになつたか。外交的堅固の工作を行ふために、如才のない、巧緻な人物、つまり、舊時代の高名な外交家を要したからである。

彼の本領は主人とは異つた別個の政策を行はうとするに在り、また自分の受けた訓令を列强に漏洩したところにあつた。

それはナポレオンを中庸のところに呼び返さうと企てたからである。さうして、露國と墺太利とを後押して抵抗させれば、ナポレオンを緩和し得るだらうとした。タレーランはロシヤ同盟盲信のあまり、更に皇帝の迷路に入ることが深くなり、土耳古を分割すれば、更に東方への冒險を敢てすることになるのを警戒し、露帝をナポレオンに對抗させて、有利に停止させようとしたのである。

けれども、タレーランこそ最も盲目な者であつた。彼は征服の制限をして、征服によつて獲たものを保ち得るものと誤信したのである。佛國を舊時の境界内に引戻し、併合地を全部還附させようと列强が決意してゐることをタレーランは知らなかつた。だから、巧妙の極致と自信してゐ

た彼の考へは、實は兒戯に類するものであつた。彼は愚劣にも同盟を動搖させて、ナポレオンを穩健に引戻さうとしたのである。露帝とメッテルニヒは、ナポレオンの股肱の大官すら、自分達に内通するところを見れば、ナポレオンの威信も低下したものと斷定した。そして各自の立場からタレーランの考へを大いに參考とし、將來の平和會議に彼のために一席を保證することになつた。

ナポレオンは悄然としてエルフルトを去つた。最後に露帝と一時散歩を共にしたが、二度と兩皇帝は會ふ機會がないのである。ナポレオンはエルフルトの勘定をしながら、『あの馬鹿な西班牙事件は高價なものだ』と言つた。

しかしながら、彼は期待した直接な大切のものを獲た。彼はタレーランの信ずる程不用意ではなく、あまり高價でなくロシヤとの同盟を更新した。彼はトルコの分割を還延し、コンスタンチノープルを留得した。彼は墺太利の油斷ならぬにしても、早速攻擊しては來ぬことを確信した。彼は西班牙事件を再確立するために、勝手な手腕を振ひ得る三ケ月間の餘裕を得た。彼はそれ以上を要求せず、そのことに就いてサヴアリーに向つて、

『プロシヤから軍隊を引揚げて、速かに西班牙事件を片附けよう。だが、誰が獨逸の動搖を禦いでくれるかね？　まあそれを見るとしよう』

と語り合つた。

彼は露帝と協同して提議をした對英平和の回答に期待をかけてゐなかつた。それは一個の形式であつた。フランスに於ても、歐羅巴の天地に於ても、輿論として、常に眞實英國が敵對行動の原因であることを認識させる必要があつた。英相カンニングの回答は、西班牙の叛徒をも會議に參加させることを條件とし、許容できないことを提議して、否定的回答をした。

ナポレオンは英國に侵入どころではなく、却て大陸の上、西班牙に乗込んで、西班牙の叛軍と握手してゐる英軍を海に投げこむ必要を生じてゐた。一八〇八年十月サンクルーに歸り、月末巴里を發して、面白くない西班牙への途に上つた。

『貴郎は、戰爭をおやめにならぬのですか』

と諫めたのに對して、

『お前は面白くてしてゐると思ふかね。必要に迫られてのことで、事件に引摺られてゐるのだ』

と答へてゐる。

事件よりも人に對して不滿が多かつた。命令の完全な遂行がなく、不在の所には拙いことばかりであるのを嘆じてゐた。彼は一人で萬事に心配した。全速力でランド地方を通過してゐる間にも、軍事、政治の問題から、アラゴン、カスチラ地方に於ての冬季戰、兵士の糧食問題まで、彼は頭の中に浮べてゐた。

一箇月後に、彼はマドリツドの前面に到着し、入城はしたが、ジョゼフを同行せず、ジョゼフに保護仲裁の地歩を與へるために、自分は恐怖の役目をもつて現れたのである。果して、マドリツドの市民は砲擊を怖れ、救援の英軍が敗北したことを聞き、ジョゼフの王位を承認した。

ジョゼフを王位に復してから、次に英軍の掃蕩に當つた。彼は困苦と艱難の戰陣の生活を續けた。あはれな宿場に兵士と同樣の給與で滿足し、距てなく將軍兵士と冒險の生活を語り合つた。彼は英將ムーアに追ひつき、酷い目に會はせるつもりでゐた。

ところが、一八〇九年の一月十二日の夜、フランスからの急報を焚火の光で讀んだ。墺軍が蹶起する準備中だとの報であつた。また別報では、西班牙に於てナポレオンが不測の禍に會ふこ

とは必然であるからと言つて、皇帝の繼承者としてミュラーに白羽の矢を立て、フーシエー、タレーランが策動中であるとの警報があつた。

彼は數箇月前にもあつた陰謀を想起した。さうして、部下の將軍に西班牙平定のことを委ね、巴里に向つて出發した。新年は來ても、休息と平和の鐘はまだ鳴つてゐなかつたのである。

(18) 墓の上の會合

進まぬ氣を引立てて西班牙に向つてナポレオンは、今度は不安を抱いてその地を去つた。彼は他人に對し、また事件に對し不滿ばかりであつた。

彼の支配力は年々多少づつ薄れつつあつた。ジョゼフを西班牙王位に復しはしたが、ピレネ以南の地には遊擊戰が到るところに殘されてゐたし、英軍を海に追落したが、彼等はどこか他のところに上陸するに相違ない。

『王座に生れたのでなく、街路を素足で歩いた者』は、言葉や、幻想で滿足はできない。現實が悉く目に映ずる。墺軍が不在に乘じて攻擊に出る準備をしてゐること、國內には叛逆を企てゐる者のあること、彼の野心、狂愚、傲慢を難じてゐる者のあることも知らずにはゐなかつた。從來彼のために貢獻してくれたものは、國內に於ては成功、國外に於ては恐怖であつた。彼が幸福を與へず、恐れられなくなつたら、彼の帝國は土崩瓦解の一途を辿るのみである。

西班牙はあらゆる誠意の試金石であつた。まづ最初の失敗が、後に取消はできたものの、國內に反對派をつくる原因となつた。立法機關に反對票四十を見たこと、外には墺國の强がりも亦その象徵であつた。ウインナに於ては、露國の同盟なるものも怖るゝに足りないとされ、露帝の冷淡な態度はエルフルトに於てタレーランの逆奉仕とは氣づかぬまでも、事實は事實として了解した。

彼は自己の權威の脆弱と將來の不安とを想像した。彼は繼承者すらなく、どこかの皇女と婚して、偉力のある王室と連鎖をつくることによつて補强工作を完成したいと思つても、それはまだ現實の問題となつてゐなかつた。

彼の不安は公債の低落となつて現れた。戰爭の前兆なしと確言しながら、必至の對墺戰爭の起る前に、策動する者を威嚇して置く必要があつた。威嚇されたのは、フーシエーとタレーランとであつた。威嚇された兩人は觀念して、追放か罷免を覺悟した。然るにタレーランは宰相の地位を去つたが、フーシエーには何の咎めもなかつた。

ナポレオンは賞に厚く罰には輕かつた。デュポン將軍に對しても寬大であつた。彼は烈しい專

制君主のやうに評せられても、實際と想像とは甚しく違つて、寛容であつた。帝政といへば凄まじいが、彼の性格には一種臆病なところがあつた。カルノーは『考へられぬ程の氣の弱い』ところがあると云ひ、オルタンスは『懲罰の件はぬ脅迫を加へ、相手を傷けて置いて、その傷けられた相手に危害の仕返しをする力を殘して置く、こんな過失を常に繰返した』と評した。

對人的にこの不徹底なところが、國際的の態度にも現れてゐる。彼をして辯明させると、『一々罰を加へては、誰も戰々兢々として、自己の地位に安心して仕事ができない』氣が弱いといふのは、眞に氣が弱いのではなく、國の內外に於て、彼の地位の不安定から斷乎たる態度に出られなかつたと言つてよいのである。墺國が今回更に戰爭を仕掛けて來るのは、佛軍が西班牙に力を分けてゐて、微力になつてゐるのを知つてゐたからである。

これに對して、佛國には既に疲弊の徵候が現れてゐたこと、人心がどうであるかを熟知してゐたナポレオンは全く困惑した。戰爭の前兆はないとか、戰爭は目的でなく手段であるが、その必要な豫想は目下のところないと稱したが、危機は次第に迫り、プロシヤの兵力をもつて之に當らせやうにも、プロシヤ人が義勇兵となつて續々墺軍に從軍してゐる。また戰爭であるかといふ不

安は、國內は勿論、味方の立場にあるライン聯邦に高まつて來た。

ナポレオンが、この內外の味方に安心させようとして用ひた方法は、宣傳であつた。さうしてそれには露國の同盟を利用した。露佛の聯合軍が墺軍の武裝解除を行ふ筈だとか、この聯合軍が墺國內に侵入するとなれば、敵對行動は止むとか、墺國の態度を露帝が憤慨してゐるとか、露帝が軍の先頭に立つて進軍中だとか宣傳させた。伊太利の副王に對して、『露軍が墺國に向け進軍中だといふ念を人民に徹底させるやうに』と慫慂した。

またコーランクール大使をして、露國政府に墺國威嚇の態度を徹底させ、墺軍が行動を始めたら、ウインナ駐在の露國大使をして、早速歸國の旅券交附を請求させて貰ひたいなどと、單なる宣言書以上に有効適切な態度を取ることを强請させた。

露帝は瑞典とのフインランド係爭がある上に、英國と同盟したトルコとダニューブ地方の問題で、多忙であることを口實として中立態度であつた。露帝は露都に於て射擊された。英國黨は露帝に對佛敵對運動を迫つたが、時機尙早であるとして、それを避けた。ロシヤはフランスを笠に著て、瑞典やトルコを牽制する便宜を有つてゐた。

それにフリードランドの苦がい經驗は記憶にまだ新たであつた。寧ろナポレオンをして戰爭を繰返して疲弊させ待機してゐることを最も賢明であるとした。プロシヤも同樣であつた。フランスに併呑されるのを避けることが、プロシヤの第一に採擇した態度であつた。要するに、ロシヤもプロシヤも積權的支援の態度でなかつた。

チルシットの効果が、既に半ば失せてゐたのであり、既にナポレオンの精神的敗北が萠してゐた。

『これ程までであることが、西班牙事件前に氣づいてゐたら……』

と彼は後悔した。

チルシットの外交を再び立直す必要が既に生じた譯である。それは前と同じ戰勝をかち得ることによつて可能である。しかし、勝利は年々困難になりつつあつた。アイロー、フリードランド西班牙と順次に不結果である。フリードランドは立派な勝利ではあつたが、多く時を費した。徵兵もライン同盟からの徵發定員以外に、フランス百十五州から夥しい壯丁の徵集を行つた。尙補充兵を徵集する要があつた。所謂『十萬の傭兵』で、まだ不足なくらゐであつた。

かやうな難局に際して、奇蹟的の活動をして、ナポレオンは一度ウインナへの道を開いたのであつた。しかし、アーベンスベルグとエックミュールで五日間も慘憺たる戰鬪であつた。四年前にはウルムで同じ敵が降伏し、それも碌に戰はずしてであつた。今度は攻擊中、一彈がナポレオンの足に當つた。時が艱難になつた證據であつた。その犧牲は一八〇五年に墺露兩軍を破つた時よりも多かつた。

歡樂の都市ウインナも一種の國民的元氣を示し、幾分抵抗を示し、城門を開いたまゝにしてゐなかつた。二度目の入城をして、シエーンブルンの榮華の宮殿內に落着いてからも、彼は面白くない通信を受けるばかりであつた。

ユージエーヌは伊太利で敗北し、ポーランドのポニアトースキーは退却し、ワルソオ放棄を强制され、露帝は傍觀して兵を動かさなかつた。羅馬に於ては法王が切りに獨立侵害を叫んで天下に訴へるので、法王領を斷然フランス帝國に合併した。法王は羅馬に於て、たゞ精神的主權者となつた。

ナポレオンは早く墺國との關係を片付けたかつた。プロシヤの動搖、ロシヤの不安といふ憂慮

があつた。彼の急いだことは、ダニューブ河の架橋に直接橋材の運搬を手傳つたくらゐで、彼の戰爭には常に政策が考慮されてゐた。必須は急迫となり、急迫は冒險に墮することがあつた。

カール大公の軍を前にして、ダニューブ渡河の企をした時、アスペルン、エスリングの苦戰にランヌ將軍の戰死を見、ロバウ島に後退しなければならなかつた時、彼の前途は既に失はれたと目してよかつた。露帝は書簡の援助だけで、一人のコザック騎兵すら送つて來なかつた。

アイローの戰爭は苦戰であつたが、エスリングの戰爭はそれ以上であつた。皇帝が敵前に後退したのであつて、敗北のレコードであつた。ダニューブ河の俄に增水したことは架橋を流失させた。右岸との連絡を遮斷し、糧食の缺乏を來し、漸く精力と犧牲の限りを盡して慘敗を免れた。河が急に增水して、危險に瀕することを彼は豫想しなかつた。

これは豫想すべきことであつて、その責を部下に歸すべきものではなかつた。成功を博すればダニューブの渡河は、天才的作業となり、失敗すれば、冒險作業であつた。

ナポレオンはその結果、精神的影響、殊に獨逸人の頭を熱しさす事件の影響を看取した。また遠くフランスを離れて、しかも、背後には、無理に襲撃して入城した人口の多い首府があること

それが五月二十一、二日の苦戰に疲勞した大公カールの軍の脅威以上に、大なる危險に彼を置くものであつた。

彼の最も虞れたことは、將士の意氣沮喪といふことであつた。そこで、彼は昔マントワで行つたやうに、士氣緊張のために軍事會議を聞いた。

この際、勝利はナポレオンにとつて、またフランス帝國の救濟上必要なものである。すべてが彼に反擊を加へようとして居り、彼の使用する將兵ですらどんな程度にあるかを、彼は觀て取つた。既に獵笛が鳴らんばかりの時であつた。幾多の症狀が現れてゐた。名もなき一揆徒黨から山賊の頭領、愛國者、使徒の群、下は宿屋の主人から、上は彼を破門することさへ辭せぬ法王があつた。佛軍の駐屯してゐるのも構はず、羅馬人が三大伽藍に彼を破門した令書を貼付する者があつた。

この宗教的の天譴はナポレオンの怖れるものではなかつた。まだ他に始末をせねばならぬ攻擊があつた。彼から見れば、この羅馬事件は宗教に關したものではなく、政治問題である。法王廳とはこれまでに折合のついたこともあり、今後もさうなるものと確信してゐた。さうかと言つて

心とが合體し、眞にナポレオン隆盛時の完璧の傑作であつた。

それにも拘らず、彼はワグラムの戰にあまり滿足でなかつた。將兵の受けた損害は敗軍のそれにも劣らぬほど高價なものであつた。諸將及び軍隊から常に要求することのできない努力を要求した。その上事情も幸運であつた。太公ヨハンの軍隊がカール太公の軍と聯合するところに至らず、これに反して、ユージエーヌ、マクドナルド、マルモンの味方の軍は、途中障害なく適時に到着した。彼は青年フランス兵をもつてしては、如何に苦痛を忍ぶべきか、援軍であつたら、如何に扱ふのに骨の折れるかを知つた。

彼はワグラムの戰を、アウステルリッツ、イエナのそれと比較した。もはや偉大軍隊の統一性はないので、左右の翼だけをもつて獲る勝利ではなかつた。機關が輕快でなくなつてゐることを彼は感じた。

ナポレオンはあまり滿足でなかつた。といふのは、ワグラム戰の翌日は、もはやアウステルリッツの翌日とは同じでなかつたからである。勿論必要であつたからではあるが、思ひ切つた奮起をしたので、當面必要な結果は獲られたが、何等それ以上のものでなかつた。

今度は、平和哀願のために、墺國皇帝が彼の陣營にやつて來なかつた。若し、カール太公の軍が、打擊を受けても、擊滅せられず、多くの新兵と莫大な資源のあるハンガリーに遁竄したら、ナポレオンはどうしたであらうか。敵に誤算があつて、勝者は大なる當惑を感じないで濟んだ。太公はボヘミアに退却した。

追擊は振はなかつた。ナポレオンはこの役の終局を望む幾多の理由を有つてゐた。一向これといふ働きをせずして、西班牙に在陣してゐる二十萬の軍を、彼は惜しいと思つた。新行動を起し賢明なる作戰を行つて、第三回目の戰爭に墺軍を引込むことは、すべてを危からしめる虞れがある。それに、若し不幸な事件でも起つたら、佛軍を壓倒するために、既に攻擊態度に出ようとしてゐるプロシヤが、中立を棄てるかも知れぬ。

ワグラムの役は七月六日であつた。十二日に休戰協定がツナイムで調印された。ダヴーの軍がアウステルリッツに野營してゐた。數週後皇帝はこゝで閲兵式を行つた。

その日の晩餐に、諸將を顧みて

『これで二度目だが、三度こゝに來ることがあるかね』と彼は聞いて見た。

果しない戰爭といふ觀念が人々の頭に萠して、ために或る種の考慮を始めてゐる者があつた。ベルナドツトはその一人であつた。幸運に瑞典王位に上つた彼は後に敵側に立つことになる。マクドナルドは元帥に昇進した。皇帝は周圍の者を顧慮し始めた。

シエーンブルン宮に歸還すると、不安の問題と報道とが續々彼の許に屆いた。平和談判は十月中頃まで續いた。彼の信頼してゐた將軍のスーはポルトガルに王國を創立しようとしたが、英軍に驅逐され、ポルトガルは敵の手に落ちた。ウエリントンと佛軍とが西班牙で戰つて、負けたウエリントンが却て有利な結果を收めるといふ拙劣なことがあつた。何にも予がゐなければならぬかと、彼は嘆聲を發した。

さうかと思ふと、他の方面では、法王を拉してグルノーブルまで連れて行き、また伊太利のサヴオナに伴れ歸るといふ無駄な振舞をする者があつた。

英國は平和條約調印の阻止を策して、墺太利に働きかけた。英國はまた一軍をワルケレン島に上陸させ、フランスのモンネ將軍はフレッシングを敵に委ね、アントワープは脅かされた。內務大臣のフーシエーは無益に戒嚴令を布き、國民軍を徵集し、商工業者中の富裕な青年を將校に採

用した。

然るにこの富裕な社會は戰爭の永續に不平を抱いてゐたのであるから、全く敵に武器を供給するやうな危險を敢てしてゐるのであつた。のみならず、フーシエーは共和主義の退職軍人を再び採用して、國民軍を組織し、ベルナドツトに指揮に當つて貰ひたい旨を通じた。

やがてフーシエー彈劾の告發、愁訴が續々と皇帝の許に達した。皇帝はフーシエーを大臣の地位から去らせ、ベルナドツトの指揮權を奪つた。尙、國民軍は解散させ、『理由なく戒嚴令を布いた』ことでフーシエーを譴責した。例によつて、陰謀の萠芽しつつあることを察したのである。事實、舊敎信者の中には法王に同情して運動を開始する者があり、王黨の中に希望を復活して活動する者が現はれ、また無神論者等の嘲笑が起つた。

更に國外では英國が盛に活躍し、スペイン、伊太利、ドイツに不穩の狀勢があつた。墺國はこの不穩の空氣に依頼して、談判を遲延させ、何事かの勃發を期待したが、英軍はワルケレンを撤退し、スペインの反亂は挫折し、いつ迄もフランスの大軍をオーストリーの費用で賄つて置くことは、破產の憂も生じて來たので、態度を軟化せざるを得なくなつた。

すると、今度は反對にナポレオンが前言を翻して、平和維持のために、佛墺の友好關係の强化を提唱した。彼はフリードランドの大勝後に、ロシヤとの同盟を得た例の如く、今オーストリーの同盟をワグラム戰後に獲得する考になつた。さうして、ロシヤ同盟の薄れた効果をこの國によつて恢復しようとしたのである。

然るに、この新平和條約調印の前日、新時代の徵候を示す事件が起つた。彼がシエーンブルンで觀兵式を行つてゐる際、一人のドイツ青年學生が皇帝に接近し、暗殺を謀つた。その學生は短刀を所持して居り、平然として『祖國のために暴君を殪さうとした』ことを白狀し、若し一命を赦されたら、更に再擧を謀る旨を語つた。誰もこのフリドリヒ・シユタープスを赦すことは不可能であつた。皇帝の注意があつたにも拘らず、この事件は諸國に知れ渡つた。無論フランスにもそれが傳へ報ぜられた。暗殺の成功は今一歩のところであつた。これは一向不思議なことではなく、いかにも有りさうな事件であつた。政治的狂熱が第一執政官たる彼を狙つたやうに、獨逸の狂信的國民主義が、獨逸青年の手を武裝させたのである。

そこで、ナポレオンも考へた。彼は將來のことを考へ、保證のことを考へ、自己に缺けてゐる

安定性を考慮した。それにしても英國との事件の結着をつけるには、大陸の問題を片付けることが必要である。

しかしながら、その歐羅巴事件は、彼が手を染めれば、益々複雜になつた。墺太利がナポレオンに課した戰爭の結果として、ポーランドに關する難問題が强くなつた。それといふのは、今度の戰爭に、ポーランド軍がナポレオンのために實戰に參加した唯一の同盟軍であつた。獨逸聯邦の軍は戰つたが、その結果はよくなかつた。それは强制服役であつた。然るにポーランドの兵は自發的に應募したもので、意氣組みが異つてゐた。西班牙に於てもこの貴重な援軍は商賣根性で參加したのではなかつた。

どうして、これに酬いるに忘恩をもつてすることが出來やうか。要するに、强力なポーランドはフランスに取つて役立つものであり、いかゞはしい友情や不確實な服從に對して、均衡を保たすものである。

しかしながら、大ポーランドを建設するには、全然ロシヤに損害を與へないでは濟まぬ。そこで一八〇七年と同じ困惑に彼は陷るのであつた。何人にも厭な顏をさせないで、すべての人に滿

足を與へる法はないものであらうか。墺太利から征服し取つたガリシヤはどこかに歸屬させなければならぬ。適當の分配は實に困難であつたが、結局、その一部をもつてワルソー公國を大きくし、他の一部をロシヤに、大部分を墺國に貽すことにした。露都に於ては、ポーランド再興の意志は毫も皇帝にはないことを明確に反覆させた。

しかし、幾ら小なりと雖もワルソー公國を大きくすることは、露國の不安とするところであり同盟國フランスに對する苦情となつた。幽靈のやうな同盟ではあるが、ナポレオンはそれを保存したかつた。もはやロシヤとの同盟を信じてゐないことその事からして、尙更のこと全歐をしてそれを信じさせて置くことを必要としてゐたのである。

その形骸を保存して置くことは、啻に全歐をして尊敬させる上に有益であるばかりでなく、更に別個の支柱を得て置くために必要であつた。といふのは、經驗によつて、必要の際、ロシヤは動いてくれるものでないことを證明したからである。

ウインナの平和會議の時、ナポレオンが一寸閃めかした觀念に、彼は立戻つたのである。さうして、その觀念は、メッテルニヒがアレクサンドルの例に倣つて推奬したものである。墺國はフ

ランスを攻擊して、唯土地を失ひ、侵入を受けた外何等得るところなかつた。名譽とハプスブルグ家の誇りとに包まれてゐることは、不用意の至りであり、これに反して時日遷延のために友誼の假面を被ることは簡單である。これがアレクサンドルの示した例であり、その約束は犧牲の極めて少いものであることを正に敎へて呉れたのであつた。

かやうに、數週間前に、ナポレオンはロシヤに欺かれたこと、並に前からありはしなかつたがもはや信賴の念を彼に有つことのできないことを告白しながら、依然として同盟の幻影を保存しようとつとめつつ、墺太利との同盟に彼は着手しようとしてゐた。常に抱いてゐる彼だけの見地では、また境遇が命ずる立場から、即ち英國との戰時狀態から脫却するために、彼は歐羅巴の體系を堅固永續的のものたらしめようと希望した。さうして、彼の友好を欲する者は、御都合主義の者ばかりであつた。

ワグラムもイエナ、フリードランドと同一結果を生じて、決してそれ以上でなかつた。勝利がなくなり、ナポレオンの武力が害はれれば、『同盟の妖怪』は姿を消すことであらう。

この夢のやうな聯盟のことに立戻り、それを押進めて行く前に、ロシヤの脫退によつて目醒め

た皇帝は、アレクサンドル、フランシス、フリドリッヒ、ウイルヘルムのことについて語つて、『彼等は予の墓の上に會合をしたが、結合することはできなかつた』と述べた。彼等が敢て結合する日は、もはや遠くはなかつた。

彼等の連合を妨げるために、ナポレオンには唯一つ試むべき最後の計があつた。政治同盟の後に、結婚同盟、婚姻による安定、世界の最も狹い倶樂部の、諸王近親の間に伍することがそれであつた。そこに入れば、彼の體系のために一支點、彼の帝國のために一個の保證を得ることにならう。

チルシットのそれとは別の大きな幻影であり、戴冠式のそれよりも尙一層大きく、しかも國民によつて頒たれるものであつて、彼にとつては太陽の西に沒する前の新しい光輝の價値を有するものであつた。

(19) 離婚・再婚

ナポレオンは、不安を胸にいだいて巴里に歸つた。ワグラム戰後の彼は、滿足とおもふことつもなかつた。今度こそ基礎を固めなければ、帝位も帝國も暴風に吹き飛ばされると思つた。人が服從してくれるのは、功利的に自己の安全をおもへばこそである。都合次第で、明日とも言はず捨てられる身である。彼はそれを悟つてゐた。

彼はいかにも現實主義の人であつた。

『自分が死んだら、人は何といふかね』

と、彼はセギュール將軍に質問した。

將軍は辭に窮した。すると皇帝自身が、

『何もないさ。唯、うふと呟くだらう』

彼は愛せられてゐるのでなく、我慢されてゐることを知つてゐた。彼は寂しい人であつた。世

評とは異つて、苦味の蔽ひ難いものがあつた。彼の母が、こんなことが永續きする筈はないと言つて首を振つてゐる間に、彼は足許の土が震動してゐるのを感じ、最後の運の始つてゐるのを見透してゐて、その持續方法にひたすら苦心してゐたのである。

フォンテンブローに歸着すると、第一にカンバセレスを招いて、意中を語り、心中の不安をも告げた。

事實西班牙事件から對墺政策も複雜になり、危險も多くなつた。既にドイツの空氣が穩かでなく、シュタープスの與へた影響は大したものであつた。生命だけを脅す彈丸の類ではなかつた。巴里では皇帝の繼承者として、前にミュラーを候補者と噂してゐたが、今度はユージェーヌだと噂した。

彼は周圍を眺めて、自己に代るべき人物のないことを認めた。わが死後は、帝位の爭ひであらう。マドリッドのジョゼフの左右でも、帝位の相續はこちらが順位だと鼓吹してゐた。

帝國の危險を想像して、ナポレオンは離婚のことを考へた。輿論はジョセフインに味方してゐたが、彼は輿論の誤つてゐることを斷言し、離婚の必要をオルタンスに語つたくらゐである。血

統保存が私情でなく、彼は帝國のために必要を感じたのである。ジョセフインは疾くにこのことに感づいてゐた。このジョセフインとの離緣を政策的に主張する政治家もあつた。また、帝冠が彼の兄弟の一人に墮ちて來るやうでは、禍であると眞面目に考へてゐた者もあつた。

冷靜な打算をする者はジョセフインの死を希望した。既成事實に利益を見出してゐる社會は、離婚に贊成してゐた。帝室の繁榮永續は、皇帝の結婚によつて、子孫が生れると否とにかゝつてゐると、フーシェーは常に繰返して主張した。皇帝の離婚をする決意を耳にして、フーシェーは喜んだ。さうして、これに反對する者は、四十五十の女性ばかりだと放言した。

ナポレオンの離婚を決意した根本は、子孫を得ることから生ずる安全と、同時に、新たに結ぶ親戚關係の効果を誇大して想像したことである。かやうな點に重心を置いてゐたから、彼にとつてどんな高い地位の女性でも、高すぎるといふことはなかつた。フランスの女性を迎へてはといふダリューは、國民に快感を與へることを善いと考へたのであつた。

これに對して、ナポレオンは、主權者の婚姻は感情問題でなく、政治問題であると答へた。彼の離婚は、感情や意地ではない。國家問題の方が、一婦人との關係よりも重大である、と認めた

彼の所信から出たものである。結婚は保證であり、子は『楯』であり、妻は避雷針であるといふのが、一八〇九年の彼のフォンテンブローに於ての所信であつた。

ウインナから歸つて、離婚の決心を打明けた時、ジョセフインは氣絶した。皇帝は人を呼んで二人で皇后をその室に運んだ。狹い階段を下りる時、驚いたことには、

『氣をおつけ下さい、あなた、あまり强く抱き緊めていらつしやいます』

とジョセフインは低聲で呼いた。

二人が相互の意志から離婚をする旨を、家族一同の前で發表した時、彼女は讀み上げてゐた離婚書の中途まで來て、啜泣の涙に咽喉がつまつて、朗讀を中止した。その涙はいかにも當然であり、自然であつた。彼女は連れて來た二人の子供の行末を保證して貰ひ、離別された後のことを依頼した。彼女は世間に對し、後世に對し、同情を得ることにすぐれてゐた。ナポレオンは却て硬くなり、家庭の人としてまことに不器用であつた。

彼女は王族の待遇と所領としてマルメーゾンを與へられた。彼女は舊時代の趣味をもち、オーストリー贔負であつて、メッテルニヒ夫人と交情が濃かであり、離婚後もオーストリー皇女との

緣談に盡力した。

墺國皇女とナポレオンとの緣談は、彼が第一に選擇したものではなかつた。露帝の妹と結婚して、同盟を强化し、チルシット條約の事業を完成することが、第一の希望であつた。エルフルトの會議で、露帝に對して諷意を見せたが、まだジョセフインを離婚してゐないので下手に面目を潰すことも厭であり、露帝は拙い拘束に支配されたくなかつた。

皇妹のカテリナは妙齡であつて、ナポレオンからの正式申込のない間にと、急いでオルデンブルグ家に輿入れした。その後にはまだ少女のアンナ大公女があつたばかりである。

ナポレオンは今ジョセフインを離別し、十分意向を明かにした。歐洲では皇帝の結婚談で持切りであつた。ロシヤ大公女のアンナは少女とはいへ、既に十五歲であつた。年齡の差は甚しいが、政略結婚ではその事は大したことではなかつた。將來母となり得れば、美醜は問題でなかつた。

大使コーランクールの調査によると、容姿は申分のないアンナ姫であつた。露帝自身がこの妹を伴つて巴里に來てくれゝば、これほど幸運のことはないと、彼は想つた。チルシットよりもエ

ルフルトよりも、同盟强化の策として、この右に出るものはなかつた。世間は既にロシヤの態度の冷淡なことを知つてゐる。この信用恢復にはこれくらゐのことは必要であつた。

ナポレオンはコーランクール及び左右に旨を含めて、頻りに働きかけた。必要ならば借款に應じ、ポーランド再興を中止してもよいことを聲明した。ロシヤは、これにつけ込んで、利益を悉く取り上げ、與へる物は最少限度とし、結局妹を與へなかつた。その口實は母后の決意次第であるとしたり、年齢の不足であつた。

別の候補者を推薦もしくは自薦する者が多く現はれた。しかし、大公女を候補としたくらゐであつたから、身分の低い者の中から求める譯には行かなかつた。幸に墺太利の方は、殆んど進んで内親王をナポレオンに向つて申込むといふ有樣であつた。恰も結婚競走に負けてはならぬかの意氣ごみであつた。内面運動が旺んに行はれ、多くの仲介者が現はれた。

ジョセフインが、自己の最後を飾るために、司會者となつた夜會の際、墺國の一書記官がセモンヴイルといふ多辯家に向つて、皇帝から申込さへあれば、確實に承諾されることを語り、更に進んで、マリー・ルイズの健康のよいこと、清らかなこと、ハプスブルグ家の女性に子供の多い

ことを噂した。

大革命當時の人々の如く、墺國との婚姻に反對であつたカンバセレスは、まだ一切の決定しない前に、

『皇帝がその女を娶らない一方の家柄と、二年經ぬ間に戰爭があるやうな氣がする』

と言つた。

露帝も墺帝も心事は同一であつたが、ロシヤ皇帝の方は案外正直であり、他方は危險を回避し、嫌疑を受けずに復讐することを欲し、國力恢復の爲に、マリー・ルイズを食人鬼に引渡したのであつた。

ナポレオンの側では、兩家との婚姻を衡器にかけ、義父の方が義兄よりも價値が多く、ロシヤの大公女よりも、オーストリーの皇女を皇后にした方が、親族的關心を多く持たれる筈と思惟した。實はフランシス皇帝とメツテルニヒとが、さう信じさせたのである。離緣する正規の手續を了せず、その上法王から破門されてゐる者を婿として承認することを、オーストリー皇帝は毫も躊躇しなかつたのである。

オーストリー皇女と結婚したことは、ナポレオンがウインナ宮廷の、策略に陥つたことであつた。ウインナの宮廷は、戀をした獅子を睡らせ、媚を呈することによつて、英雄を夢に誘つたのである。しかしナポレオンとしては、新たにまた錨を投じたつもりであり、更に切札を一枚加へたつもりであつた。彼は屢〻墺太利と戰ひ、まだその怖しいこと、馬鹿にならぬことを知つてゐた。

親族會議兼政治會議に於て、皇帝は婚姻について長老の意見を求めた。ラキユエが、

『墺太利は、もはや大國ではない』

と云つたのに對して、彼は素早く、

『なるほど、君はワグラムにゐなかつたからね』

と應酬した。

ナポレオンはエスリングでの失敗後、不安の裡に過した幾週間を忘れず、アイローの夕暮の恐怖を忘れなかつた。二皇帝を擊破するために、懸軍萬里モラヴィヤに突進した時の、アウステルリッツ前の懸念をも忘れてゐなかつたのである。そして獨逸の諸民族が、獨逸皇帝と密接な關係

を保持してゐる事實から生ずる、勢力、威力をも、彼は認めてゐた。親密な連鎖によつて、墺國と結合し、他方ロシヤとの同盟も形式的存在とすれば、彼の大陸政策の繼續となり、或は完成となるかも知れぬと考へられた。

ナポレオンは依然としてロシヤとの緣談に執着し、いかに動搖はしても、露帝との同盟が、彼の政策の根本であり、婚姻はそれを强化する方法であつた。しかしながら、フランス皇帝として何時迄も皇妹の自稱候補者として居るわけにはゆかぬ。實業家くらゐならば、敢てそれも我慢のできないことではあるまい。

返事は遲延に遲延を重ねて際限がなかつたが、コーランクール大使には一八一〇年一月中に決答のある筈であつた。然るに決答は遂に來なかつた。もはや良い返答のある筈はなかつた。

それでも返事だけは來た。太后は姫のまだ若きことを主張して、問題を二年延期する意を表明したのであつた。それは婉曲な拒絕であつた。この返事を受取つたナポレオンは、既に決心をした。要するに、皇妹のカテリナには狼狽てて緣談を取決め、『愚劣な結婚』をさせ、妹はまだ十五歲だからと云ふのであつたから、ナポレオンは正に『鼻の先で扱はれた』のであつた。彼は

それに氣づくに手間取つたわけである。

今、彼は天下公知の前で、この結婚に憧れて、醜體を見せるところであつた。彼はマリー・ルイズに申込をしなかつた。また慣用外交談判をも始めなかつた。たゞ諾否を表明し、ウインナ宮廷に回訓を請ふ暇のない事件として、即日シュワルツエンベルグに掛合つた、この墺國大使は承諾し、獨斷をもつて皇女の問題を決し、後に取消されることもなかつた。確答が齎されると、マリー・アントワネットとルイ十六世との婚禮の例に倣つて婚約書が調製された。

墺太利の若き女性が、太鼓を叩いて、結婚のために巴里に乘込んで來るのは大膽な振舞であつた。王位にあつた伯父、伯母を殺した人々の間に乘込んで來たのである。

帝國の高官會議に、ナポレオンは形式を如何にすべきかを諮つた。中には、この結婚をもつて、大革命のフランスに挑戰するものだとした。ミュラーは殊に激昂した。ナポリのブルボン家と近親關係のハプスブルグ家との握手は、どんな結果を伊太利に及ぼすかも知れぬことを虞れて革命的感情がナポリ王の彼に強く現れたのであらう。

タレーランは一七五六年の前例を引き、英國に對抗する上に、その同盟の効果のあつたことを

說いた。それは同盟を顚覆さすのでなく、同盟を補足しようとする說であつて、ナポレオンのよく耳を傾ける種類のものであつた。

露帝との同盟も、ナポレオンの重要視して破棄を欲しないものであつた。勿論、露帝の婚姻拒絕の意味は明白なものであつた。若し露帝が欲すれば、妹を彼に與へられない筈はない。專制君主が、その國內に於て、母后に支配されるとも想はれない。母子協議の上のことであらう。それは臆測ではなく、クーラキン大使の書類によつても、證據がある。しかし、自尊心の傷けられた點はなかつた。

それにマリー・ルイズとの結婚が、ナポレオンに十分自尊心の滿足を與へた。彼はアレクサンドルの自尊心をも酌量した。年齡、健康、宗敎の相違なども、理由あることと首肯した振りをして、別の女性を物色したと確言し、政策には何等變更のないことを言つた。チルシットで示した友好關係を害するどころではない。墺國皇女との婚姻によつて、ウインナ、巴里、露都の三つを割據狀態に置くどころか、三皇帝接近の因となるべきであり、溫和、謹愼、注意を心掛け、感情を害することを避けよといふのが、當時コーランクールの受けた訓示であつた。

しかし、この道理に叶つた行動は、いかにも續け難いものである。用意周到にといふことが、既にロシヤとの親族同盟の失敗が政治同盟の決裂を疑はしめるものであつた。若しナポレオンが衛兵を伴れずにゐたら、騙されて安全を脅かされるかも知れぬ。あまりにビザンチン式のアレクサンドルが何をするか知れたものではなかつた。ナポレオンが彼の義弟となつたら、既にコーランクールの調印した條約の批准を行ひ、佛國をしてポーランド再興の擧に出ることを妨げ、その國の名をすら口に出させないやうにしたかも知れぬ。

然るに、カンバセレスの豫言通りに、二年後にロシヤと戰爭をすることになれば、ポーランド軍を要することにならう。彼等に屈辱を與へ、彼等を落膽させたら、徒らに不名譽を招くこととなるであらう。

そこで、ナポレオンは反省し、決してポーランド王國の復興はしないと約束した。ポーランド人の叛亂を武器をもつての鎭定には參加しないことにした。彼は唯ワルソー大公國を承認するに止め、アレクサンドルの希望通り、ワルソー公國の國境を他國に對しても保證することはしなかつた。

その制限は極めて輕微のものである。しかも正當のものであつて、形式に於ては巧妙である。保證を幾度も更改したので薄められ、墺國皇女との結婚によつて、ナポレオンの感情も確信も變らず、飽くまでも同盟者兼友人の意中であつた。唯ナポレオンが警戒してゐると、露帝が考へないとは保せられなかつた。

疑心は双方から擴大した。しかし、同盟、友誼から、戰爭に移るには、ポーランド事件よりも重大な何事かが必要であつた。

兩皇帝の間の公式關係は、常に同じ調和を保つてをり、勝利の婚禮の式が行はれた日に、クーラキンは叙勳された。勿論、ナポレオンは、わが寢床に高貴なハプスブルグ家の姫君を捉し來つたことを誇りとした。史上に無比のこの結合を、彼以上に如何なる偉人と雖も、感激せずにはゐなかつたであらう。

彼は古い家柄の主權者としての待遇を受けることで滿足し、嘗て顚覆された王朝を自己の帝室と連結し、革命と正統とを自己の身に併せ、融合の大思想を完成したことに滿足をした。常に婦人に對して有つてゐた趣味から推せば、美しいこの獨逸の女性の淸新、鄙の風情のない淡紅色の

薔薇、人を誘ふ從順な花の娘に對して、彼は敏感であつた。

彼女はナポレオンにとつて、また別個の魅力があつた。彼女は、かつてジョセフインにあつたよりも更に優れた姿態、世界一の姫宮の無比の純潔さを有つてゐた。ホフブルグの薫陶によつて皇后の地位に備はらざるものなく、政策上選ばれただけのことがあつて、夫君に男子を設け、帝國に繼承者を授けるに相違ない完全な女性であつた。

彼は殊にこの結婚の主要な面を認めた。たゞに繼承者の望みを與へるばかりでなく、彼不斷の思想の、統一せられた歐洲、聯盟の大陸完成を彼女に認めたのである。墺太利との結合は、言葉こそ用ひられぬが、同盟である。婚儀の祝ひは新たに、チルシットの光景を再現するものであつた。

佛墺の兩國人は親和を表し、兩國々旗は交叉され、ワグラムで戰つた兩國の兵は、互に乾杯した。代理として婚儀完了の任務を帶びてウインナに派遣せられたベルチエーは、特に軍部の歡迎を受け、彼自身幾度か當の敵手であつたカール大公に、皇帝の佩用するレジオン・ドノール勳章と、ニエメン河の筏を前に、ナポレオンがアレクサンドルの部下の猛將に手づから授けたと同じ

兵十字章とを齎した。

巴里に於て、悉く墺國のために成されたと同じく、ウインナに於ては、すべて佛國のために成された。エルフルトに於けると同じ感激であり、同じ狂態であり、同樣の演劇があつた。メツテルニヒが巧みに感激の情を示した。公式に於て、またルイ十六世の婚儀の時の繰返しと見られる大饗宴に、彼こそ皇帝フランシスの代理をつとめた。唯君王の華美をつくした婚儀に、ナポレオンが巴里に召集した樞機官の十三人が缺席し、破門を喚起せしめたことは、彼の大に憤慨するところであつた。

一八一〇年四月二日の、戴冠式の別個の光景であつた瀰撒はルーヴルの方形の間で行はれ、皇帝の叔父フエッシュ師によつて司會せられた。

午餐の時、メツテルニヒは窓に現れ、杯を擧げて群衆に向ひ、

『羅馬の王のために』

と叫んだ。

して見ると、あらゆる奇蹟が見られる譯であつた。墺國皇帝は既に神聖羅馬帝國を斷念し、フ

ランスに對して、將來の獨逸皇帝のための古い資格の、羅馬人の王といふ肩書を讓渡するのであつた。

水晶馬車に乘つたナポレオンとマリー・ルイズを拜觀せむと犇めきあつたこの巴里は、取りも直さず、マリー・アントワネットの所刑を喝采し眺めたと同じ巴里である。輿論は可もなく不可もなしである。世人は必ずしも同一思想に執着してゐない。

ナポレオンは一面澁面を作る哲學者らしいところがあり、群衆の無節操なことを知つてゐる。あまり先見の明があれば狂人扱ひにされ、英國との戰爭が繼續されてゐることを忘れて、この時代を黃金時代のやうにいふのである。マリー・ルイズは平和の保證と見えたので、評判が良かつた。

人々はこの頃を最も立派な君主政治の時代と認めた。彼は自己の出所を忘れた譯でなく、佛人親和の大思想を忘れたのでもない。常に革命の思出を反感的にさせないやう注意し、場合によつては、古い共和主義者達の感情を和けるやうにした。

『この結婚によつて心配を始める人々を安心させ、滿足さすやうに心掛けた』

と彼は言つてゐる。

シャトーブリヤンの反革命的演說をアカデミーに於て禁止したのも同じ配慮からであつた。ナポレオンは、新貴族が帝國の正統化によつて、何等か獲るところありとしてゐるのを十分知つてゐた。公伯が眞の貴族階級となり、他方、古いエミグレの王黨も、最後の懸念から解放され、宮廷、諸會議、府縣、參謀本部等にまで『侵入』した。上院への內命として『皇帝は貴族階級を欲し、特に辯護士を欲せられず』といふことであつた。

これが一八一〇年の反動時代であつて、內部にあつては、政治同盟と對應し、外部的には親族同盟に對應するものであつた。それといふのは、今やナポレオンはマリー・ルイズによつて、殆どすべての君主と從兄弟同志の關係にあつたからである。さうして、この社會を攻守同盟の組合と思ひすぎた傾向であつた。それに、彼の連合する要を認めてゐた歐洲は、君王の歐羅巴であつた。それをよく一致結合さすために、その社會の考方を採用し、自から王室化した。

この壯麗の年の八月、カール十三世はジョゼフの義弟ベルナドットを繼承者として採用し、瑞典はこれを君王として選擧した。ナポレオンもこれを承認した。大陸の殆んど全部、到るところ

同盟の君主があり、親族として王があり、さうして、少くとも、彼は自分に奉仕してくれる王の群と解してゐた。當時、誰かが彼を目して『光榮の中で散歩してゐる』と言つた。殊に彼は信賴を得、彼は四方に錨を投じたつもりであつた。

結婚後二十日を經つて、ナポレオンはマリー・ルイズを伴つてアントワープに赴いた。彼等は殆ど五月全部を白耳義で過した。新しい皇后を白耳義人に見せるためのやうであつた。新しい皇后は、フランス皇帝を歐洲君主の家柄に仲間入りをさせ、昨日まで敵であつた皇帝の婿としたのであるから、戰爭は少くとも當分放棄されたものと人々は信じたのであつた。

この間に、ナポレオンの頭には常にスペインのことが氣懸りであつた。ナポレオンの一家の中の女性をアストリア公の妃として、フエルナンド七世を王位に復するのが、最良の方法と再び考へるやうになつた。が、リユシアンの女のロロットがどうしても王妃として不適當である。幾度かの交渉の後、リユシアンは米國に向け發航し、途中で英人に捕はれて、人質のやうに英國に拉し去られた。ジョゼフは依然として拙い統治をマドリッドで行つてをり、オランダ王のルイはナポレオンと爭つて、遂に逃亡した。ルイは彼の最も愛した弟であり、給料を割いて養ひ、パンを

一緒に割いて食した間柄であつた。彼は兄弟に對して眞に寂しい心持にならざるを得なかつた。

ルイが去つてから後のオランダをどう取扱ふかも問題であつた。遺されたオルタンスを攝政女王とするか。平時ならよいが英國との抗爭中であり、殊にその方で重要な土地である。十分思案した後、彼はオランダを帝國に合併することにした。彼の立場から見れば、無理もないことであるが、世間では彼がまた帝國の擴大を行つたものとして恐怖し、彼の野心を呪つた。

結果は要するに最も彼の好まぬところに落ちて行くのであつた。これも大陸封鎖の影響の現れの一つであつた。大陸封鎖は既に彼を併合、合併、侵略に導き、諸國の警戒と憎惡とを挑發した。彼の絕倫の知力はこの封鎖と、これに關聯する產業のため、經濟活動のために新しい創見と考案と研究とを生み出して盡くるところがなかつた。

しかし、その網が密なれば密なるに從つて、困難と弱點とが續出した。殊に同盟國に與へる不利益を救濟する方法が乏しく、『われらの同盟國は敵と接近し、新しい戰爭が恐らく再び我等の將來を危からしめるだらう』との感を、フランス人に抱かせるやうになつた。

この豫言を一番に的中させる同盟國は、即ちチルシットの同盟國であつた。木材、麻、その他

の貿易の停頓は、ルーブル貨幣の下落を惹起し、それが大公女の婚姻拒絶、墺國皇女との婚姻以上に、同盟關係を破るものであつた。ポール一世帝と同じ運命をもつて脅かされたアレクサンドルは、貴族や破産した商人の不平に讓歩した。

一八一〇年十二月三十一日、戰爭を意味する勅令が發せられた。それはフランスからの輸入品に不當の重い課稅をしたのである。ロシヤの港灣に於て、中立國の貿易自由といふことになり、その中立國といふのは、米國の假面を被つた英國の船であつた。以後中歐はマインツに至るまでリガ經由の砂糖珈琲が販賣された。これは取りも直さず戰爭の原因である。チルシットの同盟は大陸封鎖によつて完全に破れたのである。

けれども、この年の暮には相變らず、彼は光榮の裡に散歩してゐるやうであつた。皇子は將に生れやうとしてゐた。スペインの叛亂も結局鎭定されないことはない。アレクサンドルの態度如何で、再びフリードランドを繰返すまでと、彼は決心してゐた。

彼はチルシット條約の代りに、今度は過大の信賴を彼の結婚につないでゐた。危機は正に目睫の間に迫つてゐたのである。

(20) モスコー進擊の前夜

續々と傳說的の場面が出て來るのは、實にナポレオンの一生である。一八一一年に、彼は多年の願望であつた男子の誕生を迎へた。この幸福を得た父は、翌年には雪中に杖を突いて步まねばならぬことになるのである。

大なる不幸に遭遇すべき運命の英雄も、相恰を崩して喜んだ。不吉な日が近づいてゐる彼を描く時、人は好んで彼が結婚に滿悅し、妻を戀して、マリー・ルイズのスリッパにすら、戀々の情を寄せるところを示さうとする。また、父となつた歡びに醉つて、わが子のために廣すぎる帝國はないと、夢みてゐるところを想像するのが常である。

けれども、この頃の彼の心は重苦しいものがあつた。逆運の日は次第に忍び足で近づきつゝあつた。

レミューザ夫人の觀察によると、ナポレオンは最もよく反省した人であり、他人も何等か計畫

なしに行動することはないと斷定する人であつた。それといふのは、彼自身の行動に、常に何等かの理由があつたからである。ロシヤ遠征を決行するに當つても、彼は十分考慮を費したのである。一八一一年は、この考慮と準備のために悉く費されたやうであつた。

トラフアルガルの海戰以來、ナポレオンは陸上の力をもつて、海上の征服をする方法を求めた。彼は歐洲を封鎖して英人を寄せつけず、英國に結束して對抗すること以外に考へが出なかつた。

大陸封鎖は、取りも直さず、一切を決定する方法であつた。ロシヤとの同盟はその根柢であつた。若しこの同盟が失敗すればどうしたらよいか。時の來るのを待つか。幾日、幾箇月、幾年を待つべきであらうか。抑も事は自然に成るものであらうか。皇帝は、

『弓が、あまりに久しい間張られてある』

といふ言葉を洩したことがある。また、

『時日といふのか、何時も時日か、予はあまり時日の浪費をした』

と呟いてゐる。

若し英國がロシヤと一緒になれば、大陸の聯盟は龜裂である。チルシツトに於て編んだ網が破

れては、數年の努力と犧牲とが徒勞に終ることになる。フリードランドの役を繰返して同盟の新たな結成を策すべきか、單に威嚇して膽を冷させれば、アレクサンドルは考へ直すかどうか。プロシヤが從順であり、墺太利が親密な間柄にある時を利用して、斷然たる態度に出るか。

一八一〇年二月にはコーランクール大使に訓令して、

『ロシヤは變節するつもりか、ロシヤが英國と和した時は、卽ち佛國との戰爭に入る時だ！』

と言はせた。

『予は、運命を、ポーランドの砂中に終らせたくないのだ！』

アイローの納骨堂の前に吹雪の中の苦戰を想ひ出し、瑞典王が沼澤に陷つて、ロシヤ征伐の最中に死んだことを彼は聯想してゐた。

大陸封鎖は實に蓋世の英雄にして、始めて企圖し得る豪快な事業である。彼は五年間もこれを强行して結局失敗に終ることになるが、天才と狡猾との東西の二皇帝が、冷然とした執拗そのものゝやうなジョンブルと三巴になつての爭覇は、蓋し天下の壯觀であつた。

ナポレオンは今や墺國皇帝の女婿であつて、オランダも併合するぞと脅かした。英國は『御勝

手に』と言はんばかりである。

この間に露帝アレクサンドルは、ナポレオン帝國の觸手が、バルチック沿岸に伸びて來ることの危險を想像して、絶縁の決意をした。ロシヤとしては海上の自由航行は欲しいことである。ロシヤとしては、他の意志に拘束されるのは最初であり、早く拘束を脱したい念であつた。同盟をしたのは拘束を受けようとしてのものではなかつた。

大陸封鎖の實際的效果は、封鎖の嚴重な勵行によつて現れるのである。ナポレオンの各地に轉戰するのを見て、世界帝國の空想家だとか、征服戰爭の惡魔的野心家であるからとか、名譽の奴隷であるかのやうにいふのは、誤つた批評である。彼は大陸封鎖の論理的必然性から出たのである。

ハンザの諸市聯合は、一八一〇年十二月十三日上院に於て決定公布されたものである。ブレーメン、ハンブルグ、リユベツクの地はオランダの延長となつた。ウエストファリア王國は、その沿岸地方を切斷せられ、オルデンブルグ大公國も吹飛び、エスコー、ムーズ、ライン、エムス、ウエーゼル、エルベの河々の河口は新しい必要な保證地となつた。彼の海上政策がこれを强制し

たのである。と同時に、土耳古方面、瑞典方面も封鎖しなければ駄目であつた。

瑞典王ベルナドツトは、服從するよりも敵に參加すると公言した。ロシヤは既に封鎖を廢してゐる上に、オルデンブルグ大公國のために抗議を發した。

けれども、ナポレオンと抗爭するには、露帝はポーランド及びプロシヤの協力を俟つ必要があつた。ポーランドに對して、驚くべき甘言をもつて露帝は誘惑をした。しかし、露帝を信用しないポーランドは、悉くそれをナポレオンに通じた。プロシヤはイエナの創痍を再び繰返したくなく、最初の懲罰を受けたくもなかつた。

露帝はそこで時機尙早とし、攻擊を後日に延期し、戰備だけは着々實行した。ナポレオンも警戒の手を緩めず、對策を講じた。露帝は終に脅かされ、攻擊され、犧牲にされると放言した。さうして、野心と傲慢とから、ナポレオンがロシヤ攻擊をする旨を宣傳した。

けれども、事實は決してさうではない。大陸封鎖はナポレオンの對英抗爭の必然的論理の結果であつて、野心や傲慢の行爲ではない。自己の存在理由から出た方策であつて、全部か絶無かの問題であつた。

列國はまたロシヤと同樣の心理であるが、强壓を恐れて已むを得ない服從をしてゐるのである。ナポレオンはロシヤが現在トルコと交戰してゐるから、この機に乘じて威嚇すれば、たゞ威嚇だけで目的の效果を奏するかも知れぬ。何れにしても、何等かの方法をもつてフリードランドの役と同じ效果をあげる必要があつた。

さて、遠征を實行するに當つて、隨分苦心した。口にこそ言はなかつたが、『平氣ではゐられなかつた』のである。この際、彼の帝位を繼承すべき男子が生れた。

この帝位繼承者こそ、當時の彼にとつて不足のものと、世間で想はれてゐたものである。三月二十日にこの希望の男子の生れた時、百一發の祝砲が直ちに男子たることを告げ、誰しもナポレオンの幸運を疑ふ者はなかつた。革命がナポレオンの一身に凝集し、政界は安定したもゝ、繼承者なくしては不安であるところに、正しく皇太子が誕生したので、誰しもその吉兆を疑ふ者はなかつた。

彼はその男子を羅馬王と名づけ、善美をつくしてその將來を祝福した。

しかし、その運命は眞に數奇であつた。稀代の英雄が絕海の孤島で空しくその生を終らうとし

た時、この祝福せられた太子は、宮廷の囚人となつて、正にその臨終に瀕してゐたのである。けれども、羅馬王が生れた當時、誰あつてこの奇しき將來を豫想し得た者があつたらうか。

生れるや否や、直ちに王であつたこの子は、前代未聞の多大の尊敬を拂はれた。ナポレオンは上院に向つて、

『わが子の偉大な運命は成就されるであらう』

と告げたくらゐである。將來のナポレオン二世たるべき子の枕許で、彼は實に如何なる夢を見てゐたらうかと想像されるくらゐであつた。

しかし、芽出たい誕生日にも、巴里は靜寂で、熱のない光景であつた。それどころか反感の空氣すら漂つてゐた。人々は戰爭の豫感を有つた。商況は不振、公債は下落した。

ナポレオン內心の苦悶は益々强くなつた。祖國を距る七百里の遠い地で、戰爭をすることの危險を彼は想像した。その上、西班牙には英軍が上陸してゐる。人民が叛亂を起してゐる。ドイツと雖も、好機到來すれば彼を打倒する準備を修めてゐる。フランスには疲勞の極服從してゐるらしい樣子が見え、休息を與へる必要がある。忠誠心にも弛みが現れ、士卒も戰爭に倦いてゐる傾

向があつた。彼の內心を洞察し、彼を注意して觀察してゐた者には、上述のやうな思想に捉はれてゐることは感知された。

毎夜不眠症に惱まされ、長時間長椅子に凭れたまゝ、深い瞑想に沈んでゐることがあつた。その深い瞑想は結局彼を疲勞させ、彼は睡眠に陷るのであるが、その時は惡夢に襲はれるのであつた。これは眞相を穿つたものであつて、皇帝はしば〳〵放心したやうに、變な態度で、夢みてゐるやうであつた。チエボーの物語るところによると、コンピエーニュの大夜會の晩に、ナポレオンはどこか他の場所にでもゐるかのやうに、突然敷物を見詰めたまゝ動かなくなつた。マツセナが側に近寄ると、まるで夢から覺めたかのやうに、怒りの聲を張上げ、『君は何に關係するのだ』と窘めたさうである。人々は彼が癲癇に罹つてゐるかのやうに言つた。

彼は不安、無決斷、苦悶の狀を見せてゐたのである。

彼は敵の片割を攻擊するよりも、寧ろ主要な敵其物を直接に抑へて見ようといふ心を起した。

一八一一年の夏、ブーローニュの陣營で、彼はその考へをもつた。

『ドクレス卿、ブレストなり、シエルブールに、英國を脅すことを目的とする遠征隊編成について、最も適當な報告を作製して貰ひたい』

との意を洩した。

この脅迫は平和促進の方法となるものかも知れなかつた。彼は海軍に再び關心を持つやうになり、和蘭を訪問し、フレツシングに滯在し、二日間シヤルルマーニュ號の艦上に過した。

しかしながら、眞劍の遠征は、二年を經たぬ中には、準備が出來ないのであつた。彼の要するのは、もつと近い成績であつた。彼はアイルランド上陸を夢みたり、或は更に控目なジエルシー上陸を想像したりした。

やがて、それについて語らなくなつた。彼はかういふ舊い計畫の空虛なことを知つたのであつた。一時、それを再び活氣づけたといふものゝ、それは彼の精神に、何か一つ解決方法を發見しなければならぬことがあつたからである。

ナポレオンは、今までにわが能ふ範圍內の考案をしつくしてゐたので、それを發見できないのであつた。海上からする方法がないのでは、再びチルシツト條約に復歸して、歐洲大陸を統一し、大陸の敵、共同の敵、英國に對抗しなければならぬ。若し露國がこの聯盟外に出れば、英國の同

盟者となり、自己のために他の歐洲諸國を荒すことになるであらう。既に獨逸を占領してゐるダヴーに對して急攻擊を想ひつき、ザーは普魯西を味方に引入れようと謀つた。普魯西政府は時機尚早と想つたから、その誘惑に乘らなかつた。

シュタインの革新運動はまだ熟してゐない。フリドリツヒ・ウイルヘルムも、イエナの教訓を忘れてゐなかつたので、敢て危險に突進することを避けたのであつた。けれども、普魯西と露國との間に、積極的の同盟が結ばれるといふことは、寧ろ時日の問題に過ぎないものであつた。

だから、その同盟の出來上るよりも先手を打ち、自ら攻擊に轉じてアウステルリッツやイエナの二度と來ない中に、フリードランドとチルシットの條約を再締結することにしようとする念が優勢になつた。

露西亞との同盟を結ぶため、ナポレオンはフランスの舊友であつた瑞典、土耳古、ポーランドを犧牲にした。露帝アレクサンドルはそれによつて、芬蘭及び其他の諸州を獲、波蘭の獨立が復活されることのない約束を獲たのであつた。さうして、獲物を十分に握つたアレクサンドルは反對に脅迫を始めたのであつた。

ナポレオンは、それで一八一一年の夏中を交渉に費した。さうして露都に於て、露西亞の準備行動のみが、フランスをして戰爭準備をさせるのだと再三言はしめた。若しその武裝が露帝の釋明する通りに、誤解の結果であつたら、平和は繼續する筈であつた。ところで、露西亞は祕密に武備を修め、フランスは公然それを行つた。露西亞の港には、米國旗を揭げた百五十艘の船が入つて來たが、何れも英船であつた。皇帝は、

『予は平和を希望するが、それが速かに終りとなるべき時だといふことを理解させてやれ』

とローリストン大使に訓令するに至つた。

武裝しての鬪爭が最後の方法である。皇帝は近接する者に隱くすところなく、形勢逆轉したことを公言し、戰爭をこの爲めにしないで濟ませるやうにして呉れた者は、大なる奉仕をする者だと言つた。

この間に、アレクサンドル帝は、五月以來普魯西王に親書を送り、『佛兵を困憊させることによつて、ウエリントンを勝利者たらしめた方法をこそ、予は採用しようとしてゐる』と告げてゐた。彼のプランは出來てゐたのである。彼はボナパルトに何等の批難を加へようとはしない。彼

はたゞ攻擊をさせて置いて、露西亞を西班牙同然のものにする筈であつた。コーランクールは前もつてそれを皇帝に注意したのであつた。

露西亞はナポレオンに攻擊侵入して來ることを許し、できるだけ深入りさせ、戰を避け、氣候によつて大軍を敗退させようと決心したのである。コーランクールは露西亞通であつたが、多くの大使に見受けられる通り、派遣されてゐる國の立場をあまりに辯護しすぎ、露帝の主義に共鳴しすぎてゐる印象を與へた。

ナポレオンは焦躁に陷つた。無論露西亞の將軍達に戰爭を强制することはできるが、嚴寒を何うしたらよいかの問題があつた。

しかしながら、彼はできるだけ都合をよくし、あらゆる見透しを行つた上で敢て危險を冒さうと欲した。露西亞で冬に會ふことの豫想以外には、彼の計畫に何一つ缺けたものはなかつた。兵士の爲めに毛皮を準備することと、馬に氷上を滑らぬ蹄鐵をつけること以外は、一切豫想をした。

政治上の元首としての政治的の先見もあつた。遠征に出掛けるのであるから、帝國內の靜穩が

何より大切である。食糧の給與、食物の價格等の監督、不平の徒を增さぬこと、隨意の逮捕を愼むことなどを各大臣に忠告した。

たゞ一つ氣にかゝることは、宗教問題であつた。ピオ七世と斷絕したために、法王が皇帝の任命する僧侶を承認せず、教區に司教がなかつたり、信者の不平があつた。殊にそれが白耳義に於て甚しかつた。一八一一年七月の宗教會議は、ナポレオンの考では、舊教の輿論と妥協の意味があつた。その見込は外れ、司教達が却て彼に反抗の狀を呈した。彼は法王をフランスに置く決心をし、英國船が港の前を通過し、萬一にも法王を救ひ出したりすることがあつてはならぬと心配した。法王ピオ七世をサヴオーナに居らせず、一種の人質としてフオンテンブローに來住させた。それは露西亞遠征に出るや否やの時であつた。彼は大冒險に飛びこみ、自ら確信はなかつたのである。決して彼は輕率に飛び込んだのではなかつた。彼は圖書掛に、カール十二世の波蘭及び露西亞戰史の最も詳細をつくした佛語のものを求めて讀破したのであつた。

十二月十九日に發した勅令によつて、次年の壯丁徵募のことが命令された。このあまりに明白な狼火によつて、種々の豫感が續出し、一八一二年の新年は、實に憂鬱極まるものであつた。マ

リー・ルイズも父に手紙を送つて、『惱みの種があります』と言つたくらゐで、巴里は不安に充たされた。

各地より來る莫大な準備は、その戰爭が未曾有の大規模のものであることを告げてゐる。人々はイエナの大勝以來、既に奇蹟にすら倦怠してをり、況んや、大事業には尙更倦怠の色があつた。そこで皇帝は氣分を明るくし、享樂を慫慂した。さうして、隨所に宴會や舞踏會を催させた。それでゐて、彼自身は無理な勞役に服し、內心には祕密を有つてゐるので、我知らず瞑想にふけることもあり、心配を氣取られまいとして小歌を唄つて平氣な顏を裝うてゐた。

歐羅巴各地より、ヴイステユール河に集合を命ぜられて發足した大軍の組織は、ナポレオンの新しい考案であり、歐洲其物を動員したやうなもので、種々雜多の兵の集りであつた。外國の兵が佛國兵を尨大にするばかりでなく、六十萬からの大軍には、昔の民族の移住のやうに、夥しい輜重の隨行があつた。北歐、南歐、拉丁、白耳義、スラヴの人種を數々含んでゐる大軍が、露亞西をして同盟の義務を守らしめる爲めに動き出したのである。

同時に、種々心を配ばらねばならぬことがある。今迄にも、普魯西は長くナポレオンの頭痛の

種であつた。普魯西は何時でも露西亞の側に走らうとしてゐる。それでナポレオンは普王を脅して、愛國的で且反フランス的の目ぼしい大臣達を罷免させ、攻守同盟を結ばせ、露國との開戰の際は、二萬の兵を佛軍に參加させることにした。墺太利は三萬人を提供し、その代りに若干の地を代償として受ける筈であつた。

その他にもヨルク將軍の普魯西兵と、シユワルツエンベルグ將軍の墺兵とは、獨逸の忠誠と平穩とを保證する筈であつた。

ナポレオンはそれで萬遺漏なきことと信じたのである。しかしながら、フリドリツヒ・ウイルヘルムは、密かに露帝に書を送つて辯解をし、不可抗の力と運命とに讓步せずにゐられなかつたことを言つた。さうして、

『若し戰爭が始つても、互に危害のないやうにすることが緊要なことである。常にわれらは結合し、他日再び同盟の間柄に歸らねばならぬことを記憶したい』

と附言した。

メツテルニヒも亦露帝に對して、フランスと締結した條約のことを言ひ、露墺兩國の政治的見

地より、密かに諒解を繼續する旨を通じてゐた。

一八一三年になつて、露墺の聯合が出來るのは、困難のないことであつた。それは既に暗々裡に出來てゐたのである。英露墺並びに普魯西も、大革命の行つた征服を本質的のものと一度も認めてゐるのでなく、一度も全般的平和會議も議會も承認したものではなかつた。

條約も、同盟も、また軍事的協力も、ナポレオンの獲たものは、臨機の所置に過ぎないものとしてゐた。ナポレオンに讓歩したといふのは、結局彼を怖しいと思つたからであつた。ナポレオンの逆運が現れた時は、どうするかといふことも勿論考へられてゐたのである。

けれども、ナポレオンは『旨い合戰』によつて、すべてが整理され、露帝を後悔させ、將來の和解を望みのないものにせぬ積りであつた。それどころか、彼は大軍が接近すれば、十分事が足るものとさへ信じてゐた。さうなれば、烈しい戰爭はなくて濟み、償ひ難い程の戰爭もなく、交渉や、接近の餘地のなくなるやうな事もなく、露西亞の農奴解放もなく、波蘭復活のこともなくて濟む譯である。

皇帝ナポレオンは波蘭人を必要とするので、彼等を鼓舞することは必要だが、度を過しては不

可である。要するに、一八一二年の三月には、ナポレオンはまだ自己がオーデル河か、ヴイステユール河まで出て來れば、露帝が交渉を開始するものと信じてゐた。

彼は露西亞に赴いて政治的乃至外來的の戰爭をするつもりであつたのであるが、意外にも、そこに露西亞の全國民的戰爭を見出すことになつたのである。若し普魯西も墺太利も共に當てにならぬと知つてゐたら、露帝はカムチヤツカまで退却すると言つて脅してはゐながら、固い決心が鈍り、敵に侵入を許し、國内を荒掠させ、果てはナポレオンの希望した通りの會戰をすることになつたかも知れぬ。

その間に、大軍は獨逸の地を怒濤の如く北上しつゝあつた。それでゐて露佛ともに依然として同盟の間柄であり、平和な間柄であるやうな顔であつた。

さうして、竟に最後通牒を突きつけて、ナポレオンにエルベ河を越さぬやうに警告し、衝突の先手を打つたのは露帝であつた。

時はまだ四月であつて、ナポレオンは敵對行動の開始を六月と見込んでゐたのである。

ナポレオンはその豫想が違つたので、一時尙決意することを避け、露帝の攻擊に出ないのを見

て、交渉準備の方法と觀測し、安心してゐた。

彼は大軍の進行を緩めることをせず、依然として同盟の間柄であることを指摘し、戰爭回避の意向であることを斷言しつゝあつた。四月二十五日附の書簡中にも、『宿命によつて戰爭不可避となつたにしても、陛下に對する感情に何等變化なく、氣持に一切變化はない筈である』といふ意味を記してゐた。

双方とも、不可避と悟りつゝ、兩帝はまだ宿命だなどと言つて計略を廻しつゝあつた。しかるに、偶然の一事變によつて斷絶が早まることになつた。

當時巴里駐在の露國大使は困難な立場にあつた。大使館附武官のチエルニチエフが軍事探偵の廉で訴へられて以來、殊にさうであつた。大使は最後通牒に對して回答を得ず、露都からも訓令を受けないので、處置に迷つて旅券の請求を發した。佛國當局は一箇月を還延して漸くそれを交附したのであつた。しかし、大使の態度によつて露帝の待機姿勢も、ナポレオンのそれも共に終りを告げることになつた。

時に五月七日であつた。九日に皇帝はサン・クルーを出發した。不安と豫感の面白くないもの

がないではなかつた。出發後の狀勢について、一瞥を投じないでもなかつた。

四月十七日に、彼は第四回の平和提議を英國政府に提出した。英佛兩軍とも、葡萄牙、西班牙、シシリーから撤兵し、西班牙の保全と國民憲法を認め、ブラガンス家をリスボンに復歸させようといふのであつた。しかし、キヤツスルレーはこの提議をも前のもの同樣受けつけなかつた。ナポレオンはこの時、もはや西班牙及び葡萄牙の方面には斷念してゐた。マルモン將軍が增援及び軍資金を請求し來つても、皮肉な返答をして應じなかつた。

彼は自己の將に赴かむと決意してゐる地方の不安を案じつゝあつたので、我知らず『これが何う結着を見るものか知ら?』と叫んでゐたのである。

出發の前日、彼は警視總監に對して最後の注意を與へた。警視總監パスキエーは憂慮するところを隱くさず、食物の騰貴、其他の事情から、多少の叛亂が起るかも知れぬことを說明した。ナポレオンは深き沈默に入つて、瞑想しながら室內を歩き廻つてゐたが、突然聲高に、

『これはまた困難の上に、新たに逢着せねばならぬ困難だ。しかし、着手したことは完成しなければならぬのだ。左樣なら!』

といふ返辭であつた。

パスキエーの記してゐるところによると、『彼はその飛び込まうとしてゐた危險を意識してゐた』のであり、『結着は何うなるか』といふことは幾度か考へたことであつた。

彼は今や未曾有の大軍を動かし、夥しい援軍を算へてゐた。彼の戰略は熟し、これは彼の考へた最も立派なものであつたらう。彼は力めて侵略者の名を取らぬやうにした。彼はアレクサンドルとの交渉の餘地をも存じて置いた。露西亞との同盟は戰爭をもつてして改訂繼續しなければならぬものであつた。

無爲の裡にあつてもすべてを失ふことを彼は知つてゐたので、その點に於て、何等遺憾に想ふことはなかつたことであらう。

(21) 苦杯

モスコーに進擊して、不結果に終つたことに人々は種々批判を下し、無法な冒險であつたとかモスコー迄入つては慘敗は當然であつたとか批評するけれども、事後の批評は容易なもので、價値はないと言つてよからう。

モスコーまでは第一道程であつて、印度遠征を企てたのであるといふ論斷も後人の說である。果してさうであつたか、全然疑はしいものである。可能とあれば、印度まで赴くことは辭せぬ彼ではあつたが、ロシヤ進軍の際の彼は用意周到の準備をして、愼重に過ぎたと評せられたくらゐである。

若し彼が遠征を延引して忍耐すれば、英國は近く屈服するところであつた。米國が、既に英國の海上の横暴に憤慨して起つたところであつたといふ說もあつた。けれども、當時の米國は勢力として計算される程のものではなかつた。

それよりも、彼自身が自己の想像によつて苦惱したことが、この不結果を來す原因であつたとする批評は、彼の急所に最も觸れたものであらう。

彼はあまりにロシヤの戰備を憂へてゐた。そのために竟に出征を決意したのである。さうして出征を實行するに決定しても、越ゆべからざる限界を意識してゐた。寧ろ出征を見合せるやう勸說したカンバセレスに向つて、戰爭の限度を說明し、深入りしないことを誓つてゐた。露軍の擊破が遲れて冬になるやうであつたら、ヴイルナに本營を置き、嚴冬の間、巴里に歸還するかも知れぬ豫定であつた。

五月末のドレスデン會議には、ナポレオンの行を旺んにする意味もあつて、諸王悉く會した。その席上に彼の言明したことも極めて質實の所信であつた。たゞ彼の誤算は、露帝が結局和を請ふものと獨斷してゐたことである。

その斷定は自己の要求から出たものであつた。いはゆる注文通りの推測をして誤りなしとしたことである。これは彼の頭腦の硬化した證據であつたと見てよいかどうか。要するに、そこに償ひがたき心理的錯誤があつた。あまりに繰返された成功に誤られたのであらう。

西班牙事件は失敗であつたがその失敗も彼自身が衝に當れば、起らなかつたものと信じてゐたやうである。尠くとも自己の直接當る遠征に失敗はないと、强過ぎた自信があつたやうである。

六月の半ばを過ぎて、彼はニエメン河に達した。嘗て筏を浮べて露帝と交驩した河上には露帝の姿を見ることはできなかつた。それよりも、この河を渡らうとして淺瀨を物色してゐた彼の馬の下を、一疋の兎が通り拔けた。馬は驚いて跳ね、馬上の英雄は鐙を踏み外して落馬した。從行の人々は、不吉なことを見るものかと戰慄した。彼自身もこれに氣を腐らしたやうであつた。

彼はこの不吉を軍中に知らせたくない氣持で、元氣よく談笑を始め、二箇月未滿に露帝をして和を請はせると豪語した。翌日、彼はニエメン河の彼岸に渡つた。そこにはアレクサンドルが兩腕を擴げて待つてゐる代りに、コサツク騎兵が數騎飛んで遁げ去るのが見えたばかりであつた。

それは六月二十四日であつた。二十八日にはヴイルナに入つた。こゝでも露帝の媾和を期待した。壓制せられてゐるリトアニア人をポーランド人同樣に解放し、兩者を聯合させて反抗させたら、露帝も屈服しない筈はないと、彼は信じた。『陛下に戰爭終結の希望あらば、當方にはその用意あり』と通じた程であつた。

彼の計畫では、ヴイルナを政治的軍事的大本營とし、こゝで威嚇して成功しなければ、攻擊開始の豫定であつた。露帝がポーランドの再興を怖れてゐたことは、その書信にも、始終彼が心配してゐたのでも十分證據立てられてゐた。

そこを狙ふのはナポレオンの忘れることではなかつた。ポーランドを籠絡してロシヤに不安を感ぜしめる必要があつた。墺太利に心配をさせず、露帝をこぢらせないで、ポーランドに叛亂を起させることは、チルシット條約の頃でも困難なことであつた。今度もポーランドを利用してゐるが、ポーランドのためにあまり盡力してはゐない。七月十四日、ヴイルナにポーランドの感謝使節が來た時、彼は使命實現の要望に對して煮え切らぬ返事をした。

露帝は軍事的にも政治的にも何等反響のある樣子を見せなかつた。ヴイルナには一箇年もゐる豫定であり、都合では二年も滯在の豫定であつた。彼はこゝでロシヤ軍の主力を擊破し、平和條約の段取に進むつもりでゐた。

露帝は接觸を回避した。ナポレオンの作戰は、强行進軍によつて敵の退路を扼する方針であつたが、茫漠たる地勢に森林沼澤のあるため、時の正確を保ちにくかつた。彼は諸將を叱咤督勵し

たが、行軍の時間通りに行はれないこと夥しかつた。天然の障害、給與の缺乏、將校の疲勞、騎兵の襲擊不能等があつて、『命令の遵奉されない』ことを嘆じた。

バクラシオン、バルクレーの敵の將軍は遠く遁げて、ドニエペルの彼岸で連絡をしようとしてゐた。個々の遭遇戰に勝つても、壓倒的の打擊を敵の主力に與へることができなかつた。

ヴイルナに滯在したのは長過ぎた。既に無謀の戰爭に入つた以上、猪突に猪突を重ぬべきところを愼重に過ぎたと、チエールが評してゐる。事實、偉大軍隊の素質低下と各國軍の寄り集りであつたといふ理由も加はつて、理想的行動が採れなかつたといふこともあつた。

彼はルチエガ河畔でフリードランドと同樣の勝利を夢み、ミュラーに向つて、

『明朝五時にはアウステルリッツの太陽が上るぞ』

と言つた。

だが太陽も敵もそこになかつた。露軍は尙も退却戰を續け、その後を追うてヴイテブスクにナポレオンは入つた。さうして、こゝでも同じ當惑が繰返された。彼はこゝに越年の準備を命じ、冬夜の餘興に巴里から俳優を招くことにし、一八一二年の戰爭は終結と宣言した。

しかし、露帝は一向に脅威を感ぜず、和を請ひに來さうでもなかつた。英國との同盟の他に、ナポレオンを裏切つた瑞典のベルナドットと同盟を結んだ。ロシヤとトルコとの間にも、將に平和條約が調印されやうとしてゐた。こんな次第で、ヴイテブスク占領は、ヴイルナのそれ以上に有效でなかつた。皇帝は『瑞典のカール十二世の愚はせぬ』と繰返し言つた。

時間の空費と、停止してゐる間にも事件の進行することを考へ、ヴイルナからヴイテブスクに移つた。ヴイテブスクから更に別個の作戰を案出してスモレンスクに移動することになつた。彼は怖しく不安焦躁の表情と擧動とを示した。それは豫算に誤りがあつて、當初のプランを守つてゐられない證據であつた。

露軍はたゞ計畫的に退却するのであつた。いよ〳〵露の本國に入る前に、軍を停止したのは、深入りの危險を避けたものであつた。ナポレオンの冬季越年の計畫は正しいやうであつたが、實際には不可能であつた。あまりに廣い場所を要する野營は、給與不十分となる虞れがある。寒氣が迫れば、兵營は襲擊を受ける危險が多くなる。河水の氷結は敵に通路を與へることになるからである。と言つて、六月に入つて戰ひ、八月に休息するといふのでは、一年の過半を無活動に過

すことになり、士氣に影響すること夥しい。

やがて、それは失敗の告白となり、重大なことになるのは明白である。背後にはドイツがあり、スペインがあり、フランス國内と雖も油斷はできない。遠征の軍隊は病氣のため、脫走兵のあるために數の減少はあるに相違ないが、殘つてゐる者は抵抗力があり、勇氣があり、信賴のできる兵である。無爲に營舍に休養してゐるよりも、危險を冒すことを好む兵である。當初の計畫を棄てないことが必ずしも賢明ではない。

彼は例によつて會議を開いた。ベルチェーは愼重を主張して非難された。元來活動的の彼はリトアニアに冬籠りすることは甚だ苦痛である。ヴイテブスクに、次の夏まで待つ筈であつたが、僅に十五日間の滯在であつた。

八年も前から、革命は英國を屈服さすためには、ロシヤの奥迄も往く必要があると喝破したが今、彼は不可能を追究したロシヤに來た。ヴイルナに於ては、たゞ偶然の衝突のみで、バルクレーとバグラシオンを逃亡させた。最初、露軍に接觸した時の優勢が、却て露軍に戰鬪回避をさせることになり、內地に突入させる一因となつた。

ナポレオンが才智を傾倒すればするにつれて、露軍を益々退却させることになつた。打算と必要とから、彼等は退却し、またさうするより他に方法がなかつた。

八月十八日にナポレオンはスモレンスクに入城した。こゝは豫定の前進極限の地であつた。着して見れば、荒凉無人の都市であつた。スモレンスクで越年などとは、町が荒され、物質缺乏のため、全く空想であつた。平和を何處で强制するかは問題でなかつた。

豫定の退却を續行してゐる露軍は、既にモスコーへの途上にあり、彼等がキエフに赴くならば、ナポレオンもその跡を追ふべきであつた。その退却する露軍には追及し得られさうであつた。迅速な進軍によつて、敵の主力と一度接近すれば全滅を期待することができた。勝利の幽靈を追うて、ナポレオンは何處までも引摺られ、自ら行進をやめる所まで導いて往かれるのであつた。

事情が彼を支配し、彼は事變の主人とはならず、解決を得る要求が彼を左右してゐたのである。彼は今ペテルブルグへ向ふのと同じ理由で、モスコーへと赴く理由を見出してゐたのである。

さうして、何故彼は成功しなかつたか。輕快豐富な頭腦をもつて、彼の案出した戰略は、最も

立派なものゝ中に算へらるべきものであつた。敵を包圍し、迂回し、挾擊し、退路を切斷すること、すべて傑れた藝術的のものでありながら、しかも、不十分のものであつた。スモレンスク前ヴアルチナに於て、露軍と接觸した。その露軍は逃亡した。

ナポレオンが大戰鬪と信じた際に、その影は見えなくなつてゐた。戰鬪のある時、却て彼はそれを信じなかつた。ヴアルチナには、彼はゐなかつた。帝國内の諸事件の決裁發送に引留められてゐたのであつた。その大仕掛の戰鬪であつたことを聞いた時、彼は自ら指揮しなかつたことを非常に立腹した。彼はその血戰を巧みに利用しなかつたと言つて、諸將を叱責した。そして例によつて『悉くは余に能きないのだ』の嘆聲であつた。

一切に鞅掌すること、巴里、羅馬、アムステルダム、マドリツドに於て起る事件に悉く一人で當ることはできない。しかも、それだからと言つて、戰陣を棄てることもできなかつた。ジユノーに對して非常な憤慨であつたが、それも和らぎ、他と同樣に何等の制裁はなかつた。すべてが言葉になつて蒸發するのみであつた。

同時に、彼は言葉によつて彼及び彼以外の者を安心させてゐた。スモレンスクに於て、

『一箇月を經ぬ中にモスコーに着き、六週間に我等は平和を得るであらう』

と彼は斷言した。

これは彼の論理的固定觀念であつた。彼は想像によつて自己を露帝の地位に置き、その自己の露帝に向つて、戰爭が怨恨によるものでなく、單に政治的意義のものであることを言ひ、對英抗爭の宣言を要求するのみであることを聲明した。要するにチルシット條約の更新に憧憬してゐたのである。過去の幻影がいかに彼を魅了してゐたことであらう。

モスコーへの二十日間の進軍を通じて、常に焦躁の狀にあつたのは、露帝が終始一貫自己の計畫を押通してゐるのとは反對に、彼は屢々計畫を變更してゐることを、認識しなかつたからである。

心にもなくロシヤ國内に深入りすることは、辛いことであつた。軍事的にも、政治的にも、期待する結果を見得るか否か明かでなかつた。彼は家を燒棄てる露軍を嘲つた。しかしながら、跡に殘つてゐる荒野を眺めて、彼は一種の豫感に打たれた。彼は露帝の和戰何れの決心であるかに惑うた。クツソフが露都を防禦するかのやうに抵抗態度に出た時、彼は却て愕然たる狀であつた。

クツソフとの會戰は一種趣の異つた戰爭であつた。彼は病人の如く、失神狀態のやうであつて、危く敗北するところであつた。西班牙から續々不吉な報知があつて、マルモン將軍の敗北、ジョゼフのマドリツド再度の放棄が報ぜられた時であつたから、茫然自失の狀であつたのだと評された。彼は戰機の絕頂に際して、親衛兵の使用を拒絕し、ミユラーを憤慨させた。ネー元帥も立腹した。

ナポレオンはフランスを距る八百里の異域で、最後の信賴する軍隊を失ひたくなかつたのである。それは彼の奥底に不安の影が潛んでゐたからである。

その戰鬪は慘憺たるものであつて、アイローの戰以上のものであつた。死傷した將軍の數が四十名にも達した。勿論露軍の損害も多大であつた。ナポレオンは敵の屈辱を大ならしめないやうに、數字を少くしたといふが、クツソフは退却しつゝ、逆襲の準備をしたといふのであるから全滅したのではなかつた。

それはロシヤとの同盟を更新するに足る勝利でなかつた。當初六十萬人を率ゐてヴイスチユール河まで行けば露帝の恐怖すること確實と信じた。次にニエメンの渡河、リトアニアの占領、最

後にスモレンスク入城によつて、敵は武器を投棄する豫測であつた。今、彼はモスコーに露帝の使者が來るものと信じた。否、それが來ないとは全然信じたくなかつたのである。

彼は今、努力の終極に達したのである。こゝで使者を迎へることができなければ、十年の苦心水泡である。政治的にも軍事的にも、彼は虚無に面接し、空虚の奈落に顚落するより他に途がなかつた。

モスコーは彼の最後の宿營であつた。彼はクレムリン宮に於て、異つた光景の下に、チルシットの再現を見るものと想像して、その幻影の奴隷となつた。

彼は瑞典王カール十二世の轍を踏まず、あの輕卒な英雄とは異つた、別個の先見の明を有つ天才だと考へて、元氣であつた。彼はその進軍中、すべてを熟慮し、正確仔細に心を用ひて、すべてを組織した。

彼の背後には隨所に輜重があり、糧食的給與があり、倉庫もあり、援兵もあつた。巴里まで一貫した交通があり、帝國がモスコー迄も押進められ、皇帝はクレムリンにあつてもエリゼ宮にある如くであつた。冬營をしなければならぬとあれば、露國の大都市に氣持よく居り、ヴイルナ、

ヴイテブスクよりもよく露帝の意を測ることができるのであつた。

金色圓塔の三百の寺院をもつた都市の降伏が、カムチヤツカまでも退却するといふ決心——ナポレオンは全然それを眞に受けなかつた——を何うして搖がせずに置くものであらうかと、彼は考へた。

モスコーが、皇帝にもその軍隊にも、恐らく最大誤信の都であると見えたその日は、九月十四日であつた。多大の異常事を成就した兵士等は、他よりも以上の事柄を完成した氣持で居り、そのため努力を完了したと思つてゐた。兵士等は犧牲の報酬を期待し、大將は頭を惱まして考へた問題の解決を待つて、その時が來たと思つてゐた。彼は東歐の特色を保つた貴族が型の如く、パンと鹽との供物を捧げ、城門の鍵を献上し、ロシヤだけはお赦し下さいと嘆願する光景を想像した。

時は次第に過去つても、鍵を捧げる貴族の姿は現はれず、日は暮れた。スモレンスクの如く、この町も撤退されて無人の境であつた。出頭を命ぜられた代表者はあはれな五六人であつた。彼は首府を奪はれたことの結果を知らぬかと叫んだ。その晩、モスコーに露軍は火を放つた。

さすがに、彼自身も火焔のモスコーを眺めて、征服の煙に化したことに、驚愕の聲を禁ずることができなかつた。彼は入つたばかりのクレムリン宮から、火焔を浴びて遁出さねばならぬのであつた。

再び立歸つた時は自信を回復し、この野蠻な放火を消すために、生命を顧みないフランス軍の人道行爲に、感謝の念を持ち、解決が速かに生れるのではないかとさへ考へた。

彼は露帝に慇懃な手紙を送つて、

『予は陛下に對し、惡意のない戰爭をした。陛下の一片の手紙によつて、予の進軍は停止され、モスコー入城の利益を犧牲とするに吝かでない』

と記し、最後に、

『陛下が、今もなほ舊情を保存せられるならば、この手紙を善意に解せられるであらう』

と結んだ、しかし、彼の平和の希望は無殘にも裏切られたのである。

彼はチルシットの幻影を追うてモスコーに來たのである。彼はそれを捉へないでは出發したくなかつた。それで返事なしにはゐられないやうに、あらゆる理由を列べ立てた。

十日は近づいた。アレクサンドルからは何の回答もない。たゞ相變らずクツソフがモスコー郊外に出沒してゐた。前衞の司令に當つてゐたミユラーはコサツク兵と交渉をした。彼等の間に常に人氣のあるミユラーは、スペイン王、ポーランド王になりたかつたやうに、モスコーの王になりたい野心もあつた。ロシヤの將校は彼に打明けて、不景氣の夥しいこと、貴族、商人、人民、誰も戰爭に飽いてゐること、自分達も疲勞して平和を望んでゐると言つた。スペイン事件の時のやうに、ミユラーは自己の錯覺をもつて、皇帝の錯覺を維持してゐた。

ナポレオンは悲觀論者のいふほど氣候も酷しくないと言ひ、

『美しい秋ではないか。フオンテンブローよりも暖かいくらゐだ』

と語り、悠然として徒らに時の經過する儘に任して、左右の人を驚かしてゐた。彼は自分の平和要求の念の强いことが、結局露帝の降伏を强制し、それはたゞ時日の問題に過ぎないと斷言するに憚らなかつた。

この强すぎる確信の裡にも、潛んでゐる警戒の念はあつた。十月四日にローリストンに命じてクツソフの本營に赴かせ、新たに手紙を露帝に屆ける勞を取らせた。同時にナポレオンは覺書を

書き始めた。それには種々の場合を想定し、スモレンスクへの引揚や、ベテルブルグへの威嚇運動などが記された。彼は前とは異つて、モスコーを好地點でないと判斷し、フランスと軍との間に、今日の同盟軍ではあるが、敵になりかねまじき墺軍、プロシヤ軍のあることを思ひ出した。

事實、墺太利の變節を信じさせるやうな、謎の手紙がシュワルツエンベルグから屆いた。それを讀んだ後に、彼は運命の最後の法則を語る悲劇のある詩を口にした。

モスコーに冬營することにするか。その町は燒かれて、住民は逃亡してゐる。物資はなく、殊に間もなく道の切斷される虞れがある。コサック兵が近郊までも出沒してゐる。通信を齎らし、連絡を保證してゐる飛脚の或者は追跡された。

それは前兆である。まだ今ならば、嚴冬以前に軍隊をヴィルナへ引揚げる好時機である。ナポレオンは依然として露帝が談判開始に決心するだらうとして、時日を徒らに遷延した。これほど遠くまで求めに來たものを握らないで、どうして出發することが出來やうか。歸還するとしても何と辯明したものか。『彼の困難な境地に立つた當惑の念が、彼をクレムリンに鎖で繫いでゐたやうなものだ』とコーランクーレの評の通りであつた。

それでも、危險が迫つたので、出發の決心をしなければならなかつた。露軍はスモレンスクへの退路遮斷を始めた。フランスとの連絡が規則的でなくなつた。ナポレオンは、もはや帝國の通信を受けず、日々大臣等と通信をすることができなくなつた。郵便がなくなることがあつて、軍隊は故國からの信書を受けず、孤獨を感じ、精神的に惡化した。

既に彼自身もモスコーに滯留することのできないことを認めた。退却令を出したら、平和提議の最後の機會を此方から放棄することになるので、彼はまだそれを口にしたくなかつた。時は徒らに過ぎ、寒氣に抵抗する準備を十分にせず、突然出發を開始するのでは、偉大な軍隊の不幸を誘ふことになる。

ナポレオンはモスコーに惰眠を貪つてゐた。彼を自滅への希望に繫いで置くために、さうして彼に安全を假想させるやうに、狡猾なクツソフは戰鬪中止を裝ふことまでした。

クレムリン滯在のこの最後の幾日かは、賭博者が損をすまいとして、尙投機を行ひ、最後の工面をすると同じ期間であつた。十月十六日に、彼は直接クツソフに呼びかけ、遺憾ながら平和の提議をした。

回答は拒絶であつた。その時、ナポレオンは使用したくなかつた宣傳政策を想ひ出し、農奴解放令を作らせた。次に想ひ直してその宣傳を引込めた。電光を見せるだけで、雷鳴のないやうなものであつた。帝室の創始者であり、諸王の親族である彼が、今更革命の皇帝に立戻り、却て益々必要な同盟を危くし、政策を悉く破綻させる譯には往かぬ。それに寸毫の利益もないことである。

時機既に遲しであつた。西班牙で封建制の廢止と、宗教裁判の廢止を公布した時と同樣に、狂熱の農奴はもはや彼の言を聽く者ではなかつた。そこで彼はまた舊の保守正當の主權者の態度——もう長い間のことではない——に立ち歸つた。

彼の精神の焦躁は他の證據にも現れてゐた。出發について說明をしなければならぬ。そこで、モスコーはもはや非衞生な不潔な場所といふだけでないことにし、政治的意義もなく、軍事的にも價値のない地といふことにした。これはあまりにも眞實のことであつた。さうして、ペテルブルグ威嚇のためと稱して、ヴイルナへ引揚げることにした。

まだナポレオンの心底には退却の決心がなかつた。まだ一運動を開始したら、建直しができ、

クツソフに、攻擊のできないやうな重要な懲罰を加へることのできるものとしてゐた。かやうに、ナポレオンは放棄するのではないと云ふ口實をつくり、モルチエーをクレムリンに殘留させその間に一戰を試みる腹案であつた。勿論、軍事的成功の機會が一度あれば、形勢一變しないとも限らぬ。けれども、クツソフは捕捉できなかつた。

この時、『これは重大だ』と叫んで、モルチエーを呼び還すことに決心し、眞の歸國を決心した。ナポレオンは遷延して冬を迎へることになり、退却を危くした。彼は冬の接近と同時に、運命の惡魔が接近しつゝあつたことを豫感したかどうか。彼はさう信ずることを拒んだやうである。露帝をして平和交涉に決心させねばならぬからであつた。

けれども、彼はもはや平和について語らなかつた。軍隊の潰走、散亂の方が目前に迫つてゐる現實であつた。中間季節なしに、夏の來るのと同じやうに、この地では突然冬が迫るのである。

『凍ることは我等にも露人にも同樣だ』

と彼はまだ負けぬ氣で呟いた。

コーランクールが彼に向つて、ローリストンの傳達した休戰提議に對して、

『當方は戰爭の開始だ』

といふアレクサンドルの返答を告げると、皇帝は肩を聳かして、

『豫言者アレクサンドルは又しても誤解してゐる』

と言つた。

同じコーランクールに對して、彼は心底の大不安を洩した。人の考へはどうか、フランスではどうかといふ心配であつた。十月の末から、彼は大なる秘密を打明け、できるだけ早く軍隊を離れ、巴里に歸りたい意向を洩した。

彼のロシヤ退却は、華かであつた彼の歷史に、別個の趣をもつた大畫圖を展開することになつた。この退却は、或はもつと甚しい不結果を見せるところであつたかも知れない。彼を守護して來た運命の星が、今度は異つた姿で彼に奉仕しつゝあつた。二度も彼はコサック騎兵の手に墮ちやうとして、幸に助かつた。クソツクは老巧な將軍であつた。猪突の勇を見せて退路を遮斷し、血戰を餘儀なくさせる危險なことをしなかつた。

ナポレオンは危くカール十二世の陷つた沼澤に追ひこまれて、ベレジナの露と消えるところであつたが、彼の偉大な名聲と、その鼓吹する恐怖の念によつて救はれたのであつた。彼の退却には、波瀾の多い彼の一生の生活のやうに、希望と誤算と脅威とが連續展開された。

當初の間、彼はまだ自己の幸運を信じてゐた。しかし、偉大軍隊の悲慘な潰走に目を塞ぐことのできなくなつてからは、嚴肅、沈默、觀念そのものゝやうな態度で、肉體的には他の者ほどの苦痛と苦悶はなかつたが、精神的には非常な苦痛を感じ、自己の不幸を痛感してゐた。

呼吸を切つて追擊し、降り出した雪に姿を失はないやうに、近く尾行して迫つて來る露軍を抑へながら、十七日間行軍を續けたのが、その大受難の端緒であつた。

その時巴里から急使が達して、マレー將軍が幽閉されてゐた病院から脫出し、軍服をつけ、他の二人の將軍と共謀し、皇帝に死刑を宣告し、共和政治を布告しようとしたことを報道した。一時この將軍はサヴアリー、パスキエーの二人を逮捕したが、數日で假面が剝がれ、首謀者十二名が死刑にされて落着した事件であつた。

彼は馬鹿げた騷ぎだと冷笑したが、內心には非常に憂慮の狀であつた。彼は大陰謀の革命騷動を頭に描いたのである。殊に彼の氣にしたのは、嚴然たる組織立つた國家組織を築き、皇帝死亡

の虚報に迷はされても、直ちに繼承者に想倒し、周章狼狽する必要のないやうになつてゐるにも拘らず、誰も世襲の帝國を忘却したかの狀であつた點であつた。彼は自己の偉大な權威の依然として脆弱なことを悟つた。さうして、この點を强調させるのが、今彼に加へつゝある露軍の追擊であつた。

彼の望鄕の念が强くなると共に、退却の悲慘は益々加重した。スモレンスクに着いて見れば、食糧は掠奪されてをり、希望は絕望に急變した。戰友が食糧の名殘を爭つて見せる淺間しい光景に顏をそむけた。

さうして、再び混亂と無秩序との中に行軍を續けた。たゞ少數の者が、よく忍耐と英雄的犧牲精神を示した。ネーは護衛を指揮して、悲慘な輜重隊を救ふために、一日二回宛戰鬪を續けた。皇帝も今は徒步で、神聖部隊に護衛されながら退却した。捕はれさうになつた日には手づから書類や持物を燒棄てた。

『あまり大成功にのみ慣れたことが、往々かやうな大なる逆運を準備するのだ。しかし、仕返しは別問題だ』

と彼は言つた。

更に殘酷な報道があると、彼は手にしてゐる棒をもつて地を叩き、天を睨んで悲痛な叫びを發した。

ベレジナに辿りついて見ると、氷の塊を流してゐる河水、破壞された橋梁、前面に露軍が待伏せしてゐるのが見えた。彼はドニエペル河を下らうかと考へたが、暫くして自信を回復し、明敏な決斷をした。彼の渡河地點の選擇が、意外の場所であつたので無事であつた。ボルターヴアのそれに似た沼澤を涉らねばならぬことがあつたが、幸にそこの架橋が完全であつて悲運の最期を免れることができた。

『予は皇帝として成したことは十分だ。これから將軍として働かう』

と、この極度の危難の中で彼は言つた。

向岸に着き、大なる危難から免れた時、彼は再び皇帝の面目を恢復してゐた。彼は翌日のことを考へ、帝位について反省した。彼はポーランドに入つたのである。さうして、フランスとの連絡がついたので、行衞不明になり、戰死したかと思はれてゐた間の事情を知りたい念が强く擡頭

した。『十五日間一切の通信斷え、一人の飛脚にも會はず、眞暗闇の中にあつた』と通信したのはこの時であつた。

彼は歐洲の世評を聞きたかつた。同時に一刻も早く、皇帝は恙なく明日にも歐洲の天地に出現して、活躍するといふことを知らせる必要を感じた。

未曾有の軍隊を動かした者が、飢餓瀕死の身に、襤褸をまとつた混亂の若干部隊を引率してゐるだけと知つたら、英露の同盟は緊密となり、その努力は倍加せられ、オーストリーもプロシヤも油斷ならず、動搖は諸國に波及し、フランス國内でも精神的混亂が一層深刻にならう。彌縫糊塗しても效果はない。

だから、皇帝自身でその不幸を公表し、大敗の結果影響を最少限度にするために、その報道と同時に自身巴里に到着する必要があつた。否、その報道よりも先んじて巴里に歸着しなければならぬ。荏苒日を過してゐれば、プロシヤは叛亂を起し、歸路の遮斷されること必定であつた。

ベレジナ通過の後、幾多不運の者が冷めたい氷の中に、凍死したのと劣らない多くの悲慘を目擊した數日の間に、彼は決心した。

露軍が再び退却中のフランス軍の追跡を始めた、この艱難苦痛の裡にあつて、彼は軍國文學の最條件たる驚異すべき『第二十九戰報』を編纂した。それは一切を包括し、高貴嚴肅な言葉をもつて綴られ、辭句整然と流れるが如く、厭ふべき情態から怖しい破局への推移を物語り、退却の兩面が專門家の明快と、心理學者の理知とをもつて陳述されてゐる。或は心身顚倒して破局の夢を見てゐる者、他方には擧措日常の如く、快活を失はず、困難を折伏して新しい光榮を望見してゐる者を叙してゐる。その他飢餓と寒氣とで意氣消沈し、途上に仆れる兵士、馬を失つた騎兵、下士に代つて職務を遂行してゐる大佐、大尉の代理をしてゐる將軍、拋棄された輜重車、泰然として神聖隊に護られて步行してゐる皇帝、それらが悉く完全なる沈着、自主の印象を與へるべく綴られた物語であつて、最後に『皇帝の健康は嘗てなき良好狀態なり』といふ語で各章を結んである。

それは皇帝が帝國と同一視され、人々は彼を戰死乃至病氣に陷つたことゝ信じてゐたが、注意せよ、彼は歸り來りつゝあるといふ筆致である。

けれども、最も困難なことは、無比の慘敗を立派な文章にして公表することではなかつた。幾

多の艱難、恐怖に生殘つた人々を置去りにして歸らねばならぬことであつた。首長を不在とし、その名聲の魔力を取去つて、未だ終局になつてゐない危險に委ねて去ることである。

彼は元帥個人々々に會つて、出發の理由を說き、或は理屈をもつて、或は胸中を吐露して懇談した。彼は常に兵士よりも將軍を怖れてゐたが、よく彼等を義務の履行につなぐ言葉を發見するのであつた。

唯ベルチエーは命に逆つて、一緒に出發したがつた。

『私は老年だから、伴れて往つて頂きたい』

『君はユージエーヌやミユラーと一緒に、留つてゐて貰ひたい』

が、あくまでベルチエーが言ひ張るので、

『君は忘恩だ、卑怯だ！　軍の前で銃殺させるぞ』

とまでナポレオンは激語した。

人々は將軍連の離反の豫感を抱いたのである。

ナポレオンは十二月五日、質素な橇に乘つて、風のやうに出發した。

途上の總督や、同盟國、保護國に、一呼吸で吹き飛ばされさうな姿を見せた。唯その名が人の怖るゝところであり、尊敬を拂はすだけである。皇帝は秘書官の名で、三人の同行者と共に、ポーランド、プロシヤを横斷した。

彼は嘗て同じ條件の下に、運命に托して埃及を去つたことがあつた。彼は何等恐れることはなかつた。彼は常に何事にも會ふ準備をしてゐた。この旅中、彼は外國人のことを話すやうに、自己のことについて語つた。藝術家の自己認識をするやうに、わが生活の狀態を觀察する氣持であつた。彼はコーランクールを同伴した。彼と共に、ナポレオンは自己の事件を、さも他人のことのやうに議論した。

『予はこの戰爭の政治的機會や、目的について誤つたのではない。戰爭の仕方に過失があつたのだ。ヴイテブスクに停止してゐるべきであつたのだ。さうであつたら、今頃アレクサンドルは、予に屈服してゐるだらう』

またマレーの陰謀については、

『予の成したことは、悉くまだ脆いものだと思ふ』

と述べた。

この脆弱をどうしたら救治することができるか。帝冠を戴いた軍人でなく、眞に正統の王であることである。さうであれば王位が他のことを保證してくれるのである。彼はこの時、既にコーランクールと共にセント・ヘレナの備忘錄の試作をしてゐたやうなものであつた。

十二月十八日、前觸れもなく、彼はチュイルリー宮に歸着した。四十八時間前から、第二十九公報が『モニトール』紙に公けにされた。

ナポレオンは巴里が驚倒することを知つてゐた。困惑は彼の期待以上であつた。人々はその慘狀に激動した。人々はこれこそシャールマーニュ大帝の最後であり、カムビーズの遠征だと言つた。

皇帝は歸着すると、早速カムバセレス、クラルク、サヴアリー等と一切を掌中に收めて、仕事に取懸らうとした。宰相、陸軍大臣、警察大臣は、マレー事件を彼に報告させられた。彼はこの事件を第一に重大なことゝしたのであつた。

彼は額に皺を寄せて、その事を話し、一同に酷しい言葉を浴びせた。

『君達は予を死亡したものと想つたのだ。しかし、羅馬王もゐる！　君等の宣誓もある、原則もあり、學說もあるではないか。君達は將來のことについて、予に戰慄を感じさせる！』

人々は制裁を豫期してゐた。サヴアリーとパスキエーは觀念してゐた。彼等は怒りを受流してその場に留つてゐた。唯一人、セイヌ知事の、罪のないフロショーが罷免された。彼は市廳舍を暴徒のために、ホテルのやうに開放し、越權のことをしたと言ふ理由からであつた。

それから、もはやマレー事件については語らなかつた。各人胸に豫感を納めてゐた。ロシヤの役については沈默が强制せられた。皇帝はそのことを大臣達に簡單な言葉で說明した。

『幸運が予を眩惑させたのだ。モスコーに行つた。そこで平和條約を調印するつもりであつた。滯在が長すぎた』

これは正に誠意と侮蔑とをもつて語られたロシヤ遠征全史であつた。

上院への說明は更に短かく、

『わが軍は損害を受けた。しかし、これは季節よりも早く來た嚴寒の所爲だ』

といふのであつた。

彼を裏切らうとして、尙も彼に媚びてゐる人々に對して、侮蔑がその慣用語句の間からも、また態度からも逆つてゐた。或者に對しては、肩を聳かし、他の或者には背を向けてゐた。苦がい哲學者には、何もかも非常に見込が違つてゐたのである。

モスコー以後、彼の政策は悉く的を外れた。しかし、誰が彼以上にそのことを知つてゐたであらうか。

杯

(22) 前史を終る

ナポレオンは權威の强化を期待して、遠くモスコーまで遠征したが、却て反對の結果に到達し露帝は全く敵に化してしまた。

羅馬王の誕生は、相續問題を解消した筈であつたが、マレーの叛逆事件によつて、帝位繼承どころか、帝國そのものの基礎の微弱なことを暴露された。

左右の人々は、何故彼が些細な暴動に過ぎないマレー事件を重大視するか、了解に苦しんだ。ナポレオンから見れば、何故世人がロシヤ遠征の失敗にのみ驚愕して、マレー事件を閑却するかを不思議と考へたのであつた。

彼は帝室の基礎の脆弱なことを悟つて、ひたすらそれを心痛したのであつた。彼は、ブルボン家を排斥したが、ブルボン家の傳統の貴さを今更のやうに羨しがつた。

『自分の帝位も、三代も續いてゐたら、ビレネまで退却したところで心配はないのだが……』

と口惜しがつたのである。彼はルイ十四世が嘗て全歐を敵として、微動だもしなかつた權威に尠からず敬意を表するのであつた。

彼がコーランクールと一緒に、橇に乘つて巴里に歸つて來て見ると、一般の形勢は一層惡化してゐた。偉大軍隊も、ナポレオンに置去りにされてからは、悲慘の狀態であつた。皇帝に統率されてゐる間は、破れても堂々たる軍隊であつた。皇帝に棄てられて軍隊の無規律と混亂とは、意想外であつた。ミュラーが、總帥であつたが、その命令は一向遵守されなかつた。ミュラー自身もリトアニアの泥濘の道を歩みながら、自己の所領たるナポリ王國のことのみを考へてゐた。彼も早く歸國したかつたのである。

ケーニヒスベルグに歸着した偉大軍隊は、幽靈姿の難破船の如きものであつた。潰走の報は既に擴がつてゐた。各地各人それぞれの立場から反省を始めてゐた。それでも、プロシヤは同盟國であつたから、サンマルサン、ナルボンヌ、オージュローの諸將はプロシヤ王の晩餐に招かれた。

しかし、十二月三十日には、プロシヤ部隊の司令官であつたヨルク將軍は、獨斷をもつて露軍と休戰條約を締結した。續いて、ザクゼン軍はライプチヒに於て、ババリヤ軍はハノーヴアーに

於て、佛軍から離反した。フヒテやゲーテの叫びにつれて、ドイツには『民族萬歲』の喊聲があがつた。ヨルク將軍の想ひ切つた仕打の報道を耳にしたプロシヤ王は、一時顏色土の如くであつたが、次第に愛國者達に元氣づけられ、二箇月後には反佛同盟の仲間入りをすることになつた。

この形勢の甚しい逆轉に際して、ナポレオンは如何なる策をもつて臨んだか。

頼みとして殘つてゐるのは、唯墺太利のみであつた。皇后の父であり、羅馬王の祖父である。彼は汚名を雪ぐために、新しい戰爭の準備をする前に、帝室の婚姻關係に保證を求めたのであつた。武運は拙く戰死することがあつても、ナポレオンは帝室を存續させ、權力の歸すべき地位が空位であるとは言はせたくなかつたのである。

しかし、それはマリー・ルイズの晴着や、羅馬王の產衣を振翳すも同然の政策であつた、彼が俄かに攝政の制度を決定し、マリー・ルイズがそれに當り得るやうにし、幼兒ながらも、羅馬王に戴冠式のできるやうに取計つたのもそのためであつた。

象徵的の儀式を行つて置けば、彼は死すともナポレオンの名は生殘る筈である。かうすればマリー・ルイズは攝政であり、羅馬王は皇太子である。攝政と皇太子を保護しない父なり祖父な

りはないだらう、と彼は考へたのである。

彼はこの最後の窮策を實行するに當つて、狼狽の色のなかつたことは偉とすべきところであつた。彼はフランス史上の王妃もしくは母后の攝政制の典禮を仔細に研究させ、王子の戴冠式についても古文書の渉獵を命じて遺漏のないやうにした。彼自身は國防軍隊の組織の方針を立て、いはゆる『地から湧かしたか』と想はれた立派な編成を完了した。と同時に、冬夜突如としてフォンテンブローに法王を訪問して、妥協を試み、舊交を溫めて、皇太子戴冠式の打合せをし、信徒の慰撫を慫慂した。

後に法王廳の樞機官達の諫めによつて、法王は約を取消すことゝなり、莊嚴の儀式はできなかつた。けれども、ノオトルダムの代りに、エリゼ宮で皇后の宣誓式を行ひ『皇帝は常に、勝利を齎す武器に訴へて敵を混亂させ、歐羅巴の文明と君主達を無政府狀態に陷るのを救つた』といふのは、その時攝政皇后の朗讀した一節である。

ナポレオンは、ロシヤとの同盟に於て露帝を信じたと同樣に、今度は墺太利皇帝を信じた。彼は墺帝の宗教、信仰及び名譽に依賴し、

『オーストリーに就いては何等憂ふべきことはない。シュワルツエンベルグ親王が今日あたり來着する。親善の關係は、兩帝室間に前以上に存續してゐる』

と斷言した。

然るにプロシヤのヨルク將軍より一箇月後れて、この親王も露軍と休戰の協定をした。オーストリーはもはや同盟國ではなく、中立國と化し、それもいかにも怪しい中立國であつた。さうして、ナポレオンのために調停をする提議をすると言ひ出した時、極めてそれが好意であつて、ロシヤ、プロシヤと平和になることを信じた。が、實は武裝調停であつて、ナポレオンを壓迫するためのものであつた。

彼は敵の要求する條件が穩和なものであるとは信じなかつた。

『英國はフランス帝國の解體を主張するが、巴里の郊外まで進擊して來たことがあるか。フランスは白耳義の併合を決して斷念するものでない』

彼は如何なる經路を辿つて皇帝の位に上り得たかを忘れてゐなかつた。革命の重要な遺産であつた白耳義を棄てることは、彼の面目として能はぬことであつた。彼には男らしさの立派な感情

があつた。勿論、モスコーから遁げ歸つた時、彼は犧牲を覺悟してゐた。

『しかし、その時機は微妙であつた。下手な行動を採り、不適當な言葉を以てしたら、名聲を傷ける虞れがあつた』

彼の聲名と彼の與へる恐怖感が、當時の彼の有する最良の武器であつた。彼はこれを利用し、戰場を馳驅し、戰勝を得た際に墺帝の調停を俟ち、ロシヤに於ての汚名を拭つた後に、犧牲を甘受する必要があると覺悟してゐた。

境遇からしても、心理的にも、極めて複雜な狀態にあつた彼の思想が、浮動的になるのは已むを得ないことであつた。聯合諸君主間に、要求の一致點を見出してゐなかつた。と同樣に、ナポレオンは讓歩に對して定見ができてゐなかつた。

プロシヤは竟に宣戰を布告した。墺帝もメツテルニヒも聯合側に寢返る決心を旣にしてゐた。が、まだ假面を被つてゐた。ナポレオンはまだそれを看破してゐなかつたから、五月二日のリユツツエンの最初の勝報を、急いでオーストリー皇帝に通じたくらゐであつた。疑念は多少ないではなかつたが、同盟關係をできるだけ引伸したかつたのである。

最期を覺悟して、愛するサン・クルーを出發したのは四月五日である。一八一三年五月一日、彼はリユツツエンの平野にゐた。彼はイエナ戰爭のそれと同じ痛擊を敵に加へようとしゐた。素質から見れば、彼の急速軍隊は著しく從前のものより低下し、疲勞せる老兵に急募の兵を加へたもので、それに騎兵が乏しかつた。

ナポレオンはこの弱點を補ふために、始終若い兵士の傍に立ち、砲火を冒して鼓舞激勵した。グスターフ・アドルフの戰死した古跡のリユツツエンで彼自身も戰死したら、何等思ひ殘すことはないと思つた。

しかし、リユツツユンの夕は、ナポレオンの光り輝いた時であつた。

『予は再び歐洲の主人である！』

と、彼はこの幸福な戰勝の後に言つた。

彼の地位を回復するには、偏に軍事上の成功によるより他に方法はなかつた。けれどもリユツツエンはイエナでなかつた。それから二十日の後に、バウツエンで、再び同盟軍を擊破する必要があつた、それは勝利で、敵は全滅を免れたが、昨夏皇帝がスモレンスクからモスクワ河の間で

博した勝利に似たものであつた。

二日目の終りに、壯丁の精力の盡きたことを感じた。

『どうしたことか。こればとの殺戮をして何等成績の上らぬこと！　捕虜が全くない。彼等は釘一本遺してゐない』

この時、護衛の騎兵の一人が殺された。

『デュロック、今日は運命の神が、われらを恨んでゐるぞ』

數時間後に、一彈がそのデュロックにも命中した。この男は皇帝の寵愛を受けた稀な一人であつた。彼はその日の午後中、天幕の前に腰を掛け、親衛兵の方陣に圍まれ、默してゐた。命令を受けに來たドルオーに向つて、

『一切明日にしよう』

と答へた。

『可哀相に、子供を一人失つたのだ』

と兵士等は言つてゐた。

子供一人といふのは可愛がつてゐた兵士のことであつた。

一旦傷心のことがあれば、硬くなつて、こみ上げて來る落膽の情を抑へることができなかつたのである。それでも、將軍達に對すると、再び傍若無人であつた。

彼はこの人心の傾向を計算の中に入れる必要があつた。皇帝として、彼が平和を念としてゐることに、人々をして疑惑を挾ませてはならぬのである。事實、皇帝はそれを心に掛けてゐたことの證據を、一大軍事上の利益を賭して迄示したことがあつた。それといふのは、再びオーデル河の線まで達した時、彼は休戰の決意をした。

この事について、後にセント・ヘレナで

『拙いとは思つたが、墺太利との關係を始末したかつたのだ』

と告白してゐる。彼の計算は其處にあつたのである。五月十七日に、リユツツエンとバウツエンの間から墺帝に書を送つて、ロシヤ、プロシヤ、英國、乃至西班牙の叛徒とも平和談判をする準備のあることを通じた。

六月四日には、彼は前進を止め、ブライスウイツの休戰條約に調印した。これには躊躇しない

ではなかつた。彼はこの休戰期間を利用して、墺國が武裝を完備し、その上でロシヤ、プロシヤに接近するだらうといふ豫感を有つた。しかし、墺太利に不快を與へないことも大切であつた。墺太利に干渉の口實を與へず、調停者として立たせる必要と、同盟維持の希望とが、他の考慮を抑へてしまつたのであつた。ウインナ宮廷と接觸を保つことが、彼の原則であつた。

この時まで、彼は墺露の聯合軍か、露普の聯合軍を敵にするだけであつて、全體の聯合軍を擊破する必要はなかつた。何よりも、これは回避しなければならぬことであつて、殊にフランスの勢力が盡きた際に此事があつたのでは、それこそ最後だと感じたからである。

けれども、遺憾ながらその時機は切迫してゐた。フランシス二世は國家的良心は有つてゐても父親としての腹を持合せてゐなかつた。だから、娘や孫のことに頓着して行動を決する筈はなかつた。マリー・ルイズをナポレオンに嫁せしめたが、第一に政治のために娘を犧牲にしたことであつた。今二度目の犧牲を彼女に拂はせようとしてゐる。

今や時勢は一七九八年の昔に逆轉しつゝあつた。埃及遠征から歸國した時代に立戻つたのである。

聯合側は以前ナポレオンの採つた政策を逆に應用し、更に進んで、ナポレオンとフランスを引離す策に出た。聯合諸國は漸く一致の政策を採るやうになつた。六月にはカリツシュの協定によつて、プロシヤとロシヤとは單獨媾和をせぬことを約し、英國とはライヘンバハの條約を締結して、同盟國の共同一致でなければ、平和條約の締結を行ふ能はずといふことにした。これはアウステルリツツの大戰で墺國が破つた一八〇五年の協定の復活であつた。

墺國は調停の立場から交戰國の仲間入をする準備を進めた。休戰以來の交渉中の平和條件をナポレオンに拒絶させて、破裂を誘導した。聯合側では平和條件をナポレオンが受諾すれば、受諾のできない追加條項をもつて苦めることにし、拒絶すれば戰爭の責任を彼に嫁する計畫であつた。さうして、結局彼の讓位がフランスにとつて、名譽ある平和を實現し得る途である旨を暗示するのであつた。

事實ナポレオンを失つたフランスは、課せられる平和條件を諾々として甘受するより他に方法のない實力と化することは明瞭であつた。しかし、佛國民をして、この魂膽を看破し得させないやうに諸國は力めて佛國民の自負心名譽心を傷けぬやうに注意を加へた。

ナポレオンは『策略には老巧なものだ』と看破したが、疲勞せる佛國民にはそれを看破し得る元氣がなかつた。

休戰の八週間は、ドイツの地にありながら、ナポレオンの强力なことを見せてゐた最後の期間であつた。

六月二十八日のメツテルニヒの會見には、ナポレオンの苦惱が明かに見えた。彼のオーストリーの叛逆を憤つて、帽子を地に投げつけた。しかし、それはもはや虛勢であつた。部下の元帥將軍は非常に平和を憧憬してゐた。彼は不利な平和はまだしも、恥辱を忍ぶことができないので心にもなく將軍達を叱咤して平和を否定した。が、心の中では彼こそ最も平和を欲してゐたのである。

彼はマインツまでマリー・ルイズを呼び寄せた。それは恐らく彼女によつて、フランシス二世の心を翻へさせようと期待したからであらう。

エルフルトでは、タレーランがナポレオンの積極意志を抑制しようとして、裏切の態度に出たプラーグの會議では、コーランクールがタレーランと同じ態度に出て、强硬態度を聯合側から示して貰ふことにした。彼は原則のみを承認し、細目については後日の商議に讓る旨をプラーグに通知したが、聯合側は細目の保留は承認できずと言ひ、八月十日夜半に、ロシヤとプロシヤの軍は戰鬪開始を通知して來た。

ナポレオンは翌日新たに讓步を提出した。が、墺國は單獨に何ともできぬと言ひ、玆に戰爭が開始された。要するに、休戰期間は敵の戰鬪準備に資する猶豫時間に過ぎなかつた。聯合側の增援は着々來着し、瑞典のベルナドツトすら聯合軍に加擔して來着した。

聯合軍の總指揮官にはシユワルツエンベルク親王が就任し、戰鬪の一般方略としては、ナポレオンの直接指揮する軍を攻擊することを避け、ナポレオンの部將を攻擊目標とした。さうして、自由のために諸民族を糾合し、自由の敵を伐つといふ、革命時代の逆を現出した。フランス革命の一方の雄であつたモロー將軍もナポレオンの敵となつた。

時勢の變遷と共に、自由の女神も陣營を變へたのである。

かうした逆境に面したナポレオンは眞に武將の天才たるところを發揮した。敵多くして益々彼の戰術は冴えたのである。八月二十三日、ブリツヘルをシレジアに粉碎し、ダヴー及びウヂノ

ー將軍は伯林への道を開いた。同じく二十六日にはボヘミアを下つて來たシュワルツエンベルグの二十萬の兵を迎撃するためにドレスデンに入城した。

二日間、皇帝は危難を物ともせず、雨と泥濘の中に、昔ウルムで戰つた時のやうに、帽子の緣を傾け、身をもつて奮闘した。前日ドレスデンの城門まで押寄せた敵は隨所に打破られ、アウステルリツツ、ワグラムの日が再現したやうであつた。ライン河まで退却を主張した者も、プラノグの平和條件を斥けたことを祝福した。

之れが八月三十日追撃に長追ひしたために、ヴアンダンムが却てクルムで捕虜となり、ドレスデンでの努力が水泡に歸した。彼はもはや、戰勝の報も、戰敗の報も、冷然として受取つた。沈着なことはストイツク武士の忍從の態度であつた。唯、戰術から見て、自己に過失の有無を氣にするのみであつた。

『これが戰爭だー　朝は高く、夕は低しだ』

彼は地圖を披いて『シーザーの死』の台辭を口ずさんだ。

ヴアンダンムが敗北してから以後、禍難と凶事とが相繼いで起つた。部下の諸將は順次に敗北

した。マクドナルドはシレジアに於て、ウヂノーはグロスベーレンに於て、ネーはデンネウイツに於て敗れた。唯ナポレオンの救援進軍する所は悉く敵の敗北となつた。

今や伊太利には墺軍が侵入し、ライン聯邦には離反の兆が見えた。ババリヤの叛逆は、佛軍をドイツに於て危殆に陷らせ、愛國獨逸聯盟、秘密結社、テューゲンドブント等が暗中飛躍を旺んに始めた。

彼の周圍には次第に不安の色が濃くなつた。從順であつた部下の元帥將軍達も彼に直言反駁することが多くなつた。けれども、人民と兵士は依然として、彼に忠誠であつた。

彼は戰場をオーデル河とエルベ河との間に移し、北ドイツの要塞を固守してゐる佛軍と呼應して、伯林進撃の案を立てた。この妙案が實行されたら、形勢が如何に變化するか豫測ができないのであつた。將軍元帥等の望鄕の念と怯懦とがこれに反對し、三日間の討論の後、ナポレオンは心ならずもその案を捨てライブチヒの平野の方へと軍を移した。

十月十六日から四日間、いはゆる民族戰爭が行はれた。最初の日は吉であつて、光明が見えた。墺將メルフエルトが捕虜になつた。彼はこれに墺帝への和解を傳達させたが、メルフエルト

は回答を齎らさなかつた。その間にザクゼン軍は逆に大砲を佛軍に向け、ライン保護聯邦は明かに敵に化した。ベルナドットの大砲も勿論佛軍に放たれた。

この戰は一種の最終審判のやうなもので、復讐があり、古人と今人とが入亂れ、フランス帝國の弱點が現はれた。ナポレオンは、冷靜沈毅、面上毫も傷心の色を現はさず、冷然と凶報を聞流してゐた。

十萬の佛軍が三十萬の敵と對陣し、軍需品は悉く盡きたので、玆にナポレオンは退却の命を下した。エルステル河の架橋爆破の早かつた爲め、誠實と信賴とを殊勝に現はしてゐたポーラン軍が、無殘な溺死を遂げ、哀れな象徴と化した。この十月十九日こそ帝國終焉の日と目すべきであつた。

退却の行軍は續いた。軍はエルフルトを經由した。五年前に露帝が彼と立ち列んで諸王の喝采を博した豪華の宴も、今は夢である。退却につれて、諸將元帥等は次第に不遜になり、呪詛を始めたミュラーが、ナポリに歸ると言つて、袂別に來た時、彼は一切を忘れて、幾度となくミューラーと抱擁して別れを惜んだ。

十一月二日、ナポレオンはマインツに着いた。北ドイツ駐屯の兵を除いては、ドイツから全軍撤退を了した譯である。マインツからカンバセレスに手紙を書いた中に、

『君に、常よりも平靜沈着な事を見て貰へぬが殘念だ』

と言つた。

終局に近づいて、ナポレオンの眞の面目がまた〳〵現はれた。彼は自己の歴史を理解した。すべての果敢なかつたことを悟つた。生命は勿論、帝位も權力も、宮殿も金錢も、悉く彼の執着の種ではなくなつてゐた。彼は兄弟等が空虛な王位に執着し苦悶してゐるのを憐憫の目をもつて眺めた。

彼は彼自身の運命と史上永遠の名とを顧慮するのみであつた。彼は眞の光榮の何であるかを次第に深く認識した。人間を支配し、常に人間の想像に訴へてゐた彼は、他の表象によつて未來を支配することの殘つてゐることに氣がついた。彼の威力の秘密の一は、常に彼の目標が普通以上であることであつた。

(23) 逆運流轉

これから後のナポレオンの歴史は、悲劇の進展である。常に彼に拮抗しつつあつた時の力が、彼の死命を制することになるのである。

一八一三年十一月九日、サンクルーに歸つて、翌年四月七日讓位することになる。その間、僅かに五箇月である。次に百日時代がある。いはば、猶豫期間であるが、その間の事件が、如何に充實してゐることであらう。

ここに我等の見るのは、悲境試錬に會つてゐる異常人の姿である。

倒潰の中にあつて、他の者であつたら、畏縮し、萎靡しない者があるであらうか。意志、性格の強さのみでは不十分である。彼自身の地位について、皇帝には一家の見領があつた、統領になつた最初の年から起るべき事柄が、今日到來したのである。國境保有のため、革命政府代表として、飽くまでも遂行せざるを得なかつた戰爭の最後の危險が、今到着したのである。

彼はこの任務遂行に他を顧みなかつた。寧ろ最後の塹壕に飛び込み、彼の成した神聖領土に立籠り、フランス民族の夢と共に死することを欲したのであつた。

今や再び敵國外患の脅威時代となつたのである。一七八九年以來大事變と生命を並行させたルニヨー・サン・ジアン・ダンジュリーは、立法院に於て、祖國の危機、大召集、ヴアルミー、革命曆第三年とチユーリツヒ、同八年とマレンゴーの戰役とを喚起して、人々に訴へた。

ナポレオンも、これらの時期と共に、政治思想に於ても一循環したのである。二十五歳にジヤコバン黨の武人となつて以來、今漸く四十四歳である。再婚して正當君主の職務を行ふやうになつた彼は、共和政府のために、聖ロツク階級上の王黨を掃射した時代からまだ、さう遠く時を距ててはゐない。

彼は境遇に隨順し、時勢と共に變化したのである。彼の先輩であつた人々も、まだ職務を遂行して居り、劇中の人物も殆んど揃つてゐるくらゐで、一切が全く短期間のことであつた。追放せられてゐたバラスには、近く歸國許可の令が發せられやうとしてゐた。ナポレオンはカスチリオーネ公のオージユローに書を送つて、

『再び昔の長靴を穿き、九十三年の決心を繰返さねばならぬぞ』

と督促した。

然るに、この元帥は、舊フランス王國の白旗を掲げる最初の一人となるのである。また、シエイエスは上院に現はれて、ブルボン家復歸の議決をするのであつた。

要するに、一七九三年の長靴や、當時の言葉を再び採用するだけでは、不十分であつたのである。再び勇氣を振ひ出す必要あるにも拘らず、撥條は既に破れてゐた。『斷頭台の恐怖を、今は戰爭の聲に聞く』時代と化してゐたのである。十八歳の募兵、隨所の徵兵忌避者、都市の頽廢精神では、ヴアルミーの元氣の要素とはならぬ。ブリユツヘルを擊つたところで、ブランスウイツクのやうには退却せぬのも道理であつた。

一八一三年末の侵入者は、單にブランスウイツク一人ではなく、六十萬の敵が、ライン河にも、ピレネの門戸にも攻寄せてゐた。舊國境の限界内にフランスを押戻さうと聯合した歐羅巴そのものが來てゐたのである。

この際、ナポレオンは、全局と枝葉の細部、その何れに於ても問題を明確に捉へてゐた。

『一年前には歐洲が予に歩調を合せ、今は全歐が擧つて予に反抗してゐる！』

今は彼を選ぶか、昔の國境を甘んじて受けるかであつた。ルイ十八世かナポレオンかの何れかである。フランスの大衆も、聯合軍もブルボン家を殆んど忘れてゐた。

然るに、最も忠實な王黨以上に、ナポレオンはブルボン家の復位を豫想してゐた。完全な共和國の領土維持を宣誓して皇帝と共に、フランスが防禦に當るか否かが問題であつた。事情通の一人は、ナポレオン失脚の曉には『革命のフランスは抵抗點を一も有しない』と斷言したくらゐであつた。

彼はその問題の解決を百日時代になつて試みるのである。今、彼は輿論の支持を求めてゐた。輿論は卑劣にも、彼をして妥協排斥に唆かした者として、大臣マーレーを非難した。彼がマーレーの代りにコーランクールを任命したのはその爲めであつた。

彼は必要な犧牲と節制とを敢てしたのである。これに妥協を可能と信じたからである。プラーグで平和條約を結ばなかつたのは、時機を逸したものであるとして議院は皇帝を非難した。彼は交渉記錄を提出して辯明した。しかじながら、久しく屈從を強ひられてゐた立法院に、俄かに言

論の自由を許された際であつたので、徒らに無益な動議の提出となり、絶對權力、兵役義務に對する不平、及び卽時平和締結の要求となつた。

加ふるに、言論の自由より出る建議の多きに、重大な時局に彼を忙殺せしめるのみで、內外に皇帝の威嚴を減殺するのみであつた。要するに、言論解放は失敗であつて、立法院に休會を命ずることになつた。

玆にナポレオンは再び獨裁官の面目を發揮し、一八一四年一月一日の、代議士等に對する彼の罵倒となつた。

『現在のフランスに何が必要か。それは會議ではない。辯士でもない。將軍である！　君等の中に、一人でも將軍があるか。帝位は何だ。四本の木に天鵞絨を被せたものだ。しかし、君主といふ意味では、取りも直さず予だ』

更に、

『君達は英國に忠實な人々によつて引摺られたのだ。君達の報告委員レイネ氏は、ブルボン家と內通してゐる惡人だ』

まことに凄じい言葉であつた。

しかし、この時も制裁はなかつた。代議士等は各州に追返され、レイネ同樣ルイ十八世のために運動してゐた者は二三に止まらなかつた。政治上のこれらの配慮は、彼にとつて些々たることであつたが、その放任に既に自暴自棄の徵があつた。

これに反して、成功は聯合軍の微妙な工作の方にあつた。彼等は不斷堅持の方法に出て、終始一貫の思想をもつて進み、人心の機微を巧妙に識別してゐた。彼等はフランスとフランスの元首との間を隔離し、自然の國境を容認する用意を有するやうに信じさせ、曖昧の點を殘して、何時でも取消訂正のできるやうに圖つた。

それは依然としてプラーグからの技巧の連續であり、一層發展完成させたものであつた。『ナポレオンは理解して拒絕し、輿論は誤解して皇帝に罪を歸する』ことを看破した方法であつた。フランス人の考では、聯合軍はリューネヴイル條約か、アミアン條約へ後戻りするくらゐで滿足するものと信じてゐたのである。

聯盟はこの錯覺を消さないやうに注意した。從つて、明確な條件の提出を避けた。平和の基礎

條件となるものも論議とすることを避け、休戰について語ることすら警戒してゐた。これが一八一三年十一月のフランクフルトの交渉當初の實狀であつた。根抵となるものは、取りも直さず、フランスに留保させる領土のことであつて、これに對する說明拒否は、故意に曖昧なところを殘さうとの下心からである。悉く戰爭の結果に俟つべきであることを意味し、いはゆる基本條件を本質的に動的のものとしたのであつた。

更に聯合側では、一八〇五年の協定を復活してゐた。英國の同意は常に留保され、露、墺、普から佛國に提出した前文は、公式には英國の關知しないものであつた。

ナポレオンは、この『メッテルニヒの詭計』を看破してゐた。メッテルニヒは論議よりも前に保證を欲してゐた。それをフランスはそのまゝに熱心に受け容れ、直ちに皇帝をして承諾の意を表せしめようとしたのである。

これはブラーグの時の如くであつて、諸といへば、聯合側は更により以上のことを要求するのであつた。メッテルニヒの回答中には『フランスからアントワープを取上げることが、何より以上に英國の利害として、本質的のものなることを考慮せられたい』とあるキャッスルレーの訓令

を引用してあつた。

かやうに、戰爭と侵入との意義は全貌を現はして來た。一八一四年一月には、オランダが謀叛し、オランジュ家を呼び返した。聯合軍はライン河を渡り、瑞西の中立を破つた。勿論それはナポレオンの權勢の過大を忌むだけであると釋明された。がそれは無論、表面の言葉である。

これをナポレオン以外の一人が看破した。卽ち共和主義の元勳であつたが、全盛時代の帝國から故意に隱遁してゐたカルノーである。彼は國難を見て敢然として帝國に奉仕を申出た。カルノーと俱にかつて、公安委員會が、ボナパルトを革命の後繼者と認めたことがあつた。白耳義併合の主役をつとめたカルノーは直ちにアンヴエルス(アントワープ)の總督に任命された。

玆に一七九三年の精神が更生した。ナポレオンがコーランクールに向つて、

『フランスを舊國境に歸れといふのか。それはフランスを卑めるものである！　戰禍がこの國民にかやうな平和を甘受させると思ふことは間違ひだ。そんな平和條約を結ぶ卑怯な政府があつたら、六箇月後にこれを恥辱と感じないで非難しないフランス人は一人もない』

と言つた。

これも以前からの、彼の堅い決心を物語るものである。ロシヤから歸還した後、幾程もなく、既にモーレーに向つて、『こんな疲弊した國民から信任を失ふであらう。若し自分でも顔を赤くするやうな條件で平和を得るのであつたらだ』と言ひ、更に『非常に予を崇拜し、恐らく怖れてだらうが、フランス人が何時の政府に對してよりも、予を嘲けるだらう』と附言してゐるのでも解る。

時局が益々急迫して來たが、彼は飽く迄も危險を冒すことにした。彼は依然として、同一人であり、自由な精神であり、解脫した人のやうであつた。

戰爭のためには細心の注意をもつて準備し、成功のために一切を忽せにせず、他人のやうな冷靜な觀察を自己の位置に配つてゐた。仕事にも善意を見て淸算し、輕く動けるやうにして、談判の際、補償として保持してゐたのは、エルベ河の要塞と伊太利とである。但し法王はローマに歸り、西班牙にはフエルナンド七世が王位に復した。尤もこれによつて、ナポレオンは五年前から引摺つてゐた重荷から解放された氣持であつた。

オーストリーは依然として彼の希望をつないだ國であつたが、必ずしも敬意を拂つてゐなかつ

た。聯合軍がライン河を渡つたとの報に、一同色を失つた。が、彼は妙に快活であつて、愛兒の羅馬王をあやしながら、

『パパフランソワを負かさうね』

と、如何にも樂しさうであつた。パパフランソワとは墺帝のことである。

國庫をロワール河の南に移さうと忠告した者に向つて、

『コサック騎兵が巴里に姿を現はしたら、帝國も皇帝もないではないか』

と笑つた。

一月二十五日の朝、彼は巴里を出發した。もはや最期の覺悟である。

重要書類は燒棄て、愛兒に袂別の接吻をした。マリー・ルイズを攝政に、ジョゼフを代行將軍にした。ミュラーは聯合軍に內應してユージエーヌを攻擊し、伊太利軍をフランスの爲めに役立たぬことにした。一月一日には『三箇月以內に平和にして見せる。敵がわが領土から驅逐されるか、予が戰死するかだ』と宣言した。

フランスを戰場としたこの最後の戰爭は、裏面は醜惡であつたが、想の大膽にして天才的なと